いぶき無てもゆとよめるいかゝ右陳云古歌にさしも草もゆと
よみたればよむなり判者俊成卿云左歌さしも草露おきあへず
もゆらん事もにはかにあまりなるにやと云々

葎

正治二年百首　式子内親王

建長三年鳥羽殿十首歌合　正三位經家卿
山家秋風

家集　俊成卿女

拾遺上
古里はむくらのゝきもうらかれてよる〳〵はるゝ月のかけかな

柴の戸をさけるむくらのさしこめて風たに夏はいらぬなりけり

むくらはふ柴のいほりに音信てをきの葉すくる夜はのあきかせ

むくら生て荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすたく也けり　業平朝臣

手向草

題不レ知　河嶋皇子

長歌　よみ人しらず

萬一
白浪のはま松か枝のたむけくさいくよまてとかとしのへぬらん

なら山すきて、ものゝふの、うち川わたり、をとめらに、あふさか

山に、たむけ草、いとゝりおきて、わきもこに、

久安百首　前參議教長卿

家集　四行上人

正治二年百首　寂蓮法師

百首歌草廿首中　民部卿爲家

芭蕉

秋風にあふはせをはのくたけつゝ有にもあらぬ世とは知らすや

風ふけはあたにやれ行芭蕉葉のあはれと身をもたのむへき世か

きり〳〵すまちかきかへにおとつれてよひの雨ふる庭の芭蕉葉

いかゝするやかてかれ行はせをはにこゝろしてふく秋風もなし

莫鳴菜

天仁三年四月師時卿家歌合　藤原定通
題不レ知　よみ人しらず

なのりそをかりほす蜑のあさ衣おのれ去をるゝこひもするかな

萬十二
去かの蜑の磯にかりほすなのりそのなは告てしをなそ逢かたき

新六
和歌の浦に磯のなのりそそれはかり僅にかけるあまのさひしさ　民部卿爲家

新六三
いたつらに浪にゆらるゝなのりそを木の丸殿にいかてうゑまし　信實朝臣

同
磯かくれのりにましれるなのりそのなのりも今は去る人もなし　光俊朝臣

和布

洞院摂政家百首

思ニ他人一

見和布

六一　うきめかるあまの小舟は我なれやうらみそわたる朝なゆふなに　正三位知家卿

六五　萬四　難波かた玄ほひのなこりあくまてに人のみるめを我はともしき　よみ人しらず

六三　續後拾雜上　興風集　白浪ををりかけあまのこく船はいのちにかふるみるめかりにか　同

六四　わたつ海に神のいはへるみるめをはみとせにきてそ蜑も刈てふ　同

夫木和歌抄卷第二十八終

夫木和歌抄卷第二十九

雜十一

木　松　椿　桂　楸

枝保持　槇　杉　槍　梨　李

杏　柏　椎　栗　槻

枌　令法　櫧　芭　妻摩　歡合木

題　胡桃　樫　榛　猿滑　楂　樫

漆　もちゐの木　つけ　こふし　ひいらき　そはの木

ねすもち　こめ〳〵　うはめの木　ねふの木　すろ　めつら

槇　柿　桑　あせみ　逸師　樟

柴

木

文集百首抑柳作高林稱桃成老樹　慧鎮和尚
六帖題むし　權僧正公朝
栗田右大臣念佛申されけるによある夏の事に侍ける
ひきうゑし木々の梢にとしたけて宿もあるしもおいにけるかな
ことわりをゑらて木をはむ蟲なれは深きみのりを聞かひもなし
七重寶樹風には一實相の理を調へ　能宣朝臣
久安百首　皇太后宮大夫俊成卿
正治二年百首　前大納言隆季卿
詩　後京極摂政
文永五年毎日一首中　參議爲相卿
六帖題　民部卿爲家
同（流水）　同
同（山水）　同
寶治二年百首　正三位知家卿
嘉祿三年百首寄レ木戀（そこのながれ水）　光俊朝臣
柚木　同
三百六十首中（まは水）　民部卿爲家
宋集戀　好忠
なへてよのたねともみえぬ柑かな玉のうゑ木のはなのすかたは
なへてよのたねともみえぬ柑かな玉のうゑ木にかさる白雪
わか葉さすたまのうゑ木の枝ことにいくよの光みかきそふらん
わか葉さすたまのうゑ木の枝ことにいくよの光みかきそふらん
いつみなるゑのたのもりの千枝なから玉のうゑ木にかさる白雪
陰きよき七重のうゑ木うつり來てるりのとほそも花かとそみる
なへへなる植木のかけも暗からす夏の夜ふかきの法のひかりに
また玄らぬ玉のうゑ木の面影もゆきのこすえにみるこゝちする
新六二
すてられし昨日の山のふし折木さてもかひなく世にやくちなん
新六三
難波潟潮干しほみちなかれ木のうきてはゑつむ身こそつらけれ
新六六
かさこしにたてるやま木のうは枝は花も紅葉もあるときそなき
いかにせんをのへに立てるうつほ木のあな戀しとも言ぬ思ひを
わたつ海のそこの流れ木いたつらにからき思ひに沈みはてつゝ
雲葉
杣山にたてるふし木のいたつらになとひく人のなき身なるらん
柴木たくいほりにけふりたちみちてたえすもの思ふ冬の山さと
よとゝもに浪こす磯のそなれ木のゑつえや戀のころもなるらん

百首歌旋頭歌（うき木）　俊賴朝臣
題不レ知　よみ人しらず
千五百番歌合建長八年百首　寂蓮法師
建長八年百首　從二位行家卿
建保四年百首　從二位家隆卿
六帖題　正三位知家卿
承久二年四季百首　前中納言定家卿
家集（えたなき）　四行上人
同（ふがり木）　重之
新千雜下
飛鳥河浮木に積る淡雪の浪立來れは頼もしけなきよにも有かな
萬七
まかなもてゆけの河原の埋木の顯はるましきことにあらなくに
五月雨はゆけのかはらの埋木もあらはれてこそなかれきにけれ
むもれ木のかれたるえたも花さきし昔になしてふれる玄らゆき
和歌の浦の浪のうもれ木いく代へて君かめくみの春をしるらん
新六六
ふる河の玄けきぬなはにつなかれてなかれもやらぬよゝの埋木
拾遺員外
なみた川春の月なみたつことに身はゑつみ木の玄たにくちつゝ
野にたてるえたなき木にもおとりけり後の世玄らぬひとの心は
新千物名　惠慶集
わさとこそくり放つめれ曲木にはひまつはるゝあをつゝらをはく
此歌は惠慶法師のもとよりあをつゝらをこにくみてなつめそ
りゑ
などを花にませておこせたる
われなからうたて朽木のみにしあへは心のはなの玄たに有けり　寂蓮法師
風わたるをたのすくろのときは木に秋をきかするもすの聲かな　民部卿爲家
すみかそと思ふもかなしくるゝ木をこりつゝ人のかへる山へに　和泉式部
緑千雜體
はゝき木は思ふゝせやと思へはや近つくまゝにかくれゆくらん　俊賴朝臣
おもてゝ　これ家
冬山の雪間にたてるあはれ木のうへにそくゆるかくすつみなく　順
はゝ
心をしあまのうき木になしつれはなかるゝ水に玄つまさりけり　千里
心似空木浮水上（あまのうきゝ）

寶治二年百首寄レ木繁（あさきのみやき）　取かぬるあさきのみやき節去けみさもわれにくゝ人のいふかな　信實朝臣

松

題不レ知　萬十二　ひら山の小松かするゑにあれこそはわか思ふ妹にあはすやみなめ　人丸

同　六二　伊勢集　新古繁五　わかこふるみのゝを山のひとつまつむすひし心いまもわすれす　よみ人しらず

萬二　のちみんと君かむすへるいはしろのはま松か枝を引むすひまさしくあらは又かへりみん　人丸

萬二　いはしろのはま松か枝を引むすひまさしくあらは又かへりみん　有間皇子

結松枝　萬二　岩代の野なかにたてるむすひ松こゝろもとけすむかしおもへは　意吉丸

見結松作歌　萬廿　やちくさの花はうつろふときはなる松のさ枝をわれはむすはな　中納言ノ右中辨大伴家持

題不レ知　萬十　風吹は紅葉ちりつゝ去はらくもわかのまつはらきよからなくに　よみ人しらず

同　同　足引のやまかも高きまきもくの木するゑのまつにみゆきふりけり　同

同　萬四　きみにこひいともすへなみなら山の小松かもとに立なけくかも　同

同　萬十二　とよくにのきくのはま松心にもなにとていもにあひしそめけん　同

恋縁がもとへ　かひかねの松に年ふる君ゆゑにわれはなけきとなりぬへらなり　貫之

元服の所にまかりて　春日野にいまもえいつる千代の松木高きかけとはやもならなん　能宣朝臣

圓融院御時紫野の子日に松のもとにて　檀子賀　ひく人もなくてちとせをすこしける老木の松のかけにやすまん　法性寺入道関白

家集巻歌中　おとは山みねの霞はたなひけとまつの木するゑはかはらさりけり　俊頼朝臣

三百六十首中　をしほ山をのへのまつの枝ことにふりしくゆきは花と見えつゝ　好忠

建保二年名所百首　をしほ山夕霜去ろきまつのはのちりもいく代のとしつもるらん　従三位行能卿

洞院摂政家百首　去らとりのとは山松の木のまよりさえたる月にあきかせそふく　同

文永五年毎日一首中　われはかりともとそたのむ小倉山おなしふもとのみよのふる松　民部卿為家

建長七年顕頼卿家千首歌　いたつらにたてりしものをふる松のよこねかちなる老の後かな　信實朝臣

六帖題　新六三　薬すくなに吹からさるゝ浦まつの去ほ風さむみなをたてるかな　同

家集　おいゆけは末なき身こそかなしけれかた山はたの松のかさをれ　西行上人

承安三年七月右大臣家歌合庭松　さきくさの三葉四葉にえたかはす松の千とせはきみかまに〳〵　後嵯峨法師

正治二年百首山家　此歌の判者藤輔朝臣云松を三葉四葉といはんこといかゝと云々

百首歌　山里はみねにたえせぬまつのこゑ木葉にしのふたにのしたみつ　式子内親王

千五百番歌合　雲もなく空はれわたるみねたにも雨をふくむはまつのおとかな　前中納言定嗣卿

正治二年百首御歌　いくかへりおいそふ松の陰をみんはこやのやまの森の木すゑに　嘉陽門院越前

同　千代ふへきはこやの山のとこ松をたのむこゝろも色そかはらぬ　第三のみこ

文暦元年毎日一首中　いつもみしまつのいろかは初瀬山さくらにましる花のひとしほ　前中納言定家卿

正嘉二年毎日一首中　色かへぬまつはすくなきはつせ山はなも紅葉もおもかけそたつ　民部卿為家

同　たかの山さこそ千年とたのむらめむかしにかへす松の去るしに

光華院入道二品親王家五十首寄レ松祝　正三位行衛卿
君か代はたかのゝやまのみねの松まつもひさしき月やみるへき
同　如願法師
ちきりある高野の山のみねの松なほゆくすゑの千代もかはらし
正治二年百首　前大納言忠良卿
つくは山岩根の松の千代をへて去けきやきみかめくみなるらん
家集寄松　從二位家隆
去るさらす松をそたのむ筑波ねのみねの紅葉はなへてちるころ
洞院摂政家百首雪　後九條内大臣
和歌のうらや浪間の松をたよりにて興津去ほあひにふれる白雪
建保二年和歌所歌合松經レ年　從二位家隆卿
神代よりいくよかへにしをとめこか袖ふる山のみつかきのまつ
同　慈鎮和尚
きみか世の千とせにあまる末までも色かはらしと松のいふなる
御集中　同
友千鳥さほのかはらの浪になけはこゑうちそふるみねのまつ風
人のもとにおほわりごをつかはしけるに子の日しけるかたある歌
萬代新千賀
君かへむ九のかへりをかそふれはゑにかく松のおひかはるまて
建長八年百首歌合　道信朝臣
千五百番歌合中　衣笠内大臣
袋和元年百首神祇　前大納言兼宗卿
家集祝歌中　前中納言定家卿
千五百番歌合　四行上人
家集　宣秋門院丹後
堀河院御時百首　前大納言公任卿
かみやまのみねにおひそふ小松原いく木の千代も君かよのかす　顯仲朝臣
思ひのみおほ原野へに年をへぬるまつことかなへ神の去るしに　光俊朝臣
わか葉さすひらの丶松は更にまたえたにやちよのかすそ添らん　藤原經繼
えたことに千代も八千代も色かへぬひら野の松は君かまに〳〵　民部卿爲家
みやこいて丶いきの松原音せすはいかてかよせむこひわすれ貝　同
おほつかないさ古へのことゝはんあこやの松にものかたりして　同
題不レ知（歌イ）　同
みちのくのあこやの松に木かくれていてたる月の出やらしぬ哉　同
家集　同
我君のみかさの松のかひあらはゑけきめくみは千代もつきせし　參議爲相卿
戀歌中　同
現葉
とし月はいはての松の下もみちいろにいて丶やいまはこひまし　增基法師
文應元年七社百首
ふなをかの子日のあとはそれなからきたの丶まつにひく心かな
同
たのむかないまも北野の一夜松むかしのあとにいろもかはらす
貞應二年六月名所百首
たつた山あへぬ紅葉もあるものを去くれにつよき松のかけかな
同年卒爾百首契少人戀
春の丶にわか去めはふるひめ小松おひゆくすゑを人にひかるな
嘉元元年百首松
あらましの心のうちのたむけ草まつとは去るやすみよしのかみ
乾元元年二月藤原長清家歌松
さよふけてた丶こ丶に聞うら浪のこゑをわけたるいそのまつ風
玉旅庵主夜をこめていそきつれとも松かねに枕を去てもあかしつるかな
此歌は伊勢國にて去ほのひたるにみわたりといふはまをすぎんとて夜のうちにおきて行に道いまだくらくて見えさりけれは松原の中にとまりて夜をあかしてよみ侍る
題不レ知　左京大夫顯輔卿
明玉
君か代にくらふの山のいはね松いくたひはかりおひかはるらん
御集中　鎌倉右大臣
喜多院入道二品親王家五十首祝
君か代にくらふの山の峯におふるまつは千年をかきるはかりそ
岡屋入道摂政家百首洞松　隆信朝臣
たとふへきものこそなけれ君の代にくらふの山の松の千とせを
民部卿爲家
ひた人のひくよも去らぬ谷かけになにをか松とふりまさるらん

君臣御歌合　前中納言爲兼卿
嘉元三年仙洞歌合　同
雜歌中　他阿上人
建保三年家百首御歌名所　光明寺入道攝政
同年名所百首　僧正行意
題不レ知　よみ人しらず
千五百番歌合　皇太后宮大夫俊成卿
文治六年五社百首　同
洞院攝政家百首旅　俊成卿女
雜歌中　俊輔朝臣
名所須磨浦　法橋眼慶融
百首御歌　順德院御製
建保三年名所百首御歌浮島松　同
百首御歌　慈鎭和尚
同　信實朝臣
那智三十首　前中納言定家卿
或所の障子の絵になる尾の松を

あめふれは雲おりかゝる山松のふもとにのこるかすそすくなき
をかのへやなひかぬ松はこゑをなして下草ゑをる山おろしの風
みとりなるまつにはみえぬ春秋をつたと藤とのいろをあらはす
ふかくさやいくよの露かはらふらん來ぬ人たのむやとのまつ風
冬もいまはかすつもりの浦さえて雪にもなりぬあられまつはら
六三
みくまのゝうらの松原みかくれてねはひとつにや思ひいるらん
おしてるやはまのみなみの松原もいく木の千代を君にそふらん
何となくこゝろそとまるそれとみてこきはなれ行むしあけの松
むしあけの松に秋風ふきすきてなみたもとめぬなみのおとかな
すまの浦やなきさに立るそなれ松はひえを浪のうたぬ日そなき
松風のせきやにさむき音までも袖くれになりぬすまのうらなみ
すまの浦やあまのとちかき入ゑほにうつるもあをき松の色かな
とき袖らぬ山はゆきけのくもなから有明の月のうきしまのまつ
もしほ草しきつのうらに舟とめていまゝはきかんいそのまつ風
いはやとに片枝かれたる霜の松たかよにうゑていくよへぬらん
すゝしとてたちやよらまし夏引のいとかのやまの松のゑたかせ
なる尾なる友なき松のつれ〳〵とひとりもくれに立りけるかな

御集　中務卿みこ
爲家卿家百首　從三位行能卿
元久元年詩歌合水鄕春望　慈鎭和尚
六帖題　信實朝臣
前中納言定家卿

吹風のなるをにたてるひとつ松さひしくもあるか友なしにして
ゆき島のいはほに立るそなれ松まつかひもなきよにもふるかな
ゑかのうらの浪より霞むあけほのに山ふきおろす春のまつかせ
新六三
見わたせは木末ひとしきならひ松ゑまさき遠くたれかうゑけん
ありへけんもとの千年にふりもせて我きみちきるみねのわか松
此歌はみなせどのにあたらしくたきおとされ石たてられて後
にまゐりて朝に清範朝臣のもとへ地形勝絶のよし申けるつい
でによめると云々
玉葉一
松かねのいはたのきしの夕すゝみきみかあれなと思ほゆるかな　四行上人
此歌は夏熊野へまゐりける時いはたと云所にてすゝみて京な
る西住がもとへつかはしけると云々
建長八年百首歌合田　衣笠内大臣
同　從二位行家卿
同　左近中將具氏卿
家集　從　盛
文永七年每日一首中　民部卿爲家
文應二年每日一首中　同

光業院入道二品親王五十首松雪　千十

題不レ知

元久元年小野宮歌合忍戀　年イ

寶治十首歌合（忍久戀イ）

眺望のこゝろを石間月歌中

御集立秋

冬歌中家集

最勝四天王院名所御障子

高瀬山秋

後歌　鳥羽院くまのに御幸の時道の程の御會に

熊野十二首歌

家集

玄からきの外山はうすき白雪のうつみもはてぬまつのむらたち

玄からきの外山の松は玄くるともつれなき色はえやはみるへき　前中納言光經卿

とふ人のきなれの里はなのみしてなみよるきしの松そさひしき　民部卿爲家

萬六　からころもきならの里の玄ま松にたまをしつけんよき人もかな　同

谷かはのこほるにつけてしのふ山なほうきものはまつのゆふ風　よみ人しらず

われならぬ玄のふの山の松の葉も年へていろにいつるものかは　從二位家隆卿

おしてるやなにはのうらにみわたせは夕日かゝれるこやの松原　大藏卿有家

難波江のきしにそなれてはま松をおとせてあらふ月の玄らなみ　源仲業

松風のおとこそかはれ紀のくにや吹上のはまにあきやきぬらん　西行上人

うら風のふきあけの松のうれこえてあまきる雪を浪かとそみる　鎌倉右大臣

千鳥なくふきあけにたてるまつ原のこゑすむ袖に月そやとれる　前中納言定家卿

ふきおろすふもとの草に露おちてこゑもたかしのみねの松かせ　如願法師

冬の日をあられ降はへあさたては波になみこすさのゝまつかせ　藤原爲守

こまなつむさのゝあさけにみわたせは松原とはくふれる玄ら雪　前中納言定家卿

たけくまにいつれたかへりくりこまのみあけの前に松たてる岡　大藏卿隆輔

くりこまの見あけと云所一本の松あり山のくちに田ある所を　藤原長能

よめると云々

題不レ知

家集

正治二年百首

千五百番歌合

同

建保三年名所百首

よるの御さうそくいろ〳〵はこのふたあしてにて

日向國にことひき松の岸に浪よす　よみ人しらず

石にうみ松のおひたるを　好忠

六月人海松院にすゝみにまかりたる　小侍從

家集

家集みちのくにより宮こへかへるとて　寂蓮法師

千五百番歌合　二條院攝政

みちのくにあねはの松　從三位行能卿

萬二　みよし野の玉松か枝ははしきかも君かみことをもちてかよはく　兼盛

みよしのにたてる松原千代ふるをうへるあるかな常ならぬよの　重之

玄らなみのよりくる糸を緒にすけて風に玄らふることひきの松　嘉慶法師

續古今　家　うこきなきいはほにねさすうみ松の千年をたれに浪のよすらん　同

おほゐ川きしにかけさすうみ松の風にや瀬々のなみもたつらん　同

さらしなや雪のうちなる松よりもはけしき物はわかたのむつま　業平朝臣

くり原のあねはの松の人ならはみやこのつとにいさといはまし　正三位季能卿

くり原のあねはのまつをさそひても都はいつと玄らぬたひかな　祐春

かくはかり年つもりぬる我よりもあねはの松はおいぬらんかし　同

ふりにけるゆきの島なるむすひ松とくこそ人の見るへかりけれ

此歌家集云中務亟雪をしまのかたに造ていはたて日かげをこ

けのかたにおほして松などあるをこきでんのだいばん所にいれたりけるをよめる　鎌倉右大臣

たまつ笑まわかの松はらゆめにたにまたみぬ月に千鳥なくなり　同

續後拾神祇　雪つもるわかの松原ふりにけりいく代へぬらんたまつ笑まもり　民部卿爲家

伊勢のうみあの丶松原まつとてもいひし日數になみはこえつ丶　家長朝臣

萬代　す丶か山ふりはへこえてみわたせはみとりにかすむあの丶松原　六條右大臣宝

ひきこして人わすれすはふちかたの松もむかしの物かたりせよ　太宰大貳高遠

かきつもるはまの松葉は年を經てこたかくはらふ風にこそまて　後九條内大臣

現玉　おほわたのはまの松ふくうら風に笑かのてこらか袖かへるみゆ　嘉慶法師

すみよしのきしの村松たはむまてふるへかりぬるふるさとの雪　小

住吉の松もみゆきはありけりとこはめつらしくみしまえのうら　隆信朝臣

新六五　山たかみかすみをわけて詠むれははるかにみゆるすみよしの松　信實朝臣

ときはなるちしほのみとり神代よりそめてふるよの住吉のまつ　後京極攝政

すゑとほきあさかの山の峯におふる松には風もときはなりけり　正三位知家卿

神さふるいこま高ねのむかしより松にへにけるとしも笑られす　民部卿爲家

龍田山笑たまてかはるもみち葉にひとり色なきたにのまつかせ

同年百首　秋風のふきくるみねのむらさめにさしてやとりのわたのかさ松　同

波かくるいそへにたてるはなれ松いく笑ほ風を身にならふらん　同

うちわたすせたのなかはし程もなくひとむらみゆる野ちの松原　同

建保三年名所百首　里の名もきみかちとせにあらはれてとはにふくへき松の風かな　同

最勝四天王院名所御障子　秋イ　きみすみてとはに見るへき里なれはたのもはるかに松風そふく　正三位忠定卿

新續古二　ひと笑ほもまたそめあへぬ高砂の松のみとりはかすみなりけり　同

高砂のをのへのはなのよそめこそきえあへぬ松の雪と見えけれ　芬陀利花院前關白内大臣家

五　たかさこの尼上の月にあきふけて松かせちかく笑かそなくなる　入道一品親王永助

たかさこの松はつれなき尾上よりおのれ秋笑るさをしかのこゑ　隆直卿

定家卿

椿

百首御歌　谷ふかきやつをのつはきいく秋の笑くれにもれて年のへぬらん　順德院御製

同（たまつはき）　ちきりてもとしのをなかき玉椿かけには千代のかすそこもれる　同

御集祝（まらたまつはき）　みやきの丶笑らたまつはき君かへんやちよの數に老そ笑ぬらん　法性寺入道關白

正治二年百首　君か代は貌姑射の山にいくたひかやつをのつはき色かはるへき　後京極攝政

千五百番歌合　君か代ははこやの山のみねにおふる白玉つはきはかへせんまて　宣秋門院丹後

天喜二年禁裏家歌合（六イ）
（やちとせつばき）
永久三年五月大神宮禰宜歌合
寛治五年十一月從二位石見親主家歌合
永久三年十二月大神宮禰宜歌合
家集

君か代はからくれなゐのふかき色に八千歳つはき紅葉するまて　よみ人しらす
君か代はあさ日の山の玉つはきちりもくもらて八千代こそつめ　同
おとは山いはねに生ふるたま椿やちよはかへるときはなりけり　同
君か代はかゝみのやまのたま椿くもりもあらしときはかきはに　同

六帖題（あをつばき）
題不レ知（つばき）
同
同（つら〳〵つばき）
同
かもの歌合後を
久安百首（たまつばき）
家集寄レ椿戀

かゝみ山みかきそへたるたまつはきかけもくもらぬ春の空かな　前中納言定家卿
新六六　いやましのやみねに茂る青つはきつら〳〵ものを思ふころかな　信實朝臣
萬七　あなしやま椿さけれや八峯こし去かまつきみはいはひつゝかも　よみ人不レ知
萬二十　我かとのかたやま椿まことなれわかてふれなくつちに落しかも　同
萬一　こせ山のつら〳〵椿つら〳〵にみつゝおもふなこせのはるのを　同
同　河上のつら〳〵つはきつら〳〵にみれともあかすこせの春野は　同
かすみたつこせの春野のたま椿つらねもあへす見えみみえすみ　殿宮門院大輔
たま椿ひかりをみかくきみか代にもゝかへりさく優曇華のはな　待賢門院安藝
花にさくみやま椿ををりそへてたかいろこのむはいにやくそも　源仲正

家集六帖題

柏

新六六　花さけと人もすさめぬかへの木のいたつらにのみ身は成にけり　衣笠内大臣

同　みちのへのかへのかさおち拾ふとて木の下かくれ行そやられぬ（もやられすゝ）　信實朝臣
同　ちはやふる三室の山のかへの木のはかへぬ色はきみかためかも　光俊朝臣
建長七年顯朝卿千首歌
六帖題かへ　つまかくす矢野の山なるかへの木のつれなき戀にわれ年は經ぬ　同
六百番歌合寄レ木戀　つかのうへに松とかへとの生ひんまて待んとちきる妹か畏こさ　權僧正公朝
戀しなは苦むすつかにかへふりてもとのちきりの朽やはてなん　前中納言定家卿

此歌の判者云左こけむすつかに栢ふりてといへる何事にか侍らんもし是は史記と申文に晉文公が私の妻にわかるとて我をまたん事廿五年までにかへらずば其時つかをせよと申ければ妻わらひて廿五年の比ほひにはわがつかの上に栢のおひなんといひたる事をこそ見侍しか若其事を思へるにやと云々

桂

柿本影供百首
前中納言定家卿家にて寄レ桂戀
六帖題
同

やま人もつきをちきりの秋よりやかつらの花のころもうつらん　後九條内大臣
心なきくさ木なれとも契あれはあふひかつらはかけもはなれす　家長朝臣
あふひかるころにしなれは神山のもとあらの桂かくれかもなし　信實朝臣
新六六　いつのよにたれたねうゑて久かたの月にありてふかつら成らん　光俊朝臣

三體和歌　鴨長明
寶治二年百首河紅葉　信實朝臣
六帖題　衣笠内大臣
正治二年百首桂　民部卿範光
新羅秋歌合述懷　泰覺法師
六帖題かつら　權僧正公朝
永久四年百首桂　仲實朝臣
同　後鳥羽朝臣
同　二條后皇宮肥後

よひの間の月のかつらのうすもみちてるとしもなきはつ秋の空
河そひのなみのかけちやそめつらんいはもと桂もみち玄にけり
新六六　玄るへとてをりしかつらの枝もかな月のみやこも行てみるへく
月も今あはれとや思ふわれむかしかつらをりてしひともと故に
何となく我身はふりぬみたひまて月のかつらをるとせしまに
くもりなきかゝみとそ見る月のうちの桂を折て身をたつるひと
わか身には吹へき風も吹こねはかつらの枝もをらすそありける
堀川次郎　人玄れすけふをしまつと風はやきかつらの枝のをりもよからは
神山のかつらを折れは月のうちにわか思ふことならさらめやは

楸

萬十　うちなひく春さり來らし山きはにひさきの末のさきゆく見れは　よみ人玄らず
萬六　うは玉の夜の更行けはひさき生ふる清きかはらに千鳥玄はなく　赤人
萬十二　浪間よりみゆるこしまの濱ひさきひさしく成ぬ君にあはすして　よみ人しらず
なみたにはうきみやまきも朽ぬへし沖の小島のひさきならねと　正三位經家卿
夜のまにや冬はきぬらんひさきおふるあとの川原に枯葉散玄く　禪性法師

千五百番歌合　從二位家隆卿
六帖題　衣笠内大臣
同　民部卿爲家
道仁元年新宮撰歌合霞隔遠樹　後京極攝政
千首歌　民部卿爲家
正治二年百首　宜秋門院丹後
御集題歌　鎌倉右大臣
家集題歌　從二位家隆卿

ひさきおふるさほの河原に立千鳥そらさへきよき月になくなり
新六六　月影もきよきかはらの河おろしにちりてひさきの下もくもらす
同　ひさきおふる庭の木かけの秋風にひとこゑそゝくむらしくれ哉
なかめこしおきつ浪間のはまひさき久しく見えぬ春かすみかな
玄らせてもいかになるみの濱ひさき玄をるゝ波に袖をまかへて
五月雨はぬまの入江のみをつくしきしのひさきのこすゑなり飛
おきつ浪うちてのはまの濱ひさき玄をれてのみや年のへぬらん
いはき山こえてこぬみのはまひさき久しくなりぬ浪に玄をれて

枝保持

十題百首木　寂蓮法師

波の上になかはかくれし四つのをの契もふかき玄ほちなりけり

槇

長承三年顯輔卿家歌合紅葉　維順朝臣
題不レ知　人丸

秋ふかみあさゆふ露のもる山のまきの玄たえはもみち玄にけり
萬三　すへらきは神にてませは槇のたつあら山なかにうみをなすかも

長歌

わかおほきみの、をろしめす、そともの〻くにの、まきたてる、ふは山こえて、かやたちの
萬一
いしはしる、あふみの〻くにの、ころもての、たなかみ山の、まきさく、ひのつまてを
萬七
あたへゆくをすての山のまきのはも久しくみねは苔おひにけり
新六六
みすひさになりそをにけるをすて山まきのふるきの苔深きまて
雲葉
み吉野はまきの下葉のかれしよりとやまも雪のふらぬ日はなし
みよしの〻まきたつくもの梢には花もつれなきいろそのこれる
吉野山ゆきふるさとも冬かすかにまきのは冬のきはる風そふく
うた〻ねの夢もあらしの山里にまきのはつたひあられふるなり
またさかぬ花かとみえてまき山のはたれにつもるふゆの冬ら雪
くちねた〻思ひくらふの山たかみたつをたまきは冬る人もなし
つくは山たつをたまきの冬け〻れと峯行冬かのごろはさはらす
筑波山冬けきめくみにもらさすはたつをたまきも花やさかまし
わか袖もほさてやくちんおくやまにたつをたまきの冬けき雫は
ふしわひぬ旅ねのそてをまきのはにふるやあられのさやの中山
新六六
陰くらき槇の冬け山つれ〳〵といつをつき日のあかはともみす

同　民部卿爲家
同　従二位家隆卿
同　參議雅經卿
題不レ知　後京極摂政
六帖題　醍醐入道前太政大臣
家集冬歌中　民部卿爲家
建保四年内裏十首歌合　光明峯寺入道摂政
千五百番歌合　従二位家隆卿
同　安嘉門院四條
建長三年毎日一首中　參議爲相卿
百首御歌（寄二名所一槇）　正三位知家卿
家集（秋鹿イ）　信實朝臣
百首歌
嘉元二年竹園千首御會寄レ槇槇
建保名所百首
六帖題槇

修行法師けるの時雪のふりける日　前僧正道度
萬代雜三
そまやまの槇のたちかれ枝をなみおのれそしるき雪はたまらす

杉

萬九
かみなひの三室の山にかくれすき思ひすきんやこけをふるまて　よみ人しらす
杉ふかきかたやまかけの冬たす〻みよそにそすくる夕立のそら　後京極摂政
けふはかりまちみんとても月日へぬのきはのすきの夕暮のそら　従二位家隆卿
うきよりは住よかりけりとはかりよあとなき霜に杉たてるには　前中納言定家卿
かしは原わかたつ柚にちきりけるすきの冬るしも今こそはきけ　民部卿爲家
とくにかくひの〻杉むらうつむ雪をしほの松にけふやまかへる　紫式部
萬三
いつ冬かもかみさひけるか香山のむすきか本にこけおふるまて　よみ人しらす
新六六
かこ山のみねの六杉のもとつはにみとりをそへて苔おひにけり　光俊朝臣
嵐やますきの葉かけのいほりとて夏やは冬らぬこころこそすめ　前中納言定家卿
たきのうへのとよふの山は苔ふりてみむらの杉も神さひぬらん　後九條内大臣
けふといへは春の冬るしをみやかはの岸の杉むらいろかはる也　後京極摂政
いたつらに生にけるかないにしへの人のうゑけん杉ならなくに　寂蓮法師
逢坂の關のむらすき葉を冬けみたえまにそみるもちつきのこま　中納言國信卿

題不レ知
百首歌合
後九條内大臣家合に寄二曉樹一恋
韻歌百二十八首
文永八年毎日一首中
ひの〻たけといふ山をみて
題不レ知
六帖題
文集百首不是戀房無二熱到一但能心都即是涼
雜歌中
春のはしめに
嘉イ
喜熙二年住吉社歌合藤懷
堀河院御時百首

永久四年百首稲荷詣　神祇伯顕仲卿
同　仲實朝臣
十題百首神祇　後京極攝政
正治二年百首　正三位季經卿
太神宮卅六番歌合　四行上人
百首歌祝五首中　藤原爲顕
後法住寺入道關白家百首　藤原盛方朝臣
家集恋の歌中　元眞
題不レ知　人丸

いなり山ゑるしの杉をたつねきてあまねく人のかさすけふかな
いなり山ゑるしの杉を春かすみたなひきつゝくけふにもある哉
いなり山みねの杉むら風ふりてかみさひわたる玄てのおとかな
ときはなるひら野の宮の杉むらは君かよはひの玄るしとそみる
よろつよを山田の原のあやすきに風玄きたてゝころよはふなり
みわ山の杉の玄るしもからさきの松のみとりに千代をそへつゝ
萬代
みぬさとる三わのはふりにこと〻はん幾代かへぬるいはふ杉村
みわの山玄るしの杉も荒はてゝなきよにわれはきてたつねつる
萬七
御ぬさ取三輪の祝かいはふ杉原薪こり程々しくに手斧取られぬ

檜

家集修行の道にてィ　僧正行意
千五百番歌合　後京極攝政
同　四圓寺入道太政大臣
建保四年百首　從二位家隆卿
歌家卿家雪五首歌合　從三位頼政卿
(雪)

かみ山の岩ねのひはら苔むして木すゑも玄ろくとしふりにけり
みむろ山峯のひはらのつれなきを玄をるあらしにあられ降なり
君か代をわかたつ柚にいのりおきてひはら杉はら色もかはらし
龍田姫みねのひはらのしら露におるやかさしのたまそみたるゝ
雪つもるこしの山風ふきぬらしひはらまつの葉あらはれにけり

百首御歌　慈鎮和尚
十題百首冰　前中納言定家卿
百首御歌　後鳥羽院御製
題不レ知　中納言家持卿
泳レ花　人丸
洞院攝政家百首九月雨
奈良花林院歌合雪　前中納言定家卿
百首歌　寂蓮法師
御集秋雨　中務卿みこ
文永七年毎日一首中　民部卿爲家
千首中　同

をしねかる山田のくろのひはらより殘るあらしの音そさひしき
まきもくのひはらの玄けみかき分てむかしのあとを尋てそみる
萬十　新古冬
まきもくのひはらくもりて降雪にこまつか原もあとたえぬへし
萬七
いにしへに有けん人も我ことやみわのひはらにかさしをりけん
三輪の山五月のそらのひまなきにひはらのころそ雨をそふなる
あしたつか三輪の檜原に雪ふかみ宮木ひくをのかよひちもなし
雲消るをちのやまもとみわたせはひはらそ庭のよもきなりける
時雨ふるひはらか下葉色つきぬよそのもみちもさこそゝむらめ
あさをふねとませの山も玄ろたへにひはらの雪の道みえぬまて

梨

六帖題　正三位知家
同　玄笠内大臣
同　信實朝臣

新六六
時にあひて秋をもまたぬなしならはかならす西の枝ならすとも
新六六　と新六
年ふれは變らすなからつきなしのあらぬ物にも身こそなりぬれ
同
かた枝はなりもならすもつまなしの思ひあへりやねては語らふ

弘長四年毎日一首中　民部卿爲家
建長七年顯朝卿家千首寄レ梨總　信實朝臣
六帖題山なし　同イ知家
同　民部卿爲家
同　衣笠内大臣
御集　後九條内大臣
近江御息所歌合　よみ人しらず
かひにて山なしの花なみて　能因法師

山なしのはなの玄ら雪ふるさとの庭こそさらにふゆこもりけれ
こふるさはくるしき物を世中にあはれ玄のふのやまなしもかな
新六六　いとひてもいつくに玄はしやとからん浮世の外のやまなしの花
同　きゝわたる面影見えてはる雨のえたにかゝれるやまなしのはな
同　あしひきの山なしの花さきしよりたなひく雲のおもかけそたつ
春はまたいつちこゆらんむさしのはたえていく日も山なしの花
六六　世中をうしといひてもいつくにか身をはかくさんやまなしの花
かひかねにさきにけらしなあし引の山なしのをかの山なしの花

李

六帖題　民部卿爲家
同　正三位知家卿
同　信實朝臣
同　權僧正公朝

新六六　きえかての雪と見るまてやまかつのかきほのすもゝ花咲にけり
同　山かつのころもほすてふかきほかと玄ろきをみれはすもゝ花咲
同　かすならぬ片山かけの青すもゝ身はあるかひもなくなりにけり
誰も見よすもゝの下の道ぜはみかふりかたふけ手やはふれつる

杏

六帖題　衣笠内大臣
同　民部卿爲家
新六六　いかにして匂ひそめけんひのもとのわか國ならぬからもゝの花
同　もろこしの吉野の山にさきもせておのか名玄らぬからもゝの花
同　ことはよも聞玄らしとやからもゝの物をはいはて花にのみさく
光俊朝臣

柏

題不レ知　よみ人玄らず
同　萬二十　いなみのゝあから柏は時はあれときみをあか思ふ時はさねなし
天慶二年二月貫之家歌合　萬六　なら山のこのてかしはのふた面とにもかくにもねちけひとかも
仲冬　同
天禄三年五月實子内親王家歌合　玄ら雪の降つもりぬるおく山はあからかしはもうつもれにけり
御集秋歌中　君かためわかもる山の青かしはよろつよまてにもえまさらなん
家集　同
建保三年家百首御歌　おのかみなおもひ〳〵に神山のこのてかしはを手ことにそとる
秋歌中　和泉式部
家集心かろき聞えありける女のつれなくあたりけるに　光明峯寺入道攝政
いはれのゝ萩かたえまのひま〳〵にこのてかしはの花咲にけり　四行上人
我といへはこのて柏のおもて〳〵とくひもろきも結ほゝれつゝ　清輔朝臣
雜歌中　三笠山あとふみたえてかしはきのめつらしからぬ森の木のもと　正三位知家卿

建保四年内裏御會題村雪　　従二位家隆卿

うつもるゝ遠山もとのむらかしはたかゝきねより雪はらふらん

家集夏の風を　　俊頼朝臣

たまかしはするゑこす風にはかられてまたきに鹿や聲たてつらん

六帖（題イ）　　衣笠内大臣

新六六　よはひのみふるから小野のもと柏もとの身はかり戀しきはなし

同　　信實朝臣

あめやまぬふるからをのゝ遠かたになかめ柏もなにしおふらん

六六　　よみ人しらず

人こふるなかめかしはゝ古里のかきねにのみそ玄けくみえける

光臺院入道二品親王家五十首朝時雨（あさかしは）　　常磐井入道太政大臣

あらしふくはらのと山のあさかしは降や玄くれの色にいてつゝ

建保四年百首　　家長朝臣

みるまゝに色にいて行あさかしはふるや玄くれの玄のゝめの空

三十首歌（たまかしは）　　同

よしさらはたえなは絶ね玉かしはさすかにかけて問もうるさし

文應元年七社百首　　民部卿爲家

かた野なるならの葉かしは吹風にあられふりそふ音のはけしさ

嘉祿四年百首蟬　　同

かた山のならのはかしは葉をしけみこすゑひまなき蟬の聲かな

神祇歌中人家　　度會仲房

昔たれみつのかしはのさかつきをあまてる神にたむけそめけん

　　後頼朝臣

神風やみつのかしはにこと問てまづをまつてふつゝみてそふる

　　此歌は後忠卿家十首歌にあはんことをうらなふといふことを

　　よめると云々

家集　　民部卿爲家

伊勢島やみつのかしはのたちはもてつゝむ眞袖に神まつるらん

寶治二年百首寄レ木戀　　衣笠内大臣

神風やみつのかしはのうきしつみとふにつけてもぬるゝ袖かな

永久二年四季百首秋歌　　従二位家隆卿

洞院攝政家百首　　家長朝臣

萬代もなほなか月のそらにあふみつのかしはにみきたてまつる　　鴨長明

神風やみつのかしはのあきの色にとようちひとの袖さへそてる

みわそゝくみつの柏の玄垂葉のなか〳〵し夜をいはひきにけり

此歌伊勢記云この國にみつのかしはといふものあり小侍從が歌に「神風やみつのかしはにこふことの玄づむにうくはなみたなりけり」とよめりこれにてうらなふ事あるにやとしごろおほつかなく思ふ事を此たび人々にたづぬればえきゝおよばぬよしをのみいふいかなる事にか此かしは輔親卿集にみもすそ河の岸におふるとよみ侍ばそのわたりにあるかとてたつぬればむかしやありけんいまの世には玄まぐにのうちにとくの玄まといふ所あり木の上にかづらのやうにておひたるをのぼりてきりおろす時ひらにふしておちたるをばとらずたてざまにおちたるばかりをとる其おちやうにぞとふ事のありとかやいひつたへたるこれは神宮四度の御まつりの時かならず入物なり御前の御あそびはてゝ四の御かどのわきにとくらのことふおほみわをまうくや玄ろのつかさこのみつのかしはをおのおのひとはもちてよればその上にこのみわをそゝぐことさら

これをこしにさしていづるなりながはともいふにや寂蓮法師百首の歌の中に「おもふ事とくのみ玄まのなかゝ玄はなかくそたのむひろきめくみを」といへるかやうにきけどいまだそのすがたをばみずこの日ある人のもとよりおくれりかしはのやうにてひろさ三四寸ながさ三尺ばかりまことにつねの木草の葉には似ずと云々

楢

一字抄　ゐな山のならのむら立木かくれて時雨のあめにあまやとりしつ　大蔵卿有家

風さむみゐなの中山こえくれはならのかれ葉にあられふるなり　藤原道經

ならかしは末葉に露やなりぬらん木陰すゝしきひくらしのころ　第三のみこ惟

夕かすみかた野にたてるなら柴のなれはまさらてかへる春かな　後九條内大臣

ゆふかけてならのはそよき吹風にまたき秋めくかみなひのもり　後徳大寺左大臣

新六六　さほ山のならのかしは木又はへのもとつ葉玄けみ紅葉するなり　信實朝臣

林下時雨　永久四年八條太政大臣家歌合歌　正治二年百首御歌　洞院攝政家百首暮春　百首御歌晩風知レ秋　六帖題

椎

題不レ知　六帖題　六百番歌合　建保三年名所百首　山雪　六帖題　百番歌合　家集戀の歌中　家集冬歌中　建保四年百首　弘長元年百首不レ逢戀　後鳥羽院御時百首　永久四年百首椎柴　同　六百番歌合

舊十四　おそはやもなほこそ待め向つをの椎のこやてのあひはたかはし

新六六　むかつをの玄ひのこやてのよにふれは人の心にあひたかはめや

山人のたよりなりとも岡邊なる玄ひのこやては折すもあらなむ

明玉　千代までも葉かへぬ色をたのむかな後瀬の山のみねの玄ひしは

新六六　ときすくる玄ひのさ枝もみえわかすのちせの山につもるしら雪

秋風にのきはの椎のおちつれはにはにくろいし玄くかとそみる

いまはたゝそらたのめにもこりねとやまちかね山の峯の椎しは

ときは山椎のした柴かりすてんかくれておもふかひのなきかと

おほつかなこしのをやまの椎柴の青葉も見えすつもるしらゆき

わすれしとたのめし末はわかさちやのちせの山のよその椎しは

しくれゆく秋に玄られぬこもりえのはつせの山のみねの椎しは

いつまてかうきたの森の椎柴の玄ひてもひとをこひわたるへき

降雪もをやめをやめと小野山に玄ひしはかるはさはしはかりそ

くらゐ山みねの玄ひ柴としふともうづろふ色はあらしとそ思ふ

くらゐ山みねの玄ひ柴としふりてこえゆく人そうらやまれける

君ならてあとをはつけしみかさ山はや雪かゝれ玄ひか木するに

此歌は定家卿少將に叙玄けるにことさら三日すぎて悦申べき

よみ人しらず　衣笠内大臣　法橋顯昭　從二位家隆卿　後光明峰寺入道攝政　光俊朝臣　慈鎮和尚　四行上人　權中納言俊忠卿　家長朝臣　西園寺入道太政大臣　衣笠内大臣　神祇伯顯仲卿　六條院大進　隆信朝臣　寂蓮法師

よし思ける程に雪の朝定家卿のもとより「みかさ山ふみ見し
ままにまちしかとけさの雪さへまたあともなし」といひ遣し
たりける返事と云々

栗

四行上人高野よりといひて侍ける返歌中（さゝくり）　寂然法師

山風にみねのさゝくりはら〳〵と庭におちゝるおほはらのさと　源家識

康和二年四月國信卿家歌合歟ゝ年歟

玄めこめてをかへにはやす栗柴のとしをそへても玄ける比かな　土御門院御製

百首御歌木（みなしくり）

埋るゝ木のはの下のみなしくりかくてくちなん身をはをしまず　信實朝臣

建長八年百首歌合

えた栗の玄ふる〳〵もわか方にむけるを見るそえむこゝちする　家長朝臣

洞院攝政家百首歌山家（さゝくり）

風に落るにはのさゝ栗ひろひおきてとひくる人の家つとにせん　藤原爲顯卿

百首

捨られて木のはにましるみなし栗ひろひのこせる秋やへぬらん　民部卿爲家

貞應三年百首（わかくり）

よの中はあきになりゆくわか栗の玄ふる〳〵やゑみてすきなん　參議爲家卿

栗

風まちてひろふとすれと袖の上にかゝる木陰のつゆのおちくり

槻

十題百首木　前中納言定家卿

家集歟

いはひの心を　修理大夫顯季卿

けふみれはゆみきる程になりにけりうゑし岡邊のつきのかた枝　俊頼朝臣

關守かゆみにきるてふつきの木のつきせぬ戀にわれおとろへぬ

君か代はおほはつせちの百枝つきもゝえなからも榮えますかな

六帖題むろ　衣笠内大臣

同

新六六

玄ほのみつうらに年ふる室の木のかはらぬ色も玄た葉ちりつゝ

同

玄くるれとあきの色には離れ磯にみとりかはらすたてる室の木　正三位知家卿

同

いかゝせん我ゐる山のむろの木のなれみし人をわすれかねつる　光俊朝臣

同

うら風は吹玄をれともいそ山にはかへぬむろのいろそつれなき　前中納言爲家卿

六帖題御歌むろの木

むかしへを思へはとほしいはやとにねはふ室の木幾代へぬらん　中務卿のみこ

題不ゝ知

林葉

ともの浦の浪路はるかにこく舟のそかひにみゆる磯のむろの木　源仲業

同

萬十五

はなれそにたてるむろの木うたかたも久しき時をすきにける哉　よみ人ゝらす

同

萬三

吾妹子か見しともうらの室の木はとこ世にあれと見し人そなき　同

同

磯の上にねはふ室の木みし人をいかなりと問はゝ語りつけんか　同

令法

六帖題はたつもり　衣笠内大臣
新六六　さと人やわか菜つむらんはたつもり外山もいまは春めきにけり
同　はたつもりつもりし雪も消ぬれはゝつかすまひに若なつむらし　信實朝臣
同　ねやいらぬ外山の春のはたつもり菜にのみいて〻人に〻らるゝ　光俊朝臣
永久四年百首忍戀　おく山のくきかくれなるはたつもり〻られぬ戀にやまふ比かな　俊頼朝臣
家集或人合法と云物をおこせたるにかくいひやりける
今よりは深山かくれのはたつもり我うちはらふとこの名なれや　能因法師

櫨

六帖題しきみ　衣笠内大臣
新六二　〻きみつむ竹のはなこのはかなさも誠のみちにいらさらめやは
同　あはれなる〻きみの花の契かなほとけのためとたねやまきけん　民部卿爲家
同　枝なから峯の〻きみの葉を繁みこるとはいはてつみにこそつめ　信實朝臣
同　あか水に〻きみの青葉きりうけてさゝけもたれはぬるゝ袖かな　光俊朝臣
家集山雪の心を　あさころもまたをりなれぬおく山の〻きみか花の露にぬれつゝ　從二位家隆卿
建長八年百首歌合　世をいとふ人すみけりとみゆるかな〻きみなかるゝ山川のみつ　右近中將經家卿
判者光俊朝臣云尋二櫨流之跡一得二花麗之文辭一因緣共不レ淺旨趣又可レ深云々

寶治二年百首山家水　かくれすむ人のありかも〻られけり〻きみなかるゝ山川のみつ　從二位頼氏卿

椶

六帖題ゆつるは　衣笠内大臣
新六二　ゆつる葉のときはの色もうつもれぬあらくま山に雪のふれゝは
同　これそこの春をむかふる〻るへとてゆつりはかさしかへる山人　從三位知家卿
新六六　年毎になつとはすれとゆつる葉のかひこそなけれ老の〻ほみは　信實朝臣
新六二　山人のつま木にそふるゆつるはに春をかけたるいろは見えつゝ　衣笠内大臣
六帖に　旅人のやとかすか野のゆつるはのもみちせんよや君をわすれん　よみ人しらず
萬十四　あともへかあしくま山のゆつるはのふゝまるときに風吹すかも　同
萬十二　いにしへにこふる鳥かもゆつるはの三井の上より鳴わたりゆく　弓削皇子

妻問々

六帖題つま〻　衣笠内大臣
新六六　かみさふるいそのつま〻のねをはへて深くや人を〻たに忍はん
同　世と〻もに浪のゆふこそかけつらめ神さひ渡るいそのつま〻に　民部卿爲家
同　かみさふる磯のつま〻のねをはへて君し問ねはいけりともなし　光俊朝臣

題不レ知　中納言家持

合歡木

萬八
我妹子かかたみのかうか花にのみ咲てけたしも身にならぬかも

同　正三位知家卿

新六六
我妹子にかくとはかりは告やらんかたみのかうか花さきにけり

六帖題　民部卿爲家

新六六
うかりけるかうかの花のためしかな我思ふ事もならぬ身なれは

同　信實朝臣

同
よにたえぬ大内山のかたなしにふるきかうかの木するをそみる

同　光俊朝臣

山ふかみいつよりねふと名をかへてかうかの木には人惑ふらん

胡桃

六帖題　衣笠内大臣

新六六
夏山のすそ野に去けきくるみはらくるみいとふな行てうらみん

同　民部卿爲家

時雨にもぬれぬくるみのかはかすてをのか心をなにゝそむらん

樫

つかのなかにて獨ながめ給ひけり御歌

六帖題かたかし　聖德太子

四季百首歌　民部卿爲家

六帖題かたかし　慈鎮和尚

同　正三位知家卿

賀茂社百首御歌　信實朝臣

奈良花林院歌合歌　慈鎮和尚

長歌　よみ人しらず

樫の葉を神のかさりにさし〻年もいのちやまたき人はてふかも

新六六
外山なるをかのかしはら吹なひきあれゆくころの風のさむけさ

同
夏かけて山かほるらし去らかしの落葉去をれてみちうもれつゝ

新六六
をくるまの諸輪にかくるかたかしのいつれもつよきわか心かな

同
かつはまたいはにたとふるかたかしもつれなき人の心にそしる

かしの葉の紅葉ぬからに散つもるおくやまてらの道そかなしき

萬一
春日山みねの去らかしよろつよをきみにといへは神もすさめす

たまたすき、うねひの山の、かしはらの、ひしりのみよに、あれまし〻、かみのところ

新六六
きりたふすたなかみ山のかしの木は宇治の川瀨に流れ來にけり　同

櫟

貞應二年百首歌　衣笠内大臣

おほゐ河去くるゝ秋のいちひたに山やあらしのいろをかすらん

猿滑

同　民部卿爲家

足引の山のかけちのさるなめりすへらかにてもよをわたらはや　同

櫨

をやまたのなはしろくみの春すきて我身の色にいてにけるかな　民部卿爲家

漆

いさゝらは繁りおひたる櫨の木のとか〳〵玄さを立てすきなん　同

くれなゐのおのか身に似ぬ漆の木ぬるゝと玄くれに何かはるらん　同

もちひの木

君かすむやとの軒端のもちゐの木かはらぬ色はときはかきはに　同

つけ

玄つのめか頭けつらすあさゆふにつけの小櫛やとるまなからん　同

こふし

うちたえて手をにきりたるこふしの木心せはさをなけく比かな　同

ひゝら木

世中はかすならすともひゝら木の色にいてゝはいはしとそ思ふ　同

そはの木

ありとても人にすさめぬそはの木の唯かたそはに過すへきかな　同

ねすもち

かた山のおとろにましるねすもちのひく人ありと頼むへき世か　同

こめ〳〵

秋ふかき山の夕きりこめ〳〵におのれもいろやまつかはるらん　同

うはめの木

冬くれは霜をいたゝくうはめの木老のすかたやいとゝ見ゆらん　同

ねふの木

真應二年百首木

貞應二年百首歌

あきといへは長き夜あかすねふの木もねられぬ程にすめる月哉　民部卿爲家

すろの木

同　あさまたき梢はかりにおとたてゝ櫻樹の葉すくるむら時雨かな　同

めつら

同　朝つゆのもる山かけの玄ためつらめつらしけなくぬるゝ袖かな　同

槻

同　川はたのきしのえの木の葉を玄けみ道ゆく人のやとらぬはなし　同

柿

同　秋くれは山の木のはのいかならんそのふのかきは紅葉玄にけり　同

家集　いにしへのやまと言葉の跡とめてはるかにあふく柿のもとかな　信實朝臣

百首歌　山里はかきの紅葉にはとなきて玄くれもふりぬかせもさむけし　寂蓮法師

柿のみはのこりて葉のみなちりぬるをみて　世の中にあらしの風の吹なから實をはのこせるかきのもみち葉　源仲正

寄木

延喜十二年賀御屏風

たなかみの山さとにてくはの木に露のおきたるを

六帖題

同　たらちねの親のそのなる桑もなほ願へは衣にきるといふものを　よみ人玄らず

同　ことし生のにひ桑まゆのから衣千代をかけてそいはひそめつる　貫之

同　露にさへ玄をるゝ桑の枝見れはこきたてられしわか身なりけり　俊賴朝臣

新六六　山かつのそのふの桑のくはまゆのいてやらぬ世は猶そかなしき　衣笠内大臣

同　吾妹子かこやのえひらのかすおほみあまた玄めつるそのゝ桑原　正三位知家卿

賤の女かつくりさかゆる桑はらのおなしさまなる枝つゝきかな　前中納言爲兼卿

新六六　みのをはり堺つゝきに植なめてよむともつきしくはのいくもと　光俊朝臣

あせみ

あせみ　おそろしやあせみの枝を折たきてみなみにむかひ祈るいのりは　同

逸師

風不レ知　大原のこのいち玄はのいつしかと我思ふいもに今宵あへるかも　よみ人玄らず

いちし　立民もころもて玄ろしみちのへのいちしの花のいろにまかへて　光明峯寺入道攝政

六帖題　大原はゆきてやみましいつしかとさくいち玄はの花の玄るへに　信實朝臣

樟

題不レ知　　萬四

佐保河の岸の司のわか櫪な刈そ有筒も春し來たらは立隠るかね　　よみ人しらず

萬十二　わたらひの大川の邊のわかくぬき我久にあらはいもこひめやも　　同

新六六　六帖題（くぬきはら）　たかせさすさほの川原のくぬき原いろつくみれは秋のくるかも　　衣笠内大臣

同　同（くぬきはら）　さほ河の岸くたりなるわかくぬき猶志けれとやかりはやすらん　　正三位知家卿

同　同（ふしくぬき）　春きてもは山かすそのくぬきはらまた冬かれのいろそのこれる　　光俊の朝臣

同　御集中　里人のほたきる冬のふしくぬきおほかはの人のあれまくもうし　　信實朝臣

明玉　建久三年九月十三夜後京極摂政家御會（くぬきはら）　なみたてるくぬきか本に駒とめておきつ川原に志はしすゝまん　　紫金臺院入道親王二品

家集雜歌中　永久二年十二月太神宮禰宜歌合雪　けふりたつをちの志のやのくぬき原そのふしもなく秋そ悲しき　　前中納言定家卿

柴

あを志はを苔のたもとにかけぬれは色このむとや人は見るらん　　大僧正行意

ふる雪に杉のはならす三わのやま大かた志はの葉も見えぬかな　　よみ人しらず

承安三年七月右大臣家歌合野風　岡のへのならのま志はに風立てかへるはくすのうら葉のみかは　　後惠法師

此歌判者云右歌は野といふ事なしをかのべはをかべなりと云云

正治二年百首　山おろしに人やは庭をなら志はの志はしもふれは道もなきまて　　後京極摂政

夏御歌中　かたをかの花ものこらぬ梢よりみとりかさなるまつの志たしは　　同

六帖題　新六二　春をへて鳥かへる山のたかつめに柴のたち枝もひこはえにけり　　衣笠内大臣

建長八年百首歌合（志たしは）　山里のみねの志た柴をり〳〵にものゝあはれのたゆむまもなし　　同

六百番歌合（志ゐのまし）　冬さむみ志ひの眞柴ををりさせはやとには風もたまらさりけり　　正三位季經卿

弘長九年百首　うたの野やかれ志はかくれふす鳥のとひたつはかりふる霰かな　　從三位行家卿

家集曉時雨　時雨する山のぬれ志はこりにとやまた夜をこめて賤かむれたつ　　仲正忠

建仁元年老若五十首歌合　つま木とりたにの通路うちはらひわけそわひぬる志はの雪をれ　　前中納言忠良卿

家集山家時雨を　宿かよふはゝそのの柴のいろをさへ志たひてそむるむら時雨かな　　四行上人

永承六年毎日一首中　をくら山まつの嵐の日にそへてさむきあさけにかはる志たは　　民部卿爲家

弘長四年毎日一首中　まつとても人やはとはんをくら山うつもれはつる雪の志たは　　同

述懐百首　栞するならのは柴にちるつゆのはら〳〵とこそ音はなかれけれ　　皇太后宮大夫俊成卿

同　志はつ山ならの眞柴にかさゝれてねらふ獵夫のたゆみなの世や　　同

同　ふし柴にやとれるほやのおのれのみ常磐かきはに物をこそ思へ　　俊頼朝臣

夫木和歌抄卷第二十九終

夫木和歌抄卷第三十

雜十二

題　國　禁中　仙家
閑居　窟　宅
隣　山家　田家　都　故郷　故宮
庵　屋　屋形

國

老若五十首歌合　後京極攝政
玉神祇　我くには天照神のすゑなれは日のもとゝゑもいふにそありける
弘長元年百首題　後九條内大臣
山はみなあつまもろこし霞みけりわかくにひろく花やさくらん
家百首　民部卿爲家
あきつしまひとの心をたねとしてほかにはきかぬやまと言の葉
永仁三年家歌合　參議爲相卿
六帖題(てるひ)　島のほかもなみ治れるあきつ國にみちある君のめくみをそゑる
六六一　天津そらかはらすてらす日のもとのくに靜なる御代そかしこき
同(國)　新六二　正三位知家
さかひこそ數にはあらぬ國なれとあきつゑまにそ法はひろまる　光俊朝臣

題不レ知

萬二十　いさ子ともたはわさなせそ天地のかためし國そやまと玄まねは　よみ人しらず

大將會悠紀方御屏風

現存六　あし原やみつほの國をもる山もとよのあかりのおもしろきかな　前中納言匡房卿

御集國イ

現存六　あしはらのくにつによせしいは舟のさして契りし末なたかへそ　洞院攝政

國

いつる日のたかみの國をやすくにと祈るすゑをは神やてらさん　卜部兼直

建仁元年老若五十首御歌合

ひとのすむやまとは花の國なれやみよしの丶山をはつせのやま　慈鎮和尚

同

むかしよりみくにつたはる法の水なかれてすめる四のうみかな　後京極攝政

百首歌合春曙

はなの色鳥のこゑまてゆかしきは彌陀の御國のはるのあけはの　權僧正公朝

正治三年百首

いくよろつ君をめくまん紀の國やみつの山にも千代をそへつ丶　皇太后宮大夫俊成卿

千五百番歌合

いさなきやいろはも同し末なれは君にちきれるとよくにのつち　大納言道具卿

同

もろこしの代々はうつれと玄きや玄まや大和島根は久しかりけり　土御門内大臣

同

津の國のみつとないひそ山城のとはぬつらさは身にあまるとも　後鳥羽院宮內卿

建保三年名所百首

としへぬる松もむかしに山城のとはにあひみんちよのふるみち　順德院御製

六帖題

新六五　よ丶かけて思へはひさしあしはらや中津國よりならふことのは　民部卿爲家

同

同二　かけまくもかしこかるへし玄き島や大倭くにになる大みやところ　同

文永二年每日一首中

ひとつにそかみも佛もまもるらんわかひのもとの大やまとくに　同

住吉社三十首

名も玄るし年もつもりの國をへてなほもやそちの坂そこゆへき　從三位家隆卿

建長八年百首歌合

萬六　おしてるやおしてるや玄まねのくにの、あしかきの、ふりにし里と、人なみの、おもひやすみて、つれもなく、　藤原伊嗣朝臣

雜波に幸の時長歌

長歌

萬一　あめつちも、よりてあるにそ、いしはしる、あふみのくにの、こころ　笠金村

同

萬十三　もての、たなかみ山の、あしはらの、みつほのくにゝ、たむけすと、あまくたりきす、いほ　同

同

萬一　よろつ、千萬かみの、かみ代より、　同

同

萬一　あまさかる、ひなにはあれと、いしはしる、あふみのくにの、さゝなみの、おほつのみやに、　人丸

同

萬二十　すへらきの、とほのみかとゝ、玄らぬ火の、つくしのくには、あたまもる、おさへのきそと、きこしめす、　中納言家持卿

同

萬十三　こもりくの、はつせのくにゝ、さよはひに、われかきたれは、たなくもり、雪はふりきぬ、さくもりて、あめはふりきぬ、　よみ人しらず

幸于吉野宮の時

萬一　やまかはの、きよきかうちと、みこゝろを、よしのゝくにの、花ちりあふ、あきつのゝへに、みやはしら、ふとしきませは、　人丸

靈龜

うこきなき大和玄まねのときはきもくにを治めし神やうゑけん　卜部兼直

此歌は定嗣卿人々に貞觀政要の文をよませ侍りし時治國如レ栽レ樹の心を

雜歌の中　他　阿上人

一須彌のよつのおもてのそらをゆく月日や國をまかへさるらん
神國と豐あしはらをさためおきて君のまもりのかきりなのよや

六帖題　權僧正公朝

波たゝて風をさまれる君か代にその名あらはすうらやすのくに

中務卿親王家五十首歌合　同

此歌判者光俊朝臣云浦安國は伊非諾尊名付給りげにも他にこと
にこそ侍ければ波平風靜也嘉名かた〳〵賞待べきにこそと云

五行の御歌に中　後京極攝政

むかしよりみやこゑめたるこの里は唯わかくにのも中なりけり

々

禁中

寛喜元年女御入内御屏風　西園寺入道前太政大臣

こゝのへのにはにかさぬるさかつきのさすやひかりの雲の上人

同　従二位家隆卿

としことの山あゐの袖にひくこまのたえせぬ今日の春のにはに哉

同　正三位知家卿

かすみゑく雲井のはるの空なからゆきをめくらすやまあゐの袖

二夜百首御歌　後京極攝政

萩の戸の花のゑたなるみかはみつちとせの秋のかけそうつれる

同　同

冬のあした衛士のけふりをたつるやのあたりはうすき九重の雪

寶治二年百首水邊螢　正三位知家卿

これもまた衛士のたくひか百敷のみかはのいけの夏むしのかけ

題不ゝ知　賀茂重保

名もたかきおほうち山をたちいて〳〵月すみわたる御川みつかな

洞院攝政家百首　従二位家隆卿

御集月　法性寺入道關白

同　同

一二三句のかみにおきて秋の心を

十題百首居所　後京極攝政

後京極攝政家十首歌合禁庭螢　同

建久元年一字百首冬歌　同

仙洞三十首花歌　中納言定家卿

百首御歌禁中　同

同　同

六帖題　爲家卿

十題百首御歌　藤原朝臣

同二年百首　慈鎮和尚

正治二年仙洞歌合庭松　同

六帖題秋の月　信實朝臣

同もゝしき　後京極攝政

文永六年五社歌　従二位家隆卿

いくちよの秋をはふともさゝたけのおほうち山の色はかはらし
九重にたゝめるたまの御はしよりかたふく月のねりのほるかな

とねりめすとよのあかりに月さえて宮人わたるたつの尾のみち
九重やなかき夜すからもる水のおとさへさむきにはのはつしも

もゝしきやもる白玉のあけかたにまたゑもくらきかねの音かな
さえのほる御はしのさくら雪ちりて春秋みするくものうへの月

百敷やてる日のまへにとるほこのたつるこゝろは神もみるらん
うらみはや御はしの前にとるほこの身をたてかぬる花のゑた蔭

みやき野をおもひいつるそあはれなるけふ萩の戸の秋の匂ひに
これをみん人は心をみかくへしおほはのむくのいにしへのあと

新六二　とのへみれは古きみかきのかはらふき變らぬ御代に又めくる哉
もゝしきやたまのうてなにてる月のひかりをえたる秋のみや人

よろつよに玉しく庭の松のかけはるの日かけものとかにそさす
もゝゑきや玉しくにはの清きせにひかりをそへてやとる月かな

新六一　ゑひてみる秋の吃哩字のうへにこそなほ九重のつきはすみけれ
同二　たちよりてまつ袖みせしかたなしの軒の下こそわすれかたけれ

百敷やなかれひさしき河たけのちよのみとりはきみそみるへき

百首歌禁中　　参議雅經卿
河竹のかはらぬいろのふかみとりたましく庭のすゑそゑらるゝ
同　　同
をさまれる御代のためにやかきとめて風も音せぬあら海のなみ

仙家

永久四年百首仙家　　仲實朝臣
漢故事和歌集
もゝの花ゑけきみ谷にたつね入ておもはぬ里にとしそへにける
同　　俊頼朝臣
たちぬはぬ衣のそてしふれけれは三千とせふへき桃もなりけり
同　　源兼宮
のりてゆくつるの羽風にくもはれて月もさやけくすむ山邊かな
承久元年内裏　　前中納言定家卿
やま人もすまていく代のいしのゆか霞にはなはなほにほひつゝ
弘安元年九月詩歌合仙家　　亀山院御製
勝超
非秋をこゝにとゝめてとしをふるわかすむ宿やこの名なるへき
同　　入道前太政大臣
たつねけん心をそゑる雲のなみけふりのなみのふかきやとりを
同　　前大納言爲家卿
う゛てみる山路の菊のとしをへてをのゝえくちん秋そひさしき
同　　從三位顕成卿
ふくかせもをさまる御代のあさち山いつる月日の影ものとけし
仙洞詩歌合仙家秋興　　從二位行家卿
ふるさとはちとせの秋や過ぬらん君すむやまのもみち見るより
龍門にまうでゝ仙屋書つけける　　能因法師
あしたつに乘てかよへる宿なれはあとたに人はみえぬなりけり

都

題しらず　　笠金村
萬六
よろつよに見ともあかめやみよしのゝたきつ河内の大宮ところ
同　　よみびとしらず
いつみ川ゆくせのみつのたえはこそ大宮ところうつろひゆかめ
同　　同
みかの原ふたいの野へをきよみこそ大宮ところさためけらしも
山城の此みやこをやまもりけんをかたの賀茂にあとたれしより
新後撰秋上　　從二位行家卿
こひそめしこゝろはいつそ石上みやこのおくのゆふくれのそら
玉葉　　慈鎮和尚
ほとゝきす青葉の山にかへるとも花のみやこをおもひわするな
後鳥羽院御製
いさきよきたまのみやこをいつる日は我立柚のひかりなるらん
新撰萬葉　　前中納言道房卿
かきちらし花とのみふる空ら雪はくものみやこの玉のちるかも
光明峯寺入道攝政
新六二　　よみ人しらず
たつねすはいかてか知らんわたつ海のなみまにみゆる雲の都を
萬三　　太宰大弐高遠卿
あともなきむかしかたりの古都のこるなにはゝうらさひにけり
萬六　　信實朝臣
むかしこそなにはゝ中と謂れけめ今はみやことそなはりにけり
萬六　　式部卿宮合
さよふけてふるの都のほとゝきすかへる雲路にこゑをきかせよ
現存六　　よみ人しらず
みかのはらくにの都はあれにけりおほみや人のうつりいぬれは
萬十七　　同
やま空ろの、くにのみやこは、はるされは、花咲をゝり、あきされ
光明峯寺入道攝政
は、もみちはにほひ、
境部宿禰老丸

同　　中納言家持卿

萬三
おほやまと、くにのみやこは、うちなびき、はるさりくれは、山へには、花さきをゝり、かはせには、あゆこさはしる、

建治三年名所百首　　從二位家隆卿

故郷秋風　　法印尊海

明玉
さひしともたれかはきかんいつみ川くにのみやこの松のあき風

萬二
たかてらす、日のわかみこは、とふ鳥の、きよきみやこに、かみのまに、ふとしきまして、

同

萬二
わたらひの、いもゐのみやこ、かみ風に、いふきまとはし、あまくもを、日のめもみせす、とこやみに、おほひたまひて、

同

萬一
この川の、たゆることなく、此山の、いやたかゝらし、たき水の、たきつみやこは、みれとあかぬかも、

同

建長七年顕朝卿家千首歌　　藤原光朝朝臣

洞院攝政家百首御歌月

題不レ知（ひさかたのみやこ）　　光明峯寺入道攝政

萬十三
今はゝやこほりもとけぬたま水のたきのみやこは春めきぬらん

同（まかのみやこ）　　よみ人しらず

萬十三
月影のやとりてみかくたまみつのたきつみやこに秋かせそふく

同　　祝部成茂

明玉
ひさかたのみやこをおきて草枕たひゆくきみをいつとかまたん

萬一
ふりぬとて玄かのみやこを山さとにたれすみなして衣うつらん

同　　よみ人しらず

萬一
いにしへの人にわれあれやさゝ波のふるき都をみれはかなしき

同　　親王

秋の野の尾花かりふきやとれりしうちの都のかりいほしそ思ふ

壇千秋下　石間

おはなふくかりいほ寒き秋風にうちのみやこはころもうつなり

藤原顕成

（ふぢはらのみや、大和）

長歌

萬十
藤はらのふるきみやこの秋はきはさきてちりにき君まちかねて

萬十三
あやにかしこき、藤原の、みやこしみゝに、ひとしもの、みちてはあれと、きみしもの、おほくおはせと、

題不レ知（ならのみやこ）　　福丸

萬十六
世中をつねなきものと今そしるならのみやこのうつろふみれは

萬八
あわ雪のほとろ〳〵に降玄けはならのみやこしおもほゆるかも

同　　太宰師大伴卿

萬十五
うな原をやそ島かくれきぬれともならのみやこは忘れかねつも

同　　よみ人しらず

萬十六
くれなゐにふかくそみにし心かもならのみやこに年のへぬれは

同　　同

萬十五
あをによし奈良の都にたなひけるあまの白雲みれとあかぬかも

同　　同

萬十六
たちかはり古きみやことなりぬれは道の芝くさなかくおひけり

萬代　壇後拾雑
いにしへのならの都の宮はしらこのかたなしになほのこるかな

同　　中原光朝卿

雲葉
道芝のしも夜の月をふみならしふりにしみやこあれにけらしも

ひなイ　　三條右大臣

玄なさかるこしの國邊にありしかはならの都も玄らすなりにき

鎌倉右大臣

竹のみやまかきにうゑて千代までもいはひそめけん此君そこれ

皇太后宮大夫俊成卿

おもへたゝ竹の都にかすみつゝ玄めのほかなる御代のけしきを

俊頼朝臣

此歌は伊勢に侍ける比正月廿八日齋宮おりさせ給ぬときゝて

むろ山の入道がもとより「ふるさとゝなりぬるみやの夕かすみおもひかけすやたちかはりけん」とよみておくりけるかへ

しと云々

霜ふかきその丶都にすむひとはきえかへりてかあさ日をそまつ　よみ人しらず

此歌判者清輔朝臣云ゑもふかきといへることばあかひをうまへるなどあるおもふ心なきにあらず但その丶みやこぞ歌合などにかやうにはよむべしともおほえずと云々

新羅社歌合述懐

故郷

故郷歌

千五百番歌合

永仁元久二年詩歌合水郷春望

六百番歌合

長歌

思二故郷一

題不レ知

長歌

萬二　よそにみし真弓のをかも君ませはとこつみかと丶宿直するかも　よみ人しらず

めくりゆく秋やはもとのあきのそら月そむかしの玄かのふる里　後鳥羽院御製

新千春下　みやきもりなきさの霞たなひきてむかしも遠き玄かのはなその　前中納言定家卿

萬二　ゆゑもなき、まゆみのをかに、みやはしら、ふとしきまして、みあ　寂蓮法師

萬七　らかを、たかゑりまして、あさことに、　人丸

萬七　きよきせに千鳥つまよふ山きはにかすみ立らんかみなひのさと　同

萬三　わすれ草我か紐につくかく山のふりにしさとをわすれしかため　よみ人しらず

萬十　ますらをの、いてたちむかふ、故里の、かみなひ山に、あけくれ　同

は、つみのさえたに、夕されは、

萬六　故郷のあすかはあれとあをによしならの飛鳥をみらくしよしも　坂上郎女

萬二　よしもなくさたの岡邊にかへりゐは島のみはしに誰かすまはん　人丸

萬十二　大はらのふりにし里にいもを置てわれいねかねつ夢に見えつ丶　同

萬二　わかさとに大雪ふれり大はらのふりしにし里にふらまくはのち　天武天皇御製

冬くれはふるさとさむし大原やおほろの玄みつさえやまさらん　前中納言国房卿

みの丶くにたきの丶うへに宮居せしあとに流れてたきそ殘れる　權少僧都玄覺

いのりおきしわかふるさとの三笠山きみの玄るへとなほ思ふ哉　前中納言定家卿

色ふかきよろつの葉まてならのはの名におふ宮にちり初めけり　家長朝臣

さほとの丶榮ゆる見れはかけふれて古郷とこそおほえさりけれ　源兼昌

さしなからまた斧の柄はくちなくにまかきもねやもあらぬ里哉　仲實朝臣

ほと丶きす誰玄のへとか大あらきのふりにし里を今もとふらん　前中納言定家

ちはやふるならの宮ゐにいのりして大和ことのは道をはるけよ　民部卿爲家

玄のへともいはぬ色なるやまふきの花に戀しきゐてのふるさと　後久我内大臣

夏かりのあし間の浪のおとはして月のみのこるみほのふるさと　寂蓮法師

白雲のたつ野とよそに見えつるは卯のはなさける小野のふる里　嘉陽門院越前

露の袖霜のさむしろいかならんあさちかたしくをの丶ふるさと　後京極攝政

天徳三年八月女房前栽合　元眞
歌題不知

けふよりはかすむ山路にたちのほり三輪の古里ほのかにそみる

登議忠基卿

文集百首歌に秋風不破關　建長七年顯朝卿家千首關紅葉　光俊朝臣

ふちはら原のふるさと人になれる身を玄ま松のえもさこそ玄るらめ

貞應三年百首　信實朝臣

ふるさとのふはの中山日はくれてせきやさひしく秋かせそふく

民部卿爲家

山風に玄くれそいまはふるさとのふはのせきちは紅葉しにけり

ねやのうちの眞木のいたさへ苦むしてやつれ果たるくさの故郷

故宮

八幡若宮歌合仙洞より侍けるに故郷霧（玄きしまの宮）

後京極攝政

やまとかも敷島の宮玄き玄のふむかしをいとゝきりやへたてん

中納言家持卿

高まとやあれのみまさる宮のうちにのこるむかしの庭の松かせ

土御門院御製

をはたゝの宮のふる道いかならんたえにしのちは夢のうきはし

同

よそにみし古き木すゑのあともなしひはらのみやの秋の夕きり

從三位家隆卿

おひかはる木末もあらすふりにけり檜原の宮のあきのもみちは

信實朝臣

まきもくの玉きのみやに雪降れは更にむかしのあしたをそ見る

皇太后宮大夫俊成卿

すか原やふしみの宮のあとふりていくらのふゆの雪つもるらん

前中納言定家卿

正治二年七月當座三首歌合　後鳥羽院御製

御集

家集

雜歌中秋風　醍醐入道太政大臣

百首御歌　鴨長明

同　按察使國隆卿

長歌　慈鎮和尚

ふるさと（大津宮、近江）　同

家集

同（ひのくまのいりの、宮、大和）　よみ人不知

七百首歌古宮（なからのみや、攝津）

同（あちはらのみや）

弘安元年中務卿親王家百首（よしの、みや）　後九條内大臣

建長七年顯朝卿歌千首故郷（おちふのみや、攝津）　人丸

柿本影供百首（おきつのみや、大和）　光俊朝臣

題不知（つゝきのみや、山城）　權僧正公朝

荒にけるたかつの宮をきてみれはまかきの蟲やあるしなるらん　同

いにしへの高津の宮のあとふりてむしの音のみそ秋をわすれぬ　少僧都玄覺

あれにける高津の宮のあさちはらなほたましきのむらさめの露　法印尊海

日本紀竟宴歌

おほさゝき高津の宮は雨ふれとつかれぬことをたみはよろこふ　よみ人ふらす

松風はいつくもおなしこゑすなりたかつのみやの秋のゆふくれ

玉葉雜五

むかしおもふ高津の宮のあとふりてなにはのあしにかよふ浦風

萬四

やすみ玄る、わか大君の、ありかよひ、なにはのみやは、くちらとり、うみかたつきて、たまひろふ、はまへをちかみ、

現存六

ふねとむるみなとやいつこさゝなみの大津のみやの秋の夕きり

拾遺

さゝ波や大津のみやは名のみしてかすみたなひき宮木もりなし

ひのくまのいりの、宮のさゆる日は川せこほりて駒もわたさす

いにしへのなからの宮はあともなしはし柱たにくちはつる世に

おしてるや海かたまけてみせんかもあち原のみやに玉拾ふかも

くにみせしむかしはとほく霞きぬよし野のみやのはるのよの月

たつのなくあしへの浪に袖ぬれてあちふのみやに月をみるかな

古來歌

みよしの、あきつの宮のさくら花いくよさきてか神さひぬらん

日本紀

山城のつゝきの宮にものまうすわかせをみれはなみたくましも

弘長元年百首（かしはらの宮、大利）　法印定圓
六帖題やな　権僧正公朝
題不レ知（ふたいのみや、山城）　よみ人しらず
長歌　同
同（うれひのみや）　中納言家持卿
同　人丸
題不レ知　同
橘寺にまうで〜月をみて　寂蓮法師
題不レ知　よみ人しらず

古來歌
あめつちの神代は去らすかしはらの宮ゐそ國のはしめなりける
そひかはにやなうつ男はやくこそにへ備へけれかしはらのみや
萬六
ふたいやま山なみ見れはも〜代にもかはるへからす大宮ところ
山去ろの、かせ山きはに、みやはしら、ふとしきまはり、たか去り
し、ふたいのみやは、かはちかみ、
萬廿
あきつしま、やまとのくにの、かしはらの、うねひのみやに、みや
萬二
はしら、ふとしきたて〜、あめの去た、去らしめける、
萬二
わか大君の、よろつ代を、おもほしめして、つくら去し、かく山の
萬一
みや、よろつよに、
萬代
橘の去まのみやにはあかすともさたのをかへにとのゐしにゆく
知さりしむかしさへこそ戀しけれたけちのみやの月をなかめて
いとねたしく〜りの宮の池にすむこひゆゑ人にあさむかれぬる

文集百首　前中納言定家卿
同始知眞隆者不ニ必在ニ山林一　同

閑居

我やとのみきりにたてる松の風それよりほかはうちもまきれす
爪木こるやと〜しもなしすみはつるおのか心そ身をかくしける

家五十首閑居　寂多院入道二品のみこ
同　三條入道左大臣
同　前大納言爲家卿
同　源師光
同　覺延法師
同（閑居）　前大納言隆房卿
同　皇太后宮大夫俊成卿
同　同
同　定家卿
同　正三位季經卿
同　寂蓮法師
六帖題雜の月　光俊朝臣
文集百首閑居進不レ服ニ市廛一、不レ戀ニ人老一　前中納言定家卿

岩ねふむやま路はこけにうつもれて雲こそかよへ人はとひこす
とことはに身をも離れぬかけたにも月入ぬれはみえすなりけり
いつとても人めまれなる山里はおもひもわかぬふゆのさひしさ
やま里はほそ谷かはのさ〜れ水おとなふさへそさひしかりける
山さとは月のひかりもすみかへてたもとの露にやとるなりけり
谷のみつみねのまつかせ音信てなにかさひしきすまゐなるへき
音たえぬまつのあらしもあるものをとへかし人の秋のけしきを
さもこそは庭は木のはにうつもれめこけおひにけりまつの下道
玉雜三
のこる松かはる木草のいろならてすくる月日も去らぬやとかな
夕暮のあはれをたれにかたらまし人もとひこぬやまのすみかを
山田もるひたの音にそおのつから人すむさとのあたりともきく
新六一
さこそあれまた人おともせぬいほにふけたる月をみるか哀しさ
里ちかきすみかを分て去たはねはつかふる道をいとふともなし

窟

後法性寺入道關白家百首　後京極攝政
述懷
うき世かなひとりいはやの奥にすむこけの袂もなほしほるなり

十題百首居所
晩イ
曉嵐拂雨針陽見、寒浪間水流水無

百首御歌

千五百番歌合（野へのいはや）

建久七年百八十首和歌
大堂神童子いはやにて（神のいはや）

文治三年十首歌よしの〜いはや

後成卿家十首歌

家集山家心を

百首御歌中

六帖題みれのいはや

花月百首みれのいはや

家集戀歌中えそかいはや

三百六十首中かさきのいはや

題不ノ知（しつのいはや、未勘國）

同（みほのいはや、紀伊）

紀伊三穂窟にてよめり　ろイ

山ふしの岩屋のほらにとしふりてこけにかさなるすみそめの袖
苔ふかきいはやの床のむら時雨よそにきかはやありてうき世を
山ふかき岩屋の月はあけやらてこけのとひらにあきかせそふく
むかしきく野への岩屋そ哀なるあらしのそこをゆめに見えけん
よしさらはともなひはてよ秋の月こけの岩屋によはそむくとも
認葉
雪間よりたちいて〜みれはかすみけり神のいはやの春の明ほの
ふりまさる吉野のみゆき跡たえてもらぬ岩屋はおとつれもなし
冬こもるよし野のやまの岩屋にはこけの衣つくに春を去るらし
吉野やまおくのいは屋を見ぬ人やゆき降さとを近しといふらん
ときは山かすみわたれる明ほのやおくの岩やもこゝろすむらん
新六一
あはれなり峰の岩屋の冬こもりのほるけふりのたゝぬはかりそ
おもひやる峯の岩屋の苔のうへにたれかこよひの月をみるらん
奥のうみやえそかいはやのけふりたに思へはなひく風は吹らん
河かみやかさきの岩屋けをぬるみこけをむしろとならす優婆塞
苔三
おほなむちすくなひこなのいましけむ賤の岩やは幾代經ぬらん
苔二
はたすゝきくめの若子かい座けるみほの岩屋は見れと厭ぬかも
同
岩屋戸にたてる松の木なれをみはむかしの人をあひみしかこと

同　　定圓法師
前中納言定家卿　　民部卿爲家
後九條内大臣　　光俊朝臣
皇太后宮大夫俊成卿　　北院入道親王二品みこ
前中納言定家卿　　民部卿爲家
前權僧正宗イ慶　　權僧正公朝
前中納言定家卿　　大江千里
從三位頼政卿　　順德院御製
從二位家隆卿　　慈鎮和尚
前中納言定家卿　　衣笠内大臣
後九條内大臣　　定圓法師
從二位家隆卿　　民部卿爲家
好忠　　光俊朝臣
よみ人しらず　　北院入道親王二品みこ
同　　民部卿爲家
同　　權僧正公朝
鄰道法師　　大江千里

弘安元年百首雜歌中

寶治二年百首

同
紀の國やみほのいはやとさすかなほ風こそふるき松にふくなれ
わか戀はみほの岩屋にふるあめのいつくもりてか人に去られん

宅

六帖題

同題わする

百首御歌秋

洞院攝政家百首不ノ逢戀

中務卿親王家五十首歌合

同

柴門日暮題ノ風掩

新六二
いかにせん家に傳ふる名のみしていふにもたゝぬ大和ことのは
新六五
から人の我妻去らぬいへうつりそれをためしのこひもするかな
やま里はまはらの軒のかやまよりもりくる秋のゆふつく夜かな
東路や杉いたふきのひまをあらみあはぬ月日もさてすくせとや
まはらなるはにふの小屋もぬれなくに小雨に過て降木の葉かな
家集
まくすはふよもきか宿のゆふ風にうらみもまさるむしの聲かな
わひてすむ宿にひかりのくれゆくは吹風のみそとさしなりける

廬

百首御歌

賀茂社百首御歌

さゝ分る野への庵のとまをあらみあはてぬる夜の月そのこれる
つちかへに窓ぬりのこすいほまてもすさめすやとる秋の夜の月

百首歌

寶治二年百首旅宿　寂蓮法師

雲につくみねの庵にねさめしてたゝこゝもとにはつかりのこゑ

家集山家春雨　正三位知家卿

玄の原やさてもこゝろはとまらねとみくさかりふきさす庵かな

題不レ知　源仲正

山かつのいほりはかやのぬけめよりわりなくもるゝ春の雨かな

嘉應二年住吉社歌合旅宿時雨　藤二千

たらちめの母を別れてまことわれ旅のかりほにやすくねんかも

千首歌　よみ人しらず

かりほさすならのかれはのむら時雨哀まさきのおとはかりかは

寶治二年五首盛五月雨　智經法師

行暮てやとかるいほの杉はしらひと夜のふしもわすれやはせん

建長八年百首歌合　民部卿爲家

かけつくる谷のいほりの軒端より玄つくもなかし五月雨のころ

御集田家月(田いほ)　信實朝臣

山かつのいほはあらはに霜かれてこゝろはかりや冬こもるらん

洞院攝政家百首(しはのいほり、風山)　從二位良教卿

まはらなる田庵にすこかいをやすみ月にもら玄て幾代あかしつ

寶治二年百首夜鹿　後法性寺入道關白

秋されは玄くれもるまもあらし山もみちふきそふ柴のいほりに

家集秋のくれによしの、山にこもりたる人のもとへ　光明峰寺入道太政大臣

小鹿なくみねの玄はやのあき風にねやまのいほの夢はたえにき

紙後拾遺雜上　紫藥非入道太政大臣

よしの山もみちのいほりいかならん夜半の嵐のおとそはけしき

山階入道左大臣家百首山家風(松のいほ、あらし山)　山田法師

後鳥羽院遠所にて影供御歌山家夕藤(松のいほり)　民部卿爲家

おもひやれ山はあらしの松のいほむすへは夢もやふれやすさを

家集秋歌中(いほ)　從二位家隆卿

みやこ人松のいほりのふちの花あめさへふりてゆふ玄をれつゝ

同　をらてふく下葉のもみち玄くるなりもる山人のいほもたまらす

十題百首(杉のいほり)　寂蓮法師

正治二年百首(みれのいほり、よしの山)　小侍從

建久四年風(さゝのいほり)　六條院大進

題不レ知　よみ人しらず

嘉多院入道二品親王家五十首　大藏卿有家

花月百首　慈鎮和尚

御集泊瀬山春　後京極攝政

山ィ　よみ人しらず

建保三年名所百首(いほり歸山)　兵衛內侍

文治六年女御入內御屏風(しはいほ)　正三位季經卿

後九條內大臣家卅首旅宿(あらしのいほ)　前中納言定家卿

嘉祿二(六ィ)年百首(をはなのいほ)　民部卿爲家

建長四年三首山家夏草(露のかりいほ)　同

慈鎮和尚にまゐらせける哀傷十首中　前中納言定家卿

旅御歌中(かりのいほり)　後京極攝政

後法性寺入道關白家百首雪(いほり、かいのしられ)　同

洞院攝政家百首旅(霜のいほり、非なの)　後九條內大臣

いなり山杉のいほりにまとあけてあかたてまつる音もほのかに

よそにてやかすむと見まし吉野山みねにいほりを結はさりせは

吉野山みねのあらしのはけしさにさゝのいほりは露もたまらす

萬七まこか　さかさま　がこもり高

たかまとのあをさることやかくらくの初瀬のやまに庵すといふ

をはつせのふもとの庵もかほるらんさくら吹まく深山おろしに

いほの上にいくへにしきをふきつらん花ちる春のをはつせの山

はつせ山花にうき世やのこるらんいほあはれなる春の木のもと

六二

雨ふれはみかさの山の木の本もぬれぬいほりはなしとこそきけ

みやこ人くるれはやかて歸る山なにそはひとりとまるいほりそ

秋風になひく稻葉のたえまよりほのかにみゆる玄つか玄はいほ

山かけやあらしのいほのさゝまくらふし待すきて月もとひこす

とふ人のまねくたよりもたえはてぬ尾花のいほの野への霜かれ

たれかこんやまかけふるき夏草にまかせてむすふ露のかりいほ

小山田の露のかりいほのやとり哉君をたのまんいなつまのかけ

あけかたになるや白露數そひぬかりのいほりのあしのすたれに

いほりさすかひの玄らねのたひ枕よすかに雪をはらひかねつゝ

さゝむすふ霜のいほりのかりまくらたれとゐなのゝよるの月影

月いつるうしろのやまは雲はれてすまのいほりにかへるうら風　後九條内大臣
いほりさすよとの河きし水こえてうきぬはかりの五月雨のころ　民部卿爲家
萬十六
おしてるや、なにはのうらに、いほつくり、かたまりてをる、あし　よみ人しらず
かにを、おほきみめすと、なにせんに、

御巢(すさのいほり)
貞應三年百首河邊家(いほり、よと川)
長歌(いほ、難波江)

題不レ知
同
老若五十首歌合(あしのまろや)
千五百番歌合
家集遇不レ逢戀(あしや)
文治六年五社百首
正治二年百首(しかのはまや)
堀河院御時百首
春日社奉納百首不レ逢戀(みわのすさき)
題不レ知(ひや)

屋

萬十一
難波人あし火たく屋のすゝたれとおのか妻こそとこめつらしき　人丸
萬十六
夕つくひさすや河邊に造る屋のかたちをよしみうへそよりつる　よみ人しらず
ふし馴しあしのまろ屋も霜かれてうちもあらはにやとる月かな　後京極攝政
詠やる野へもひとつに霜かれてあしのまろやにふゆは來にけり　大藏卿有家
山かつの蘆屋にかけるたかすかきふしにくしとも思ひけるかな　後鳥羽朝臣
難波女かあしの玄のやの玄のすかき一夜のふしも忘れやはする　鳥太后宮大夫俊成卿
都路はとほからねともくさまくら玄かのはまやも浪はかけゝり　同
玄なか鳥ゐなのは山に旅ねしてよはのひかたにめをさましつゝ　後鳥羽朝臣
萬十六
よそなから三輪のすきやのいたまよりつらさあらはに明る山風　安嘉門院四條
朝霞かひ屋か玄たになくかはつ玄のひてありとつけんこもかも　よみ人しらず

あつまやの軒のかやまにおふときく人を玄のふは我身なりけり　清輔朝臣
さえあかすさゝやの庵のかりひさしたゝひとへなる夜半の白雪　太宰帥爲經卿
すゝきふくほやの軒端のひと方になひかは神の玄るしともみん　參議爲相卿
さても世を過しけるよと外に見しひなのさゝやに幾代とまりぬ　北院入道二品のみこ
わくらはに問人もかなあまさかる鄙のさゝやにわふとこたへん　權僧正公朝
峯わたる風なかりせはあはらやの軒に木の葉をたれかふかまし　喜多院入道二品のみこ
新六一
あはらやのいた間つゝきの長きよにうたゝめさます月の影かな　信實朝臣
月にこそふせ屋のすたれあけしかと卯花にまたおろされぬかな　中納言資仲卿
冬の夜はとふのすかこもさえ〳〵て獨ふせやそいとゝさひしき　大炊御門右大臣
今朝みれはきそのふせやの竹はしらたはむはかりに雪降にけり　喜多院入道二品のみこ
野邊玄むるすゝの玄のやに玄きたちて窓に傾ふく月をみるかな　慈鎮和尚
こよひたれすゝの玄のやに夢さめてよし野の月に袖ぬらすらん　後京極攝政
はるかなる野中の松を友と見てすゝの玄のやに世をやすきまし　寂蓮法師
よしの山秋風たちぬいかはかりすゝの玄のやのすゝしかるらん　從二位家隆卿
かた岡のすゝの玄のやに秋暮ぬ玄くれもらすなならのうはふき　嘉陽門院越前
光臺院入道二品親王家五十首野徑月(玄すゝのまろや)
とまるへきすゝの玄のやは荒にけり里まておくれ野への月かけ　從二位家隆卿

永萬二年五月經盛卿歌合
戀(あつまや)
百首歌(さゝや)
楚忽百首戀歌中(ほや)
家五十首御歌旋(ひなのさゝや)
題不レ知
百首御歌冬(あはらや)
六帖題
夕對三卯花一二字抄(ふせや)
久安百首
百首御歌中(きそのふせや)
同(すゝのきのや)
花月百首御歌
百首歌
家集秋歌中
千五百番歌合

家集題歌中（かはらや）
建保二年内大臣家百首水郷旅宿（波のとまや）
家集ある人の贈答（とまのや）
神力品如来一切秘要之藏（柴や）
久安百首（あまのかこや）
百首歌述懐（つかや）
家集深山霧（まきのかりや）
千五百番歌合（あまのふせや）
十題百首御歌
百首歌（ぬてのかはや）
六帖題やどり（はにふのこや）
くちかたむ
題不知
三百六十首中（なにはのこや）
寶治二年百首（あかしのこや）
法輪百首山家述懐（あふりや）

死屋のゑたゝく人もこひわひぬさらはあさまのけぶりともなし　従二位家隆卿
冬の日のみしかきあしは霜かれてなみのとまやに風そよわらぬ　前中納言定家卿
とまの屋に浪立よらぬけしきにてあまり住憂きほとは見えにき　四行上人
くらふ山かこふしは屋のうちまても心をさめぬところやはある　同
潮たるゝ蜑のかこやになにとしてやくとも叩くよはのくひなそ　前参議親隆卿
うき身をはつかやのほとにすむ鬼の一口にたになりねとそ思ふ　寂蓮法師
そま人のまきのかりやのあたふしに音する物はあられなりけり　四行上人
紀の國や蜑のふせやのとまひさしふきあけのちとり月になく也　後鳥羽院宮内卿
夕なきに浪間の小島あらはれてあまのふせやをてらすもしほ火　後京極摂政
春の日は行もやられすかはつなくぬてのかはやに駒とゝめつゝ　重之
新六二
宿りする埴生の小屋のかつらにてぬるかうちたに見る夢もなし　民部卿爲家
新六五
河をちのはにふのこやのかり枕ゆめになしてもひとにかたるな　光俊朝臣
萬十一
久方のはにふのこやに小雨ふりとこさへぬれぬ身にそへわきも　よみ人しらず
風夏　新後拾夏
あしのはに隠れてすめる難波女のこ屋は夏こそすゝしかりけれ　好忠
おく篠に袖さへぬれてをちかたの明石のこやにあかしかねつゝ　衣笠内大臣
わひ人のかたちにかくるあふりやのゑたくらなりや山陰にして　源仲正

家集旅歌中（たびやかた）
嘉應二年住吉社歌合旅宿時雨
嘉祿二年百首（かりやかた）
久安百首（くゝめやかた）

六帖題
同
同題の御歌となり
同
幽谷聞鹿
家集花十首歌中
永久四年百首隣

屋形

朝夕にさしてはこえつたひやかた立居につけていとまなのよや　源正仲
神無月ゑくるゝ夜半の旅やかたもるとはなしにぬるゝそてかな　藤原惟綱
かりやかた又やむすはんいほさきのすみた河原に今日も暮しつ　民部卿爲家
をかや苔くゝめ屋かたの竹はしらふしよからぬは旅寝なりけり　前参議親隆卿

隣

新六二
さと人の軒をならへて住やともいつくまてこそとなりなりけれ　衣笠内大臣
同
家になき四のとなりの垣こしはうたてといふもにくからぬかな　光俊朝臣
いかにせんよつの隣の宿にたにかなしむこゑのたえぬうき世を　中務卿のみこ
あまたゝひとなりをかへて敎へける人の親こそかしこかりけれ　權僧正公朝
どなりゐぬはたのかりやに明すよは鹿哀れなる物にそありける　四行上人
はる風のふくにつけてや山さくらとなりのまつに花はかそへん　修理大夫顯季卿
色かへてふりぬる物はとしたかきとなりの松とわれとなりけり　仲實朝臣

同　たらちねの更にとなりをかへけるも子を思ふゆゑと聞そ悲しき　藤原忠房
文集百首寒蟲飛念覺二秋蟲一聞鶏鳴遇知二夜長一　まきの屋にとなりの霜はしろたへのゆふつけ鳥をいつか聞べき　前中納言定家卿

山家

延長二年御屏風　かひかねの山里みれはあしたつのいのちをもたる人そすみける　貫之
宇治殿にて山家旅情　宿侍　旅ねするやとは深山にとちられてまさきのかつらくる人もなし　大納言經信卿
千五百番御歌合　老の後月にすみけんからひとのあとをたつねているやま路かな　土御門内大臣
雜歌中　古来歌　いしの橋まつのはしらと住そめて老をおくりしやまそゆかしき　權中納言經平卿
御集山家松　ひきうゑしさとはみなせの庭の松ぬしなきいろに春やへぬらん　後鳥羽院御製
正治二年百首山家　入ぬとやみやこの人はなかむらんまとよりにしにめくる月かけ　従二位家隆卿
百首御歌　ゆきてみんむかしなからにさくら花をりにあふみの玄かの山里　慈鎮和尚
洞院摂政百首山家　やまのはへのあらしといへることをよめる　道とほくまた誰かそのにかけつらん松木のふねにうくるやま水　常磐井入道太政大臣
洞院摂政家百首山家　あらしのみたえぬ深山に住民はいくへか玄けるとふのすかこも　俊頼朝臣
同　いしにふれこけにかさなる春のくもなれていくよの枕なるらん　後九條内大臣
同　またれつる花のたよりも過はてゝむくらのやとそいとゝ住うき　従三位範宗卿
　みわたせは杉の葉青きかともなし雪のさかりの三輪のやまさと　従二位頼氏卿

弘長元年百首　きく人も見るひともなきやまそうき風と月とのみちはあれとも　後九條内大臣
御集山家　軒とつるみやまの檜原高けれはほかにいてたるつきをまつかな　同
百首御歌　玉葉雜三　この里は雲の八重たつ峯なれやふもとに玄つむとりのひとこゑ　後京極攝政
家歌合山家夜霜　草結ふ夜半のとさしのかれしよりうちもあらはにおける霜かな　同
南北百首歌合山家　みよしのゝ眞木立やまに宿はあれと花みかてらの音つれもなし　同
山家十五首御歌中　ふもとまておなしさゝ原あともなし深山のいほの露の玄たみち　同
同　玉葉雜三　山かけや軒はのこけに玄たくちてかはらのうへに松そかたふく　同
同　かりそめのうきを出たる草のいほに殘るこゝろはふるさとの夢　同
建長三年十首歌合衆議判　我やとの草のとさしのあとなれはあけぬくれぬとあき風そふく　正二位成實卿
山家秋風　ふしなれぬほとをはゆるせ竹の戸に風も夜さむの時もきぬらん　従二位顯氏卿
同　いたつらにあけぬくれぬと住わひぬ人めかれゆく草の戸さしは　大納言經通卿
洞院摂政百首山家　松風のおとにすみけんやま人のもとのこゝろはなほや玄たはん　前中納言定家卿
同　谷こしの眞柴の軒のゆふけふりよそめはかりはすみうからしや　同
同　山里はあしのまろやの妻こひになくやをしかのこゑそなれぬる　従二位頼氏卿
同家百首郭公　ほとゝきすいほりあまたにまたれつゝひと聲とほき谷の山さと　同
山家　道かへてたか世をわたる宿ならん竹あむかとのまへの玄ははし　光俊朝臣
同　我のみとむすひしいほもかすそひて杉のむら立もとつ葉もなし　家長朝臣

山家歌中

やまさとの雲のとさしのあけかたに月かけうすしにはのはつ霜　大納言敦家卿

久安百首

さら〳〵にいやはねらるゝ山里のあしふく宿に玄くれふる夜は　季通朝臣

山里のかれたる草といふことを

垣こめしすそのゝすゝき霜かれてさひしさまさる玄はの庵かな　四行上人

千五百番歌合

あともなし岩のかけみちたとりきて雪とわけつるにはの玄ら雲　後久我太政大臣

家集山家心を

柴の戸もあけゆく山の峯なれはのきにわかるゝよこくものそら　従二位家隆卿

寛喜元年女御入内屏風歌

暮ぬとて民のかまともいそくめりとしのこえゆくみねの山さと　西園寺入道太政大臣

幕山邊民家

みやこ人とはぬもいかゝうらむへき雲にわけいる宿のかよひち　隆信朝臣

正治二年百首山家

爪木こる山路はかりはふみわけてよもきの門はあとたえにけり　皇太后宮大夫俊成卿

文治六年五社百首

なほ玄はし雲ゐる谷をたちかへりみやこの月にいつるやまみち　前中納言定家卿

洞院摂政家百首山家

山ふかみひとはむかしのやとふりて月よりさきに軒そかたふく　同

建久七年百廿八首山家

としへぬる宿たちいつる椎かもとよりゐし石もこけあをくして　同

同

たちかへりやま路かなしき夕かないまはかきりの宿をもとめて　同

同

文治三年閑居百首歌

瀧のおとみねのあらしもひとつにてうちあらはるゝ柴の垣かな　同

正治二年百首

浪のおとに宇治の里人よるさへやねてもあやうき夢のうきはし　同

建久七年百廿八首

物おもはぬ人のきけかし山里のこほれるいけにひとりなくをし　同

貞應三年則詠百首衝山街峰月出窓中

峯の庵のまとよりいつる月たにも有明のころはなほまたれけり　民部卿爲家

新六二

六帖題山さと

我かゝる山里すみをいかにとも玄るひとあらはたつねきなまし　同

文治四年毎日一首中

なにはめかたく火とみえて山さとのあしのまろやにとふ螢かな　同

建長三年毎日一首

山里のまつの木のまのいけみつにすまぬこゝろそ月におとろく　同

同

小倉山もみちふりしくたにかけのあとなき庭はみるひともなし　同

貞應三年百首山家夕あらし

くれゆけはそのふの山にふく嵐なれすはいかにこゝろうからん　同

文永六年毎日一首中

いくよしもたえてあらしの山里にあはれはけしき風のおとかな　同

同

かけにゐて枝を折にもなりぬへし軒はのやまをたのむつま木は　同

千首歌

われとせぬもとの谷川やりみつにいしたてわたすおく山のいほ　同

家集山家苔

山ふかく年ふるほとそ玄られける玄かも小鳥もひとになれつゝ　同

嘉元元年式部卿親王家續千首山家鶯

たらちねの跡とてみれは小倉山むかしのいほそこけにのこれる　法眼慶融

君臣御歌會

すむ人のやとまとほなる山路とてゆふつけとりも聲そすくなき　參議爲相卿

高野より寂然法師のもとへつかはしける歌中

身はかくて玄はしとおもふ山里にこゝろをかへすみねのまつ風　前中納言爲兼卿

百首歌中

山深みなるゝかせきのけちかさに世を遠さかるほとそ玄らるゝ　四行上人

嘉禎二年山家十首歌合

やま里はそのふの野へのはな盛かきねのうちにたつねをそする　寂蓮法師

同

とはれてもまちかきほとの里そなき山かけふかき庭のあしかき　後鳥羽院少輔

家集

雲かゝるみねの松かきあれにけり世をのかれこし年やへぬらん　法眼法師

のきちかくなこの釣舟くたすなり山たにこそとくちすさひしで　俊頼朝臣

此歌はたなかみにてくれかゝるほどにをとこのこゑして山た

にこそとくちずさみしでうたうたふ聲のしければなにごとぞ
とたづねければつりぶねのくちずさみしてくだるなりといふ
をきゝてよみ侍けると云々
谷かけやこゝろのにほひ袖にみちてたかねの花の色もよしなし　慈鎭和尚
此歌は文集百首に心足ニ卽爲ニ富身閑仍富貴富貴在ニ此中ニ何必
居ニ高位ニ

家集

田家

文治六年五社百首田家　皇太后宮大夫俊成卿
なかをかやおち穂ひろひし山里にむかしをかけてたつらをそ行
弘長元年百首　後九條内大臣
わか門の稲葉の玄たひつたひきてたこの水もるはなのゆふかけ
承久四年百首秋山家　前中納言定家卿
拾遺員外上こりはてぬかり田のおものいなすまし鳴たつくれのうす霧の宿
貞應三年百首　民部卿爲家
かりあくる門田のおもは霜かれてかきほにのこる竹のひとむら
寶治二年(百首イ)田家雨　從二位頼氏卿
新勅賀年いねかての田つらの庭の玄は問よりよるの雨さへもり明しつゝ
貞嘉元年女御入内御屏風田家秋收興　光明峯寺入道攝政
たつらなるわらやの軒のこもすたれこれや縣の玄るしなるらん
弘長元年百首　常磐井入道太政大臣
かりをたに立るそほつはかひもなしいたつらならは門守りせよ
同　信實朝臣

隆綱朝臣家歌合山田　よみ人しらず
百首夏　寂蓮法師
いなしきや山田もるをのかりほにてねぬよの數を幾代へぬらん
嘉元百首田家　參議爲相卿
かはつなく田中のゐとに日はくれておもたかなひく風渡るなり
文應元年七社百首田家　民部卿爲家
山もとのたけよりおくに家居して田のもをかよふ道のひとすち
嘉元四年七月十イ當座百首田家　同
折ふしにこゝろをつくるすまひかな田のものおくの竹の一むら
正治二年百首　爲實朝臣
秋風にとはましひとのおとつれもいくたの里はふゆかれにけり
堀河院御時百首　民部卿範光
すみすてゝ刈田にのこる杉はしら秋の玄るしもみえぬいほかな
田家の心を　顯仲朝臣
山里のわさ穂の庵におのつからともなふものはみなくちまもり
六帖題　中納言國信卿
種つものみそのにまきついさことも外面の小田に慈姑ひろはん
建治三年内大臣百首田家　正三位知家卿
雲葉かこひなき柴のいほりはかりそめのいなはそ秋の爪木なりける
時雨　慈鎭和尚
新六二山かつの外面の小田の片あらし去年のつくりは玄めもおろさす
洞院攝政家百首　從二位家隆卿
をしねかるふしみの小田に初時雨心あるいほのいたひさしかな
あさ霞かひやのけふりたてそめてまた春あさき玄つのをやま田

夫木和歌抄卷第三十終

夫木和歌抄卷第三十一

雜部十三

題　郡　里　村　驛　庭
　　床　樞　市
　　墻　籬　棟　窓　戸　門

郡

かひのくにに　まかり申に、　つるのこほり（都留、甲斐）　新千雜上　忠　翠
六二　君かためいのちかひにそ我は行つるてふこほり千代をうるなり
六二　甲斐の國つるのこほりのいたのなる白玉こすけかさにぬひてん　よみ人しらす
題不知六帖　よろつ代を君に讓らんためにこそつるのこほりの早苗とるらめ　八條院六條
同　うらやみにえちの郡の稻をすへて神ときみとにつくはつ穂かな　よみ人しらす
同龜鋏（愛智郡近江）

六帖日根郡和泉　同
龜鋏（ひかみのこほり）　同
みのゝ國ときのこほりにて　重之
武藏守みつすゑくだりける餞に都筑郡　能宣朝臣
六帖題御歌こほり（鎌倉郡、相模）　中務卿のみこ
同阿武の郡（長門）　光俊朝臣
同さらゝのこほり（河内）　信實朝臣
おくのこほり（陸奥）　民部卿爲家
あきづはのすかたのこほり（陸奥）　前中納言定家卿
六帖題けふのこほり（陸奥）　衣笠内大臣
同やすのこほり（野州又近江）　正三位知家卿
大嘗會歌　左京大夫顯輔卿
正安大嘗會歌　兼仲卿
題不知いなのこほり（伊那、信濃）　よみ人しらす
百首御歌（伊勢）　後京極攝政

六二　いつみなるひねの郡の日ねもすにこひてくらすと人は云らなん（そくらすイ　君かふるらんカ）
萬代のためしにいねをつきしより（ものイ）ひかみのこほり民そさかえん
たひ人のわひしきときはくさまくら雪ふる時のこほりなりけり（そイ）
武藏野のつゝきのこほりつゝきつゝおの〳〵ちよを思ふへら也
東路やあまたこほりのその中にいかてかまくらさかえそめけん
新六二　長門なるあふのこほりの柚いたはもろこし人もすさめさりけり
長門なるあふのこほりの柚いたはもろこし人もすさめさりけり
新六二　さゝわくる音もさらゝのかうち路に駒をはやめてけふも暮しつ（こほりイ）
同　我ことはおくの郡のえひすかけとにもかくにもひきちかへつゝ
新六二　あきつはのすかたの郡うこきなしくにつもろ神まもりをさめて
みちのくにけふの郡におるぬのゝせはきは人のこゝろなりけり
同　人めもる關をはゆるせあふみなるやすのこほりの安くかよはん
人心やすのこほりときくなへにつけとつきせすはこふいねかな
君か代は安のこほりのみつきものゆにはの稻穗つきそはしむる
信濃なるいなのこほりと思ふにはたれかたのめの里といふらん
いく代へぬうらの秋風わたらひのこほりのうちに宮井せしより

里

題不知
寛平御時后宮歌合、山ふたさと　萬七
山もりのさとへにかよふ山路は玄けくなりけるわすれけらしも
新撰萬葉
あらしふく山したさとにふる雪はとくちる梅のはなかとそ見る
昌泰元年亭子院歌合野里　同
後法性寺入道關白家百首、いるまのさと（武藏）　同
文應元年七社百首、いはたのさと（尾張）　皇太后宮大夫俊成卿
建長七年毎日百首中、いとゐのさと（未勘國）　民部卿爲家
隨身聞書に藤衣と云事を　同
長治二年櫃中納言俊忠家歌合、いとかの里（紀伊）　四行上人
法隆寺舍利の御はこの歌をみて、いかるがの里（未勘國）　源仲正
をみなへし立る野さとをうち過てうらみん露にぬれやわたらん
さりともとたのむの雁をたのみきて入間の里にけふそいりぬる
いまよりやいはたのさとのあき風も夜さむにふけは衣うつらん
いもかくるいとゐの里の手卷山より〳〵こゝにやとりぬるかな　同
さよ衣いるのゝさとにうつならしとほくきこゆるつちの音かな　四行上人
五月雨はいとかの里のひきまゆもたえぬにすれや曝す日もなき　源仲正
六帖題（今里、山城）　殿宮門院大輔
御集　正三位知家卿
正治二年百首、いなしきのさと（未勘國）　入道二品みこ覺性
名所歌中いはでのさと（陸奥）　喜多院入道二品親王
初秋歌、いまれのさと（河内、未勘國）　隆信朝臣
題不知懷中、いつしのさと（但馬）　嗣恒
同いそきのさと　よみ人しらず
かきりありし鶴の林のかたみをはとゝめおきつるいかるかの里　同
新六二
雨ふれはかたそはつくるいまさとのふる道とめておつる山みつ
萬代
日くるれはをちのいま里かひたてゝとはたの面にけふりたな引
明玉
わひつゝもかくて幾代を過ぬらんかりねならはぬいなしきの里
六一
山ふきはいはてのさとの春よりやくちなしいろの花にさくらん
あつまちのいまねの里は初あきのなかき世ひとりあかす我しも
但馬
但馬なるいつしの里のいつしかもこひしき人をみてなくさまん
懷中
いつしかと我をまちつゝこし人のいかていそきの里をきかはや　同

家集いふきのさと（伊勢、近江、又上野加賀）　清少納言
同いなばのさと（河内）　光俊朝臣
永久三年十二月大神宮禰宜歌合祝いはゐの里（未勘國）
おもふたにかへらぬ山のさくら花誰かいふきのさとをつけしそ　草
たちわかれいなはの里になかゐしてさやは契りし待そわひぬる　はは上枝葉
題不知、いつみのさと（山城八雲和泉云々）　よみ人しらず
もろ人はいはひの里にまとひしてともに千年をふへきなりけり
野徑月（いゝの野の里、丹後）　石河廣成
萬四
いへ人に戀すきめやもかはつなくいつみのさとに年の經行けは
正治二年百首　俊頼朝臣
おほつかな心は月にあくかれていかていくのゝさとをすくらん
堀河院御時百首　小侍從
駒なへていくのゝおくの人里にみゆるけふりや玄るへなるらん
正安大井會いけだのさと（池田、遠江）　顯仲朝臣
卯花のさけるかきねはぬのさらすいくのゝ里のこゝちこそすれ
海道宿次百首いけた　兼仲卿
いつくさのあひ亂れたるたなつものいけたの里に雲をなしつゝ
一條前太政大臣家歌合山家夕霞、は山の里（落隆）　參議爲相卿
そのかみの里は河瀨となりにけりこゝも池田のおなし名なれと
つくは山葉やまのさとにたつけふりかすみも玄けし春のゆふ暮　從二位家隆卿
つくは山葉やまの月のふかきよをさとには玄けき烏のこゑかな　後九條内大臣
まつ月ははつかの里のよひのまをたれあらましにころも擣らん　同
太宰帥にて下けるときはやみの里とこふ所にて（筑前）　太宰大貳高遠卿
なにことのゆかしけれはか道とほみはやみの里に急き來つらん
三河國名所歌合花ぞの、　爲忠朝臣
あさみとりかすめる雲のたえまよりこすゑそ玄るき花そのゝ里
さと

永仁大菅會はなかさのさと（近江）　藤原道經
はきはらのさと（常陸）　盛忠
寛治五年八月定通卿歌合にまのさと（二萬、備中）　前中納言俊光卿
千五百番歌合　光俊朝臣
正安大菅會
家集とこなつのさと（近江、常陸）
同
同ともゆひのさと（山城）
正安大菅會とよ岡のさと（豊岡、備中）
家集
家集歌中
物語
諒德公集

よそなからにほふこすゑも見るはかり霞なこめそ花そのゝさと
春かすみたちかくせともうくひすのなくねに去るき花そのゝ里（しイ）
若樹古賀
去ろたへのゆふとり去てゝかみまつるうつきに匂ふ花かさの里
秋ならは花にこゝろやとゝめまし霜にかれたるはきはらのさと

此歌は康元二年鹿島の社に詣で侍けるに近所に萩はらの里と
いふ所をよめると云々

ぬのさらすにまの里ともみゆるかなうの花さけるかきね〳〵に　藤原季綱
君か代はにまのさと人つくる田のいねのほすゑの數にまかせん　隆信朝臣
すゑとほき春のむかへのみつきものかす〳〵はこふにまの里人　大藏卿隆教
春ことにうゑける花のかひありてさきみたれたるとこなつの里　左京大夫顯輔卿
常夏のさとゝはなとかいはさらんからなてしこの咲るころにて　祭主輔親卿
ふなちにてともゆひの里に宿とれはとけてねられぬ浪の音かな　安法法師
時にあふ民のこゝろもやすらけき御代のはしめのとよ岡のさと　大藏卿隆教
わするなよときはの里の槇はしらつれなき中に立てしちかひを　後九條内大臣
ほとゝきすときはの里にすむ人はいつとわきてかはつね待らん　民部卿爲家
六五　拾雜賀
いつしかと行てかたらん大和なるとほちの里のすみうかりしを　よみ人しらず
あふことのとほちの里にほとへしは君はよしのと思ふなりけん　同

家集總
千五百番歌合
堀河院百首
最勝四天王院名所障子
太宰帥にて下けるの時とほるのさと（未勘國）
天仁大菅會ちくらのさと（千磯、近江）
御集ィ宇治より京へわたらせ給とて
秋の比法輪寺にて
承安二年閏十二月東山歌合
寶治二年百首寄玉總（なことのさと備中或近江）

此歌は大和よりかへらせ給て侍りける女のもとよりと云々

あふことのとほちの里はやまと河おもはぬ中にありとこそ聞け　清輔朝臣
みよし野のきさ山きはにまつ月はとほちの里のかけよりそみる　野宮左大臣
雲かゝるとほちの里のかやり火はけふり立つとも見えぬ也けり　權中納言師時卿
雲ゐとふかりの羽かせに月さえてとはたの里にころもうつなり　後鳥羽院御製
行みちをとほるの里にみそきしていまも島根をいてはなれぬる　太宰大貳高遠卿
見渡せはちくらの里にあまるまて數も知られすとるさなへかな　左京大夫顯輔卿
はるなれは花のみやこにかへるまにをくらのさとの霞ぬるかな　宇治入道關白
わかものと秋のこすゑをみつるかなをくらの里に家居せしより　四行上人
えそ行かぬをはたゝの里のいもかりは板田の橋の桁もとたえて　道因法師
いまはまたかよふためしもよそにきく玉のをことのさとの松風　從三位賴氏卿
白浪のかゝるみきはとみえつるはをかはの里にさけるうのはな　後德大寺左大臣
小山田の里の早苗のさなほりにをかはにすくるこの去たにして　よみ人しらず
紅葉せしをやまの里の戀しさに去くれてのみもあけくらすかな　後賴朝臣
おほはらやをしほの里の朝かすみゆきゝになれし春そわすれぬ　後久我太政大臣
わか國のかすのこほりのうちにしもをたきのさとのおほみや所　權僧正公朝

海道宿次百首（なかへの里駿河）六帖題イ
おとなしの里（紀伊）　　参議爲相卿

夕日さすけしきもさひし松たてるをかへのさとは山かけにして
新六二
うきことの去はし聞えぬ時やあるといさ音なしの里をたつねん

家集　　民部卿爲家

こほり皆みつといふ水はとちつれは冬はいつくも音なしのさと

同なの丶さと（山城）　　和泉式部

山去ろのをの丶山邊の里とはみかりのやとりとりとりそかねぬる

此歌は屏風にをのといふ山里に人の家のもみぢおもしろきに
女ともいでゐ侍りかりする人たかすゑてきたる所をよめると
云々

　　能宣朝臣

五十首歌寄樹花題不知かすかのさと（大和）　　後鳥羽院御製

さくらさく野への春かせふかぬまにいさみにゆかんをの丶里人
萬三
春かすみ春日の里にうへもなき苗なりといひしえはさしにけん
萬八
かすみたつ春日の里の梅の花はなにとはんとわかおもはなくに

同　　驗河丸

萬八
かすみたつ春日の里のさくらはな山おろす風にちりや去ぬらん

越後國（懷中）　　よみ人しらず

去ろたへの浪も去つけきいろ見えてかはへの里にさけるうの花

正安大昔會かたなかのさと（片岡、近江）　　兼仲卿

現存六
むかしにも立こそまされ民の戸のけふりにきほふかまくらの里

川邊里（備中）　　大藏卿隆教

十年あまり五とせまてに住なれてなほわすられぬかまくらの里

かまくらさと（相模）　　藤原基政

御集イ　　中務卿みこ

康平四年三月祐子内親王家歌合霞里、（かすみのさと武藏）　　式部

春きては花のみやこをみてもなほかすみの里にこ丶ろをそやる

御集秋御歌中、かみなひのさと（大和）　　後九條内大臣

かさ丶きのあけてとわたる山もとにかはきりのこる神なひの里

永久四年九月雲居寺後歌合霧（かどの丶里、未勘國）　　仲實朝臣

旅人もゆき丶も見えすなりにけりかとの丶さとの今朝の朝きり

海道宿次百首かけがはの里（駿河、遠江）　　參議爲相卿

これもこのところならひと門毎にほすてふぬのをかけかはの里

建忽百首、かつまたのさと（勝磨田、遠江又は大和或美濃）　　同

いとふなよきくかは渡る道をよきてとはんと思ふかつまたの里

長久二年五月廣申夜祐子親王家名所歌合勝田のさとのさなへ（かつまたの里勝磨田、大和又美濃）

苗代のみつくみにこしけふよりはさなへとるらんかつまたの里

永久四年歌合扶桑女郎花（かほよのさと未勘國）　　よみ人しらず

さき匂ふかほよの里のをみなへし誰かは見にとたつね來さらん

永久四年百首かいつのさと（摂津、近江）　　藤原忠隆

あらち山雪けのそらになりぬれはかいつの里にみそれふりつ丶

建保三年名所百首かたのさと（河内）　　仲實朝臣

道わかぬ夕日のかけもみねさえてかたの丶里はかたゝくれつ丶

龜山殿百首歌河邊詩衣明玉　　前大納言忠定卿

あまの河や丶夜さむなる風の音にかたの丶里もころもうつなり

貞應二年名所百首、かつらのさと（桂、山城）　　土御門内大臣

てる月のかつらの里のほと丶きすあかてあけゆく雲になくなり

家集　　民部卿爲家

月のわのかけをは今宵見つれともことのかつらはいかて忘れん

家集よしみの里（大和）　　能宣朝臣

月をたによしみの里のあきのくれまつかせならてとふ人もなし

吉水經慈紀方御屏風イ　　後成卿女

いくちよの秋かすむへき菊の花にほひをうつすよしみつのさと

皇太后宮大夫後成卿

よし田のさと（近江）
冷泉院御時大嘗會歌、よし田のさと
永久四年百首風（よさむのさと未勘國）
同四年九月雲居寺後番歌合
弘安三年百首
百首の（御ノ）歌、たつたの里（大和）
正治二年百首
百首歌、たかやすのさと（河内）
家集
建長八年百首歌合、たかせのさと（河内又未勘國）
御集、たまの井のさと（山城）
永久四年百首避暑
題不知懐中、たびゐのさと（未勘國）
寶治二年百首たのむの里（武蔵）
家集たまわけのさと（未勘國）
長治元年五月源宗光家歌合旅宿時鳥
大嘗會御屏風高宮郷、（たかみやのさと高宮、近江）

せく水もよし田の里にうゝる田はかねて年得んかけそみえける
名にたてる吉田の里のいねなれはつくともつきしちよの秋まて
袖かはす人もなき身をいかゝせんよさむの里にあらしふくなり
もろともになきあかしたるきり〳〵すよさむの里のくさの枕に
きくまゝにあらし吹そふ秋とてや夜さむの里のころもうつらん
なかめわひぬたつたの里の神無月木の葉ふみわけとふ人もなし
霧ふかきたつたの里の夕まくれこすゑをわけてかりそなくなる
雲はれぬいこまの山のいかならんふもともゆきはたかやすの里
あけぬとてひとりたつたの山のはにあり明の月はたかやすの里
さしのほるたかせの里のいたつらにかよふ人なき五月雨のころ
夕たちのひとむらすくる草の葉におくしら露のたまの井のさと
みつはよしあたりも去みよ吹すくる風さへさゆるたまの井の里
都いてゝたひゐの里をなかむれは月はかりこそかはらさりけれ
いまこんと秋をたのむの里人もまつかひあれやはつかりのこゑ
家の井の玉分さとにいもをおきてこひやわたらんなかき春日を
いそけともたかまの里に旅寐して山ほとゝきすはるかにそきく

皇太后宮大夫俊成卿
能宣朝臣
神祇伯顕仲卿
仲實朝臣
式乾門院御（ノ）連
慈鎮和尚
前大納言忠良卿
家長朝臣
鴨長明
衣笠内大臣
中務卿のみこ鎌倉
俊頼朝臣
よみ人しらず
源俊平朝臣
大江丸
藤原能行

家集
故郷、たかまどの里（大和）
光臨院入道二品親王家五十首里時鳥（たかまどの里）
前大納言忠良卿家會寄歌
永久四年百首水鶏、（たけだの里竹田、山城）
三河國名所歌合竹屋の里、たけのやのさと（三河）
同
たのめの里（信濃）
正治二年百首、たま川の里（玉河、山城或陸奥）
建保三年名所百首
同
同
題不ノ知
家集冬歌、そともの里（未勘國）
つるの里松ばら（未勘國）

織女に今朝ひくいともなかゝれと君にそいのるたかみやのさと
あさまたきふりさけみれは白たへの雪つもれるやたかみやの里
雲葉
たかまとのふるさと人はいつまてかのこりて萩のかさし折けむ
たかまとのあれたる里のほとゝきすなく夕くれを誰か去のはん
たかまとのをのへの里に雪ふかし猶ふりゆかんあとをこそ思へ
心からたけたの里にふしなれていくよくひなにはかられぬらん
みとりなる色もかはらて世の常にいくよかへぬるたけのやの里
すみよしの松のたくひとおもはゝやそまにもよせぬ竹のやの里
明玉
玉のをのおもひ絶てもあるへきにたのめの里にとしをふるかな
五月雨はうの花さかぬかきねにも浪こそかくれたまかはのさと
てつくりやさらすかきねの朝露をつらぬきとむるたまかはの里
日にみかき風にみかけるひかりかなのとかにすめる玉川のさと
萬十四
玉川にさらすてつくりさらに世にたのむ日かけのあはれすき行
玉河にさらすてつくりさら〳〵になにそこのころこゝら悲しき
神無月雲間のやまにくもかゝるそともものさとやしくれふるらん
君か代はつるのさとなる松原のはまのまさこもかす去らぬかな

皇太后宮大夫俊成卿
左京大夫顕輔卿
前中納言資實卿
従三位行家卿
寂蓮法師
俊頼朝臣
藤原道經
琳賢法師
二條大皇太后宮肥後
前大納言忠良卿
前中納言定家卿
順德院御製
従二位家隆卿
よみ人しらず
顕仲朝臣
祐擧

主基方御屏風丹波國イ月よみのさと（又イ近江）

みの丶國月よしの里

脚不レ知（つの丶里、石見）

同ならのさと（奈良、大和）

家集

正安大嘗會、なかたのさと（近江又出雲）

家集里の秋と云事な

光榮院入道二親王家五十七首里時鳥、長居里（未勘國）

嶋奥）里戀、なとりの里（陸卅六人歌合、なるみの里、尾張）

丹波村雲の里（國中）

長治元年五月源廣綱朝臣家歌合霞隔二山家一

むかふの里（無河有、未勘國）

脚不知、（うちはの里打廻、大和）

弘長元年百首夏月

くもりなきとよのあかりに空はれてひかりをそふる月よみの里

やみならはねぬへきものをたのめぬも人にまたるゝ月よしの里

萬一夏草のおもひしなへてなけくらんつのゝさとみんなひけこの山

萬十わかやとの萩さきにけり散らぬまにはやきてみませならの里人

いとけなきわか子をならの里におきてこよひの月に面影にたつ

雨露もめくみあまねき時にあひてなかたの里にさなへとるなり

やゝさむくなるをの里の秋風になみかけころもうたぬ日はなし

鳴すてゝ急きなすきそほとゝきすなか非の里の名をそたのまん

明玉去ひてとふ人はありとも戀すてふなとりの里をそこと去らすな

むかしにもあらすなるみの里にきてみやこ戀しき旅ねをそする

神無月やまのけしきはつれなくて去くれふりくるむらくもの里

おほつかなとなりもみえすなりにけりかすみへたつる村雲の里

現存六七そちにむかふの里のふるよもきうたゝ朽ねとなれるさまかな

萬四ころもてをうちはの里にある我を去らすて人はまてとこすけり

手にならすおなしうちはの里人はなつのなかはの月やみるらん

藤原茂明朝臣　元輔

よみ人しらす

同

基俊

家仲卿

民部卿爲家

法印覺寛

前大僧正澄覺

法印靜賢

祐攀

よみ人しらす

信實朝臣

笠女郎

後九條内大臣

脚不知、（うりふの里若狭又山城）

正治元年百首山家

家集、のかみのさと（奥濃）

同一字抄

正安大嘗會國々名所歌、（の山のさと野山、備中）

御イ

三百首歌、のさかのさと（肥後）

正治二年百首、おぼろの里（山城）

家集、をき原の里（三河）

百首歌、おくの里（みよしの、大和）

正治二年百首、おほはらのさと（大原、山城）

同

同

家集寂然法師すみたる大原へ遣ける

九月十三夜十首歌里月、（おさゐの里陸奥）

光榮院入道二品親王家五十首擣衣鴨イ

祝歌中納鏡、（おほいそのさと未勘國）

家集おほくらのさと（近江）

小大君集

雲のたつうりふの里のをみなへしくちなし色にいひそわつらふ

浪のおとに宇治のさと人よるさへやねてもあやうき夢のうき橋

なつなかと霞のひまに見えつるはのかみの里のはるのこすゑか

いかにしてのかみの里を過ゆかん夜ふかくせきに雪ふりにけり

あかすこそ秋の野やまの里人はくもりなきよのつきをみるらめ

夜半にふく河風さむみあしきたの野さかの里はころもうつなり

まれにこしおほろの里に住馴ておいはしみつの去るしなりけり

風ふかぬうらみやすらんうしろめたのとかにおもへ荻原のさと

みよしの丶おくの里人いか丶するみやこもふかき雪のあしたに

見わたせは軒の去のふにたるひしてふ丶きにこもる大原のさと

あさゆふのけふりは庭をあるしにてひとはおとせぬ大原のさと

あきの日にみやこをいそく去つのめか歸るほとなき大原のさと

水のおとはまくらにおつる心ちしてねさめかちなる大原のさと

明玉よもすからたもとにはらふ白露のおきゐの里につきをみるかな

賤の女か月におきゐの里とほみおひかせ去るくころもうつなり

はこへともつきせさりけり貢物おほいその里のみちのまもなく

君か代をまちしも去るくおほくらの里のなかちを見るか樂しさ

前中納言定家卿

刑部卿範兼卿

權僧正永緣

大藏卿隆教

中務卿みこ鎌倉宮秋門院丹後

實方朝臣

殿富門院大輔

源師光

小侍從

前中納言定家卿

四行上人

第三のみこ

藤原孝經

維衡卿

兼盛

名所歌　鶯鏡、（くらぶのさと近江）
家集　くろつのさと（黒津、近江）
題不レ知　懐中（くるまの里上野）
長治元年五月源朝綱朝臣家歌合　主基方御屏風、くらかきの里（未勘國）
保延元年八月宗成卿家歌合、くさのさと（未勘國）
水郷冬望、（くさかりの里河内）
源道宿次百首　くろた、くろたのさと（尾張）
文應七年毎日一首中、やの〻里（未勘國）
六帖題、やはきの里（三河）
保安二年内大臣家歌合、山なしの里（下總）
山なしの里を
冬歌中人家、山しなの里（山科、山階、山城）
御集夏歌、山たのさと（山城）
家集名所歌　よみけるの中
鹿歌中歌林、やせの里（山城）
天仁大嘗會、やすらのさと（安良、近江）

何事もならひなくのみみゆるかなくらふの里にいかゝいふへき
つかなみの上によるゝたひねして黒津の里になれにけるかな　源俊重
みやこよりかへりくるまの里人はひとねかはをは渡らさらなん　よみ人しらず
春かすみ八重たちぬれはたつねゆく道もわかれすくらはしの里　同
くらかきの里に波よる秋の田はとしなかひこの稻にそありける　前中納言匡房卿
月かけをあなしのなみに夢さめてあけぬとや思ふくきのさと人　藤原忠兼
ふる河の入江のあしは霜かれてさひしくなりぬくさかりのさと　仲原師光朝臣
をちこちも今はたみえすうはたまのくろたの里のゆふやみの空　參議爲相卿
あつさ弓はるといふよりひきかへてはやくそいはふやの丶里人　民部卿爲家
あつさ弓やはきの里のかはさくら花にのみいるわかこゝろかな　同
月かけをまつもをしむもくるしきにいつくなるらん山なしの里　源雅光
外よりもひかりひさしくさやけきは月のかくる丶山なしのさと　津守國基
冬のくるいはたの里のこからしにはゝそ志くる丶山しなのさと　惟宗行政
ほとゝきす志のはぬ聲をきくよかや山田の里にさなへとるらん　堀河右大臣
なはしろのみつを心にまかすれは山田のさとはたねまきにけり　六條院宣旨
日にそへてすかたそ影になりにけりやせの里なる妹をこふとて　印譚法師
やすみしるわか大君の御代にこそいとゝやすらの里もとみけれ　左京大夫顯輔卿

家集
やすらての里（伊勢）

題不レ知　懐中、（ますたの里近江）
ますたの里（山城）
題不レ知　懐中、まつかぜのさと（尾張）
同けぶりの里（丹波）
同ますたの里（山城）
まつむらのさと（未勘國）
祝歌中、まつはらの里（遠久五年左大將家歌合、深草の里）
寶治二年百首里竹、（ふしみの里）
最勝四天王院名所御障子
同

榮花　からひとのねかふ心にあふみなるやすらの里のやすらけきかな　祭主輔親卿
うちすくる人もけふりになれよとやもしほやきてのさとの松風　證心法師
此歌鴨長明が伊勢記云伊勢へ下けるにやきてのさとくもつの濱などすぐるほどにやゝきりはれゆき伊勢の海のおきの志らす濱の松原ほの〻あらはれわたるをみれば志ほかまかすも志らず打ちりて繪にかけるごとくなるをよめると云々
年ことにますたの里のいねなれはつくともつきしちよの秋まで　よみ人しらず
名にしおはゝいさやねとめんまさの里戀來る人もありと云なり　爲經朝臣
松風の里にむれゐるまなつるはちとせかさぬるこゝちこそすれ　懐中　よみ人しらず
戀しきをおもひのかるとせしかともいとゝ煙のさとにこそふれ　扶染　同
布さらすまきのさとゝもみゆる哉卯のはなさけるかきね〳〵は　同
春秋はおほくつもれと年をへてときはにみゆるまつはらのさと　同
君かためひときにちよをちきりつゝゆくすゑとほき松原のさと　二條太皇大宮肥後
雪をれの竹のした道あともなしあれにしのちのふかくさのさと　前中納言定家卿
あれまくに誰ほりうゑてくれ竹のふしみの里はよにふりにけん　民部卿爲家
一夜ふすふしみの里の岡邊なるわさ田もかりに志かそなくなる　後久我太政大臣
鹿のねにねさめの秋とまつの風ふしみのさとにつきやちきりし　後成卿女

同　　大蔵卿有家

かとたふく野風をさむみかりにきてふしみの里のいねかての露

家集　　相模

野邊ことに折こそ盡せをみなへしふしみの里はむくらはふまて

秋歌中　　智經法師

夏林あしかきにはつれて見えし妹ゆゑにいとゝふしみの里そ戀しき

家集　　四行上人

ふしみすき岡の屋になほとゝまらし日野までゆきてこま心みん

同ふたみの里（播磨又伊勢）　　成秀法師

桑門玉くしけふたみの里のうの花をありあけのつきとおもひける哉

時ならてまたもさくらの花さかり春をふたみといふへかりけり　　鴨長明

櫻河院御時百首、ふもとのさと（あらしやま）

永承四年十一月内裏歌合

紅葉

弘長四年毎日百首中

心せんひとつみのりのすゑまてもふたみの里はひとへたてけり　　同

此歌同記云二見に侍けるにちかきあたりに如法經の十種供養とて人々あつまるとき丶て折しもさるべきにこそと思て聽聞すべきよしいへどかの願主に侍にやあらんあるべきことにもあらずともてはなる丶よしをきゝてよめると云々

峯たかきあらしの山のもみちは丶ふもとの里のにしきとそみる　　前中納言師時卿

ちりまかふあらしの山の紅葉は丶ふもとの里の秋にそありける　　藤原祐家卿

むら雲のさえゆくまゝにあらしやまふもとのさとは霰ふるなり　　民部卿爲家

さの丶中道（ふなばしの里武蔵、上野）

題不知（藤原の里大和）

仁安三年奈良歌合鹿

百首歌忍淳絲戀、（ふせやの里信濃）

正治二年百首御歌、ふる野の里（大和）

千五百番歌合

寛和二年殿上歌合にふるの丶山里（大和）

寶治二年百首里竹、（ふたむらのさと尾張）

正安大井會、ふるいちの里（近江）

家集字治にてよめるゝ、（ふけのさと山城）

千五百番歌合、こほたのさと（山城）

弘長百首紅葉、（このはの里越中）

天喜元年八月頼家朝臣家越中國名所歌合、木葉里

吹き來なる風の音こそさひしけれ木の葉の里のあきのゆふくれ　　祐盛

秋ふかみ嵐にそひて去くるれは木のはのさとそさひしかりける　　よみ人しらず

ふた千代をかさねてゆつれ君をいのる小松の里の鶴の毛ころも　　同

山ちかみあさたつ雲と見えつるはこまの丶里のけふりなりけり　　喜多院入道二品のみこ

いとひするさの丶中道くさ葉よりわれこひわたるふなはしの里　　前大納言公任卿

萬十ふち原のふりにしさとの秋はきはさきてちりにき君にちかひて　　同

みかさ山かみのちかひにたつしかのこゑかすかなる藤原のさと　　寂蓮法師

ちらすなよそのはらからを尋てもふせやといはん里の去るへを

さてもなほいつかはるへき日かすのみふるの丶里の五月雨の空　　喜多院入道二品のみこ

とはさらん人もうらみしあとたえてふるの丶里の雪のふかさに　　後成卿女

新千冬はつ去くれふるの山さといかならんすむ人さへや袖のひつらん　　好忠

たか代よりうゑて此名をとゝめけんそのふの竹のふたむらの里　　冷泉太政大臣

ふるいちの名にあらはる丶里なれはひさしくか丶るいけの藤浪　　兼仲卿

秋かせのふけのさと人おとすやと我もこ丶ろにか丶るかはなみ　　祐子内親王家紀伊

新續古秋下かち人のみちをそおもふやま去なのこはたの里のあきの夕きり　　後京極攝政

色そむる木の葉の里のからにしきあらくなたちそすかの山かせ　　九條内大臣

吹き來なる風の音こそさひしけれ木の葉の里のあきのゆふくれ　　よみ人しらず

秋ふかみ嵐にそひて去くるれは木のはのさとそさひしかりける　　同

ふた千代をかさねてゆつれ君をいのる小松の里の鶴の毛ころも　　喜多院入道二品のみこ

山ちかみあさたつ雲と見えつるはこまの丶里のけふりなりけり　　前大納言公任卿

此歌春日よりかへり侍けるに山つらにけぶりの立けるをとへ

ばこまの丶里といひければよめると云々

夕されはみねの松風おとつれてもみち散り玄くころもてのさと

かたしきのとこのはつ霜色にいて丶よな〳〵さゆる衣手のさと

いまも又なみたやさそふほと丶きすわかころも手の里に鳴なり

わきもこかころもの里の梅の花さそくれなゐのいろにさくらん

夜をかさねみやま立出てほと丶きす衣のさとにきつ丶なくなり

春すきて夏のひとへになりなからころもの里は名こそかはらね

月かけにうつもれぬとや思ふらん雪にならへるこしのさとひと

わか思ふ人たにすまはみちの野のえひすの里のうときものかは

飛鳥のあすかの里をおきていなは君かあたりはみえすかも有ん

とふ鳥のゆくすゑみえぬあすか丶はさとの名こめてたつ霞かな

飛鳥のあすかのさとのさくら花そらにそあそふかせにみたれて

浦人のおのかものとやなかむらんあかしのさとのよはの月かけ

あかしかたいさをちこちも玄ら露のをかへの里のなみの月かけ

浦ちかきあしやの里に日はくれて浪路のきりにあまのいさり火

延久歌合、衣ての里（山城）

家集

光寛院入道二品親王家五十首里時鳥

家集ころもの里（陸奥）

爲忠朝臣家三河國名所歌合、衣里

同

重家卿五首歌合月、こしのさと十題百首御歌、ゑびすの題不レ知、あすかのさと（大和）

建長七年顯朝卿の家の千首故郷花

久安五年七月山路歌合花

文永二年（七月イ）白河殿百首、あかしのさと（播磨）

最勝四天王院名所御障子イ千五百番歌合、あしやのさと（攝津）

よみ人しらず

正三位知家卿

西園寺入道太政大臣

中納言定家

靈司院按察

平維盛

意尊法師

從三位頼政卿

後京極攝政

元明天皇御製

從二位行家卿

隆緣法師

從一位良教卿

前中納言定家卿

前大納言忠良卿

真應三年百首

最勝四天王院名所御障子イ

同

同

みるめ

三河國名所歌合（あしやの里）

同

建長六年（毎日イ）一首中題不レ知恋中、（あはでのさと尾張）

家集（あとむらの里）

雜歌中、あさくらの里（但馬）

家集大菅會歌合、あさ日のさと（朝日、山城）

あをやきのさと（未勘國）

永仁大菅會、あさはらの里

家集秋風、（あきつの里大和或紀伊）

元永二年十月内大臣家あひつの里（陸奥）

民部卿爲家

大藏卿有家

參議雅經卿

後成卿女

後九條内大臣

爲忠朝臣

琳賢法師

民部卿爲家

よみ人しらず

相模

顯綱朝臣

左京大夫顯輔卿

よみ人しらず

前中納言俊光卿

法印定圓

よみ人しらず

藤原定國

山とほきゆふつけ鳥もあけぬとてあしやの里にふねいそくなり

くれぬとはつけの小櫛をさ丶すとも蘆屋の里にほたるとふなり

ゆふされは秋やはまつをふく風に軒うちそよくあしのやのさと

あしの葉の霜かれはてし里の名をかすみにこむる空のあけほの

あしのやの里のいりえによる草のみるめにうきて行ほたるかな

玄ものつるおきゐてすたく聲すなりさえ行よはのあしのやの里

むれたけるかきねの木葉霜かれてかくれかもなしあしの屋の里

夜の内のゆふつけ鳥も關こえてあけてあはつのさとにきにけり

日くるれはあはての里のわらはへのゆふと丶ろきか物も聞えす

鹿のねに草のいほりも露けくてなみたなかる丶あとむらのさと

扶桑

としつみて蜑のすむらんあさくらの里の若めもいかてわれみん

いつしかとあさ日に里を立出ていそきもはらふみつきものかな

木からしの風はふけとも散らすしてあをやきの里常磐なるらん

早苗とるたこのひまなみ五月雨のふるも時玄るあさはらのさと

みな月のころとも見えぬ草葉かなあきつの里のみちのつゆけさ

續詞花速歌

見わたせはきりへの山もかすみつ丶秋つのさとは春めきにけり

かひなしや尋ね來たれとみちの野の會津の里も名のみなりけり

あくた火の里（香イ）

しもえによそのみつくす人ならて誰かふすふるあくた火の里　祐擧

南北百首歌合、　あをはかの里

一夜みし人のなさけは立かへりこゝろにやとるあをはかのさと　慈鎮和尚

家集さくら井の里（櫻井、山城或攝津）

こせりつむさはのこほりのひまたえてはるめきそむる櫻井の里　西行上人

同

秋風のふくにちりかふもみちはを花とはおもふさくら井のさと　資方朝臣

家集名所歌

さくら井の里にて春のはなをみて秋はかつらのつきをなかめん　權中納言長方

弘長四年（毎日イ）一首中

花をみし春のにしきのなこりとて木葉いろつくさくら井のさと　民部卿爲家

建保三年名所百首（更科の里、信濃）

はるかなる月のみやこに契ありてあきのよあかすさらしなの里　前中納言定家卿

雲やなきをはすて山のあきのそら月そすみけるさらしなのさと　正二位家衡卿

時鳥歌中、（きなはの里　獺、大和）

なきおくれうちこせ山のほとゝきすきなはの里の松のたえまに　俊頼朝臣

七百首歌、　きなれのさと（大和）

萬代　からころもきなれの里にうちそめぬしま松風や夜さむなるらん　權僧正公朝

御集

から衣きなれのさとに君をおきてしま松のきのまてはくるしも　鎌倉右大臣

建長五年毎日一首中イ、（さくかはの里近江）

神無月またうつろはぬきくかはにさとをはかれす秋そのこれる（くィ）　民部卿爲家

題不知、（ゆき（くイ）見の里山城、未勘國）

萬十一　立わかれゆきみの里にいもを置てこゝろ空なりつちはふめとも　よみ人しらず

さと

現存六　なきすてゝゆくみのさとの郭公こゝろそらなりあかぬ名こりに　從二位行家卿

百首戀歌

妹かいへにゆくみの里の道遠みいそきなからもゆかぬよそなき　正三位知家卿

永久四年百首春日宗、みかさのさと

こまなへてみかさの里へ行人はあめの下いのるつかひなりけり　源兼昌

あつまへ下りけるに（みつけの里）

誰か來てみつけの里と聞からにいとゝたひねのそらおそろしき　安嘉門院四條

此歌は路次記云こよひとほつあふみ見つけのごうといふ所に
とゞまりてさとあれて物おそろし水の江ありと云々

家集、みのふのさと（甲斐）

雨すくるみのふの里のかき柴にすたちはしむるうくひすのこゑ（しのくィ・てィ）　西行上人

みうらの里（相模）

萬代　我こゝろとほつあふみの濱名よりみうらの里のいもかりそゆく　源仲正

みねのゝ里

萬代　たれかいまおもひおこさんあつまちやみねのゝ里の夕暮のそら　祝部成茂

建保四年内裏十首歌合みよしのゝ里（大和又武藏）

すみなるゝときは夏みのかはよとに山かけすゝしみよしのゝ里　西園寺入道太政大臣

家集

行すゑはたのむのかりの玉つさをわすれかたみにみよしのゝ里　正三位知家卿

遠所十首歌合山家（みなせの里山城或は攝津）

古來歌　ひきうゑしさとはみなせの庭の松ぬしなきいほに春やねぬらん（へィ）　後鳥羽院御製

題不知（みつのさと三豆御津、山城又近江）

さゝなみや志賀の浦かせふきこしてよさむなるらしみつの里人　右兵衛督惟方

建仁二年五十首三わの里（三輪、大和又丹波）

みわのさとの花のさかりはいそのかみふるの丶末にかゝる白雲　慈鎮和尚

後九條内大臣家會秋曉里（しのぶの里陸奥）

萬代　ありあけの月のひかりも鳥のねもえやはしのふのさとの秋かせ　從三位家隆卿

續後拾戀一　いはぬまは人こそしらねみちのくの忍ふの里にしめはゆひてき　八條院高倉

いたつらに露やおくらん人しれす忍ふのさとのおくのさゝはら　兵部卿隆親

寶治二年百首

安井、しかまの里（飾磨、播磨）

現存六　はりまなるしかまの里にほすあゐのいつかおもひの色に出へき　衣笠内大臣

はつ時雨しかまの里のうす紅葉なとあなかちにわきてそむらん　家長朝臣

家集、しつはらの里（山城）

山かつのすみぬとみゆるわたりかな冬にあせゆくしつはらの里　西行上人

同志ほのやの里
題不レ知、（志のだの里和泉）

明玉霞さへたえぬけふりにたちそひてはれまもみえぬ志ほのやの里　二條太皇大后宮肥後

志ほやのさと（下野）

いつみなる高師の濱の浪しあれは志のたの里もあらはれにけり　よみ人志らず

志みつの里（播磨又信濃）

こと丶はん志ほやの里にすむ蜑もわかこと（思ふやと）からきものや思ふと　中務卿親王

正治二年百首志がらきのさと

おりたちて志みつの里にすみぬれは夏をはほかにき丶渡るかな　二條太皇大后宮肥後

家集

夏來れはふせやか下にやすらひて志みつの里にすみつきぬへし　二條院大進

南北百首歌合、志らかはのさと（山城又陸奥）

志た柴のかれ行ほとにふりぬれはつまきこりつむ志からきの里　正三位經家卿

六百番歌合怨戀、（志賀の里志賀）

春あさみすまのまかきに風さえてまた雪きえぬ志からきのさと　四行上人

家集百首ゑじまの里

花はまたしこ丶ろはそらにあさみとりはるめくころの白川の里　慈鎮和尚

永保元年大嘗會主基方御屏風、（ひおきの里丹波又備中）

浪そよるさても見るめはなきものをうらみなれたる志かの里人　後京極攝政

六帖題、ひもの丶里（檜物、遠江）

櫻さく志しまの里をむら〳〵にいろとるものはかすみなりけり　源仲正

家集、もろこしの里（駿河）

せたの里（近江）

御集大原せれふ里と云所にて

くもりなき君か御代にはあかねさすひおきの里も賑はひにけり　前中納言匡房卿

新六六

あふみなるひもの丶里のかはさくら花をはわきてをる人志なし　光俊朝臣

東路のもろこしの里におりてたつきぬをやからの衣といふらん　人丸

せたの里はしのうまふみ朽めおほみそこのなみたも面影にたつ　後頼朝臣

よをそむくかとては志たり大原やせれふの里のくさのいほりに　後德大寺左大臣

大原やせれふのさとの月はみついつかわか身もすむへかるらん　權中納言實家卿

久安百首

せきやの里

此歌は大原にせれふといふ所にまかりてある聖人にあひて侍けるにいまはみやこへかへらんとするに月のあかく侍りしに何となく心すみておぼえしによめると云々

大原やせれふの里のけふりをはまたきかすみのたつかとそみる　浮通朝臣

いほさきのすみた河原に日は暮ぬせきやの里にやとやからまし　光俊朝臣

此歌は家集に云康元元年九月鹿島社に詣でけるにすみだ河のわたりにて此わたりのかみのかたに河のかたにつきて里のあるをたづぬればせきやのさと丶申まへには海ふねもおほくとまりたりと云々

光盛院入道二品親王家五十首竹霧、（すゑをの里未勘國）

山とりのすゑをの里もふしわひぬ竹の葉志たりなかきよのしも　從二位家隆卿

五百六十番歌合

つくはねのすそわの里のゆふ煙このもかのものすまゐをそしる　覺盛法師

題不レ知、すがはらの里

萬廿

おきつうみ水底ふかく思ひつ丶もひきなら志丶すかはらのさと　よみ人志らず

村

永保元年大嘗會いつみのむらの人の家に菊花さかりなり、（いづみの村丹波）

正安大菅會、石倉のむら（備中）
永承大菅會、いはれのむら（近江）
正安大菅會、にしきべのむら（錦部、近江）
永保元年大菅會、はるべのむら（丹波）
永仁大菅會ちだのむら（丹波）
永保元年大菅會主基方御屏風、かみたのむら（米勘國）

白菊のいつみのむらにすむ人はくろかみなからとしをこそふれ　前中納言匡房卿
うたふらしよを治まれといはくらの村のもろ人もろこゑにして　大藏卿隆教
萬代
わか君につかへまつらん苔ふかきいはねの村のよろつ代までに　資業卿
色々の木々のもみちをみわたせはたれ織かくるにしきへのさと　雅仲卿
けふりたつはるへの村はいにしへの難波のみつの氣色こそすれ　前中納言匡房卿
玉葉賀
うすくこく千枝にさける藤なみのさかりもひさしよろつ代の春　前中納言俊光卿

よしみのむら（米勘國）
天仁元年大菅會悠紀方御屏風、よしたのむら（近江）
永保元年大菅會五月雨、たかの、むら（近江）
たか田のむら
永仁大菅會名所たなかのむら（田中、近江）
たてりのむら（立入、近江）
天仁大菅會、（ながらのむら近江又丹波）
名所歌中に禁衣、（たまむら玉村、近江）
家集、ながたのむら（長田、丹波）

千はやふる神田の村のいねなれは月日とゝもにひさしかるへし　前中納言匡房卿
君か代はよしみの村のたみもみな春をまつとやいそきたつらん　皇太后宮大夫俊成卿
時雨せぬよしたの村のあきをさめかりほす稲のはかりなきかな　前中納言匡房卿
わか君のちよのかすかも五月雨のたかの、むらの軒のたまみつ　同
天の下かくこそはみめかへはらやたか田の村は得ぬとしそなき　同
皇のちいほのあきのはしめにはたなかのいねのわさほをそつむ　前中納言俊光卿
うつろはてたてりの村のしらきくはさていく秋の露玄もかへん　同
はる〳〵と年もはるかに見ゆる哉なからの村のなかひこのいね　藤原正家朝臣
うつろはて庭おもしろきはつ霜におなしいろなるたまむらの菊　藤原資業　忠方
玄つかなるなかたの村にすむ人のかりつむ稲のはかりなきかな　同

家集、うしかひの村（伊賀）
正安大菅會、八重村（備中）
家集、やすらのむら（安芸、近江）
天仁元年大菅會、まきのむら（眞木、近江）
爲忠朝臣三河國名所歌、（藤野村三河）
同
中務卿親王家九首和歌、ふしみのむら
柿本影供百首、ふるえの村（駿河）

いなり松みにとてゆけはおそろしく草かひまさるうしかひの村　祐舉
八重村にさけるやまふき幾とせかあかぬにほひの色をかさねん　大藏卿隆教
さなへとるやすらのむらの五月雨に天か玄たこそ賑はひにけれ　前中納言匡房卿
まきの村つら〳〵つはきつら〳〵に思へはひさし君か八千代は　同
むらさきの糸くりかくと見えつるは藤の、むらの花さかりかも　藤原宗國
きしなくてふちの、むらの藤浪は松の木すゑにかゝるなりけり　藤原道經
見わたせはふしみのむらのゆふ霞たか歸るさのみちまよふらん　源基長朝臣
五月雨はふるえの村のとまやかたのきまてかゝるたこのうら波　法師定圓

家集、こしのむら
花祭文、ありまのむら（有馬、摂津又紀伊）
久安百首
題不知日本紀
康治元年近衛院大菅會、
菅柳村（近江）

此歌は萬葉集十七家持卿天平九年九月廿六日思放逸鷹夢見歌
五月雨はふるえの村のとまやかたのきまてかゝるたこのうら波
感悅作長歌に「つなしとる、ひみのえすきて、たこの玄ま、とひたもとほり、あしかもの、すたくふるえに、おとつひも、」云々

同右射水郡古江村取二獲蒼鷹一形容美麗鷙秀群也云々（此心歟）
花なみのくるすもいかになりぬらんこもしの村にみゆるさゝ栗　祐舉
明玉
神まつる花の時にやなりぬらんありまのむらにかくる玄らゆふ　光俊朝臣
紀伊國やありまの村にます神のたむくる花はちらしとそおもふ　大炊御門右大臣
玉賀家
春風に木すゑさきゆく紀の國やありまのむらにかみまつりせよ　よみ人しらず
君か代は民のこゝろのひとかたになひきてみゆるあをやきの村　右京太夫顯輔卿

永禄元年大嘗會主基方御屏風、さかひの村（丹波）

正安大嘗會、さゝのむら（御中）

題不レ知、ゆづはのむら（湯都盤、伊勢）

光明峯寺入道攝政家百首（遠村紅葉）

文永二年七月白河殿七百首（名所村）

永保元年大嘗會水繪圖村（近江）

題まちず

八角しる我すゝらきの御代にこそさかひのむらの水もすみけれ　前中納言匡房卿

色ことにそむるもみちの木々の村ゑくれけりとは今そゑらるゝ　大藏卿隆教

萬一　河上のゆつはの村にくさむさすつねにもかもなとこをとめにて　よみ人不レ知

かは上のゆつはのむらのうす紅葉ゑた草かけてつゆやおくらん　從二位家隆卿

いせちゆく人や宿らん河かみのゆつはのむらも日はくれにけり　光俊朝臣

をちこちの卯花月夜あかけれはひるとそみゆるゆふそのゝむら　前中納言匡房卿

萬一　かやり火のけふりたつなり里とほみゆつはの村に日は暮にけり　源仲遠

市

六百番歌合寄二商人一　正三位經家卿

家集或所の屏風市ひめのかたなどかげる所　爲賴朝臣

十題百首三輪の市（大和）　寂蓮法師

百首歌市時鳥　從二位家隆卿

六百番歌合寄二商人一　隆信朝臣

たちくらすいちめもさこそなけくらめ心をかへて思ひゑるかな

市ひめの神のい垣のいかなれやあきなひものに千代をつむらん

大和なる三輪の市路に急きてもいつまて世にはふるのやまこえ

きゝわかむさとすみてなけ時鳥すきゆく三輪のいちとよむなり

尋ねはやほのかに三輪の市にいてゝ命にかふるゑるしありやと

萬一

此歌左方申云かふるゑるし如何判者俊成卿云ほのかに三輪の

市はいのちにかふるぞにはなるやうに侍れど三わの市にゑる

しありやなどいへらんゆゑなきにはあらずと云々

萬二　やまといてみし、かるのいちに、わかたちきけは、玉たすき、　人丸

長歌かるの市（大和）

うねひの山に、なく鳥の、

文永四年七月白河殿七百首市商客、たつ田の市（大和）

ゑるしらす人はたつたの市なれはたれをたれとかわきて賴まん　參議忠繼卿

つれもなき名のみたつたの市もあらは心をかへて思ひゑれかし　後鳥羽院御製

玉ほこやおほくの民のたつの市にくるれは歸るかすもみえけり　順德院御製

いたつらにけふも暮なはたつの市日數經ぬへきみやこひとかな　正三位行家卿

辰の市や行かふひともくれ行はうるまのゑみつかけもとゝめす　正三位知家卿

たつの市にうるまの清水そこすみてひとの心のくまものこらす　藤原廣光

たつの市うるまの清水すゝしくてけふはかひある心ちこそすれ　俊賴朝臣

此歌は右のむまのかみの八條の家にていづみ夏のともたりと

いへることをよめると云々

同　時しあれはたつの市路のいちゑるくさけとも花をうる時そなき　正三位知家卿

建保三年名所百首（まかまの市、摂津）　君か代はゑかまのいちにおくかちの千年をへても色やまさらん　從三位範宗卿

最勝四天王院御障子　秋くれはゑかまのいちにほすかちのふかきいろなる風の音かな　如願法師

題不レ知（さがみの市、相模）
あべの市（阿部、駿河）

萬代　ぬのさらすこれやさかみの市ならんさゝわけ衣ぬきもかへはや
萬三　やきつへをわか行しかは駿河なるあへの市路にあひしこらかも

四條太皇大后宮下野　よ　み　人　不レ知

驛

百首歌あかしのうまや（摂磨）
六帖題せきのうまや（伊勢）
建保七年家千首驛常（かこの馬や）
なしはらのうまや（大和）
承安三年經正朝臣家歌合時鳥
建長三年十首歌合行路紅葉

六二　あつまちのうまやうまやと數へつゝあふみの近くなるか嬉しき
とりつなくうまや〳〵と思ふまにゆけとつきせぬみちのなか濱
新六二　たひ枕いくたひゆめのたえぬらんおもひあかしのうまや〳〵と
六二　みちほそき關の驛のすゝかやまふりはへすくるともよはふなり
松原はそこともみえすはりまちのかこのうまやは霧ふかくして
君はかりおほゆる物はなし原のむまやいてこんたくひなきかな
時鳥きこゆることもなしはらのうまやうまやとまちあかしつる
こし方はそむる去くれもなしはらのうまやあるてふ山の紅葉は

よ　み　人　不レ知
太宰大弐高遠卿
前中納言定家卿
民部卿爲家
前大納言顯朝
よ　み　人　不レ知
藤原資隆朝臣
正三位知家

庭

家集建長四年毎日一首中

秋のよのあめにまされるおとすなり木のしたかけの庭の瀧つせ

民部卿爲家

同五年毎日一首
百首御歌
同
同宴遊
六帖題
同
後法性寺入道關白家百首
二夜百首禁中
六帖題かざし
天仁四年師時卿家歌合卯花、玉の庭
堀河院御時百首
たはふれ歌とてよみたる中に
題不レ知
建長七年顯朝卿家千首
六帖題
貞應二年六イ當座百首山家庭草

同　閼いるゝやましたみつのともすれはとたえかちなる庭の瀧つせ
慈鎮和尚　みむろやまの冬のやまもとかみさひて庭の木の葉にみねの松風
同　すみよしの庭の木すゑも霜かれて冬こそまつのいろはありけれ
同　庭の松のことしよふなる風の音にうち合せてもとるひやうし哉
信實朝臣　新六二　宿しめてかひこそなけれこけの上のにはつくりせぬ山の岩かと
民部卿爲家　新六二　春はまつ袖をつらねしむらさきの庭そたちゐにいまもわすれぬ
皇太后宮大夫俊成卿　むらさきの庭のはるかせ長閑にて花にかすめるくものうへかな
後京極攝政　藤さくらかさしつゝくるもろ人の袖をつらぬるこゝのへのには
前中納言爲兼卿　うの花の去らゝにさけは山賤のかきねもたまのにはとなるらん
仲實朝臣　柴の庵のはひりのにはにおく蚊火のけふりうるさきなつの夕暮
顯仲卿　我もさそ庭のまさこの土あそひさておひ立るみにこそありけれ
四行上人　萬十四　にはにたつあさて小衾今宵たにつまよしこせねあさてこふすま
よみ人しらず　庭にたつあさてか袖もなほさえぬ春はきたれとゆきのけなくに
光俊朝臣　新六三　なかめのみたゝつれ〳〵の庭たつみよにふりはてゝ行方もなし
民部卿爲家　とふ人はあるしとてたにこぬ山のかけちの庭にさくすみれかな
同

建保三年名所百首　　信正行意

樞

春はこよひ去はのとほそにかへる山あさけの庭に誰をまたまし

同　　正三位忠定卿

はつせ山まつの戸ほそのあけかたにそよふきそむる秋のはつ風

文永九年毎日一首中　　兵部卿爲家

夕顔のみさへむなしきとほそこそさしてうき世の事も去らるれ

床

久安百首　　上四門院兵衛

山かつのすかきのとこの去たさえて冬來にけりと去らせ顔なる

家集　　選子内親王家大輔

かけにそふむくらの床のひとりねも月より外のなくさめそなき

家集旅歌中　　大納言通具卿

草むすふ床たにある丶夕くれのあらしのそこにこよひたにねん

六帖題　　光俊朝臣

すみ染の袖をつらぬるなかとこは時まつとてもあたにやはある

同　　同

あはれわかあなうらむすふ床の上に待いつる月の影の長閑けき

よろひとりをり　　信實朝臣

さりとてはさもあらましの床中にひさをいたきて幾代あかしつ

棟

家集歌をよめる　　俊頼朝臣

あれはて丶むねもくもらぬやとなれは霧ならてはもる人もなし

同、山里落葉　　同

あれはて丶むねまはらなる山里はちる紅葉はをとこにこそ去け

窓

題不知　　よみ人しらず

萬十一しい

窓ことに月さし入てあしひきのあらしふく夜はきみをしそ思ふ

奏在二深窓一人未レ識　　太宰大貳高遠卿

からくしけあけてしみれは窓深きたまのひかりをしる人そなき

最勝四天王院名所御障子　　後鳥羽院御製

はつせ山よのうきものはすみぬへしすきのまとふく雪のした風

十題百首御歌　　後京極攝政

月きよみ去くれぬ夜半の寢覺にもまとうつものはにはの松かせ

百首の御歌　　小侍從

月させとおろさぬまとの夕かせにのきはの梅はほころひにけり

建長八年百首歌合　　信實朝臣

月の夜のこゑをほそめに窓あけてこゝろをやれる歌なかめかな

六帖題（れまち）　　同

新六一

まとあけて山のはみゆるねやの内にまくらそはたて月をみる哉

家集　　四、行上人

おとはしていはにたはしる霰こそよもきのまとの友となりけれ

建仁元年老若五十首歌合　　寂蓮法師

谷ふかきかすみのまとは明やらて雲そいさよふうくひすのこゑ

式部親王續千首題月　　參議爲相卿

秋さむきあらしの窓はあけやらてねさめに見よとすめる月かけ

六百番歌合　　大藏卿有家

夏きてそ野中のいほはあれまさるまとともてけり軒のしたくさ

光臺院入道二品親王家五十首閑中燈　　從三位保季卿

つたへきくまとしつかなるきみか代にひかりをそふるのりの灯

夏風ニ北窓風ニ枕席知ニ涼秋ニ　さよふけてまとおしあくるうたゝねにまくらすゝしき庭の松風　慈鎮和尚

戸

六帖題　新六二
寛元元年結縁経百首後戸　いかにせん時にひくとのいてたちにかた〳〵見まくほしき昔を　民部卿爲家
同　我せこか夜戸出のすかたそのまゝに今もさゝすて待かくるしさ　同
題不レ知　あなこひしこやの戸いてしかた庇ひさしくみねはおも影そたつ　同
洞院摂政百首山家　萬十一　あしひきの山櫻戸をあけおきてわかまつきみをたれかとゝむる　人丸
家集閑花　たれかすむ山さくら戸のたてなからあくるまもなき軒のしら雲　光明峯寺入道摂政
春歌中　あふさかの山さくらとの關もりは人やりならぬはなを見るらん　從二位家隆
千首歌　みかりするかり場のをのに今日暮ぬ山さくら戸に宿やからまし　同
千五百番歌合すきのあみ戸　あしひきの山櫻戸のあけたてはにしきおりはへうくひすそなく　民部卿爲家
洞院摂政家百首山家　ほとゝきすあはれも深くすむ山に杉のあみ戸のあけくれのこゑ　四圓寺入道太政大臣
百首歌　山里の柴のかた戸のかたひさしあたけにみゆるかりのやとかな　常磐井入道太政大臣
光臺院入道二品親王家五十首萩露　柴の戸をとはてあくるやたれならんかよひなれたるみねの松風　寂蓮法師
秋歌中はきの戸　さきかくす野もりかいほのさゝの戸もあらはにおける萩の朝露　從二位家隆卿
こゝのへに花の散しく萩の戸はさそむらさきのにはとみゆらん　後九條内大臣

内裏當座御會。草花　民部卿爲家
正嘉三年毎日一首中（あみ戸）　さきやらぬ萩の戸わたるむら雨にたましくにはをみするしら露　同
六帖題柴のあみ戸　あけくれのそらにやいはん朝日さすあみ戸にかゝる夕かほの花　衣笠内大臣
同　新六二　山里の柴のあみ戸のあけたてはみねのあらしのこゝろなりけり　信實朝臣
中つまど　同　世をそむく柴のあみ戸のかけかねのおもひはつせは人そ待るゝ　同
同ちがへやり戸　逢見ての後のつらさの中つま戸をり戸もあけぬおとしたてかな　正三位知家卿
つま戸　今宵さへ事ゑけしとて逢ことをちかへやりとのたてなからのみ　隆祐朝臣
三百六十首中　現存六　ねられねは宿の妻戸をおしあけてみなみにすめる月をみるかな　好忠
かゝ戸　我せこか板屋のすゝとかけさけてたえぬをみるそ秋はすへなき　衣笠内大臣
題不レ知蔦木の板戸　現存六　よをこめて秋はたつなり我せこかねやのかさとを今やさゝましな　よみ人しらず
れいのつまどをならし給ければさゝすぐして明にける又のつとめて　萬十四　おく山のまきの板戸をとくさしてわかひらかんに入來てなさぬ
御返事　まつ人やありあけの月とおもひしをさしてやみにし槇の妻戸を　前大納言公任卿
修理大夫顯季。家にて曉水鶏、くろどの御戸　ひとりのみ有明の月のやまのはにいるまてさゝぬ眞木の妻戸を　權中納言定頼卿
題しらず　萬三　誰しかもくひなゝらては叩くへき黒戸のみとをひまゑらむまて　後鳥羽朝臣
八幡若宮六首の歌合山家　嚴國のかゝみの山のいはとたてかくれにけらしまてときまさぬ　手持女王
すみすてゝひとはあとなきいはのとにいまも松風庭はらふなり　後京極摂政

十題百首　前中納言定家卿
述懷歌中（くはの門）　民部卿爲家
六帖題　光俊朝臣
同　正三位知家卿
同　同
同門柱　信實朝臣
同　衣笠内大臣
むしろの門　植信正公朝
かど　同
文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成卿
正治二年百首　土御門内大臣
同　三條入道左大臣
夕戀　前大納言隆房卿
　　從二位家隆卿

門

あきつ嶋をさむるかとの長閑けきをつたふるきたの藤浪のかけ
かき籠る桑のとさしの老らくよこはいかなれやねのみなかるゝ
新六二　同しくはとちこもれかし桑の門名にのみたてゝとしのへぬらん
新六二　からくして入しはなにそ桑の門みちのこゝろよそのゑるしあれ
同六　世にしあらは行かふ人もいかはかりよもきの門に市をなさまし
同六　おのつから朽のこりたる門はしらわかいへいかて立なほさまし
同　荒はてゝあやしけれともあや莚かけたるかとはさすかなりけり
唐のむしろのかとはいやしきにくるまのあとそたえすみえける
引かへてすゝみのあみをかけてけりこや市をなす門とみえけり
春雨はくるひともなくあとたえぬやなきのかとの軒のいとみつ
跡たゆるやなきのかとの春ふかみあくるもさすも風にまかせて
いはまもるかた山かけのさゝれ水せかねとかとの内にこそすめ
老おくる門にやなきを植おかんさてそむかしも日をくらしける
とはれんとさしてはすます松のかとみはてんためのあきの夕暮

正治二年百首　寂蓮法師
家五十首祝　喜多院入道二品みこ
千五百番歌合判御歌　後鳥羽院御製
祇園社百首（西門）　皇太后宮大夫俊成卿
久安百首　清輔朝臣
題不知　よみ人しらず
同（いもがかど）　同
御集三首御歌山籠（槇の門）　後鳥羽院御製

すみわひてなほ山ふかくあとたえはたれをかこゝに松たてる門
としふれと老せぬかとをいく千代か月日の影のさゝんとすらん
山路よりさすか月かけゑはのかと見るもさひしき霧のまかきに
きりのうちもまつ面影にたつるかな西の御門のいしのきさはし
我かとのいつもとやなきいかにして宿もよそなる春をゑるらん
萬廿　我門のいつもと柳いつもいつもおもかこひすなりましつしも
萬十二　いもかゝとゆきすきかねて草むすふ風ふきとくな又かへりこん
おく山のきりのたえまの眞木の門いかなる人のすみかなるらん

墻

三百六十首　好忠
永久四年百首（瞿麥）　藤原忠房
六百番歌合　法橋顯昭
家集垣根雪　源仲正
正治二年七月當座三首歌合　參議雅經卿
六帖題（かきほ）　正三位知家卿

朝な〳〵には草とるとせしほとにいもか垣根はうすらきにけり
とこなつの花さく宿にいかにしてをりよき竹をかきにゆはまし
おのつからなさけそみゆるあらてくむゑつかそともの夕顔の花
やのはやす垣根の雪はつるのはのもとしろにこそ消のこりけれ
垣根もるいさゝをかはに音かけて門田のいなはほなみたつなり
新六二　かくて世を危ふけにてもすくるかなかこふ垣根のねもそ朽つゝ

同　　信實朝臣
くつれそふ破れついちの犬はしりふまへところもなき我身かな
嘉元三年慈恕百首　　爲實朝臣
百首御歌　　順德院御製
後鳥羽朝臣の所へ旅なる所にて　　二條太皇太后宮肥後
わかやとは秋のあはれをこめかほにかきねの山に鹿そなくなる
山里　　後鳥羽朝臣
いかにせんおくもかくれぬさゝかきのあらはにうすき人の心を（玉旅　散木旅）
真應三年百首野亭歳暮　　信實朝臣
草まくらさゝかきうすきあしのやはところせきまて袖そ露けき（散木）
石清水三首歌合　　民部卿爲家
さゝかきの薄き蘆屋の露けさに袖をれにけりとみえもするかな（現存六はイ）
家集雪歌中　　後鳥羽院宮內卿
山里にたゝかりそめのすゝきかきふちする人もなきわか世かな（身イ）
秋御歌中柴の袖垣　　四行上人
雪つもる野原にうつむあしかきのひとよのほとの非そまちかき
家集やへのしばがき　　花園左大臣
かりねするとこの柴かきひまを荒みうらもあらはにさゆる山風
永久四年四月鳥羽殿歌合　卯花　　仲實朝臣
をりならぬめくりのかきの卯花をうれしく雪のさかせつるかな（萬代）
承元三年長尾社歌合社頭花　　同
こゝろなき袖つか袖わさとみえぬかなあさかほさける柴の袖垣
同はなのやへが〻　　正三位知家卿
はるさりてかつらの里に雪ふれはやへの袖はかき花さきにけり
同みやがき　　法眼宗圓
卯花のさけるさかりのやへかきをたれやまかつの宿とみるらん
きりん〻すゝ（かやのかき）　　從二位行能卿
いにしへの誰そのかみに手向おきてはるもいくよの花のみつ垣（現存六）
千首歌竹がき　　後一條入道關白
つまこめに宮ゐせしよのあとなれや八雲にまかふはなの八重垣
　　民部卿爲家
あまつそてふるきみやかき神さひて花も久しき名をとめてけり
うらかるゝかやの垣根のきり〳〵す夜風をさむみ聲よわるなり
山かつのへたてにひしく竹垣のわれくたけてもよをやすきまし

百首歌竹あめるかき　　前中納言定家卿
千首歌、里の竹垣　　民部卿爲家
寛喜元年女御入內御屏風沼江菖蒲（沼のみつがき）　　同
六帖題、こけのかきね　　信實朝臣
文永二年七月白河殿七百首、しのがき　　同
建長三年十首歌合山家秋風（山のかきほ）　　後嵯峨院御製
文永元年七社百首、神のあらがき　　民部卿爲家
永久元年七月藤原定通家歌合雪（ふるのかきね）　　同
家集山家納涼、（すゝのかきね）　　よみ人しらず
あやめかき　　同
永久四年百首夏衣　　權大納言實家卿
弘長二年內裏百首寄レ垣戀（中がき）　　同
仁安二年二月清輔朝臣家歌合、あしの中がき　　藤原忠房
庭の面は鹿のふしとゝあれはてゝ世にふりにける竹あめるかき　　從二位行家卿
かた山のさとのたかゝきあみめよりもりくる秋の月のさひしさ　　太宰大貳重家卿
あやめかる沼のみつ垣いくかへりひさしき御代にけふを待らん　　同
新六六我宿のこけのかきねのきり〳〵す野へにのみやは露はならひし　　信實朝臣
同二心あるやとのとなりの中ひかきふみのかよひのはさまやはなき　　同
とし月を中にへたつる袖のかきのひと夜二夜にあふよしもかな　　後嵯峨院御製
人とはぬ山のかきほのくすかつらかつうらみつゝ秋かせそふく　　民部卿爲家
ちはやふる神のあらかき袖ろたへにゆふかけわたす卯花のころ　　同
卯花のふるのかきねのしら雪はふたゝひさくとみゆるなりけり　　よみ人しらず
歌林良材歌秋の月袖ろくそてれるうなはらのあをふしかきも色かふるまて　　同

此歌は童蒙抄云日本紀の事代主神の海中に八重のあをふしがきつくりてかへりさりぬといへり

日影おほきすゝの垣根にかくれゐてほかより夏をすくすけふ哉
あやひ垣たてへたてたるあなたにてはたおるむしの聲そ聞ゆる
さみたれにあひにけらしな夏衣ひとへひかきにかけてほさなん
君戀しつもる中かき三とせまていかてゆるさぬへたてなるらん
梅の花いかてにほひのもりぐらんあしの中かきひまなきものを

久安五年七月山路歌合
雪（松がき）
題不知（よもぎのがき）
久安五年七月山路歌合雪

あらてくむ志つの松かきはなさきてあな面白のゆきのあしたや　藤原顕方
萬代
志けかりし蓬のかきのへたてにもさはらぬものは冬にさりける　好忠
雪ふかき谷のはふやにあさほらけあけそわつらふ柴のくみかき　西念法師

此歌判者顕輔卿云右の歌はふやとよめるきゝよからず云々

百首御歌
百首初冬
嘉元元年民部卿親王家歌
千首歌柴
寛喜元年女御入内御屏風
光寒院二品親王家五十首
笆墻夢

あるやんごとなき所よりきくのうつろひけるをいだしたまへれば

籬

わかやとのすゝきおしなみふる雪にまかきの野への道そたえ行　後京極摂政
いかなれはよものまかきはかれはてゝなほ冬こもる深山への里　前中納言定家卿
山人のふもとをかけてすむ庵はからぬましはをまかきにそゆふ　参議爲相
色かへぬまかきの竹のませの内にちよゆひそふる松むしのこゑ　西園寺入道前太政大臣
あたにゆふまかきの内にとこ夏のおのれふしてや露にぬるらん　信實朝臣

家
山里に匂ふをみれはきくのはなたきとのまかきおもひこそやれ　惠慶法師
家　新千雑下
くりかへしま垣の内に花つめはいとはかりにもありとやは思ふ　同

此歌は重之がもとにあをつゝらをこにくみて棗栗などを尾花にませてやるとてと云々

文永二年詩歌合仙家秋興
六帖題
三百六十首
百首歌きりのまがき
建長八年百首歌合霜がれ
のまがき
六帖題あばら笆

ぬれてほす露もちとせをちきりおきて玉のまかきにうつす白菊　前中納言爲家卿
新六六
霜おけは一夜二夜にうつろひぬたけのまかきのしらきくのはな　衣笠内大臣
かこはねとよもきの籬夏くれはあはらのやとをおひかくしつゝ　好忠
秋はいぬきりのまかきは霜かれてさてもすむやと問ひとはなし　寂蓮法師
霜枯のまかきにのこる露や今朝さゝのつらゝとむすほゝるらん　従二位行家卿
新六二
我庵のあはらまかきに柴そへておいらくのこはたちもかくれん　正三位知家卿

夫木和歌抄卷第三十一終

夫木和歌抄卷第三十二

雑部十四

題

御調　酒　薬　硯　筆
太刀　刀　鞘　弓　矢　沓
行縢　杖　鞭　蓑　笠　琴
笛　鼓　鐘　牽都婆　金　寶
玉　鏡　甃　枕　莚　簾
櫛　燈　笠箒　火取　挿頭　祓麻
志折　標

御調

六帖題

新六二
ゆたかなるなゝつのみちの貢ものうみ山かけてさためおきてき　民部卿爲家

寛喜元年女御入内御屏風　同
冷泉院御時大嘗會歌　元輔
安和元年大嘗會悠紀方近江國御屏風歌　兼盛
大嘗會悠紀方御屏風　皇太后宮大夫俊成卿
同　前中納言匡房卿
同　同
永久四年百首貢調　俊頼朝臣
同　神祇伯顯仲卿
同　仲實朝臣
同　二條皇太后宮肥後
六帖題　光俊朝臣
同長歌　よみ人しらず

秋の田に民のみつきをそなへても幾とせあまりおしねほすらん
くりもとやせたの橋桁たわむまてはこひつゝくるみつき物かな
みつき物たえすそなふる東路のせたのなかはしおともとろゝに
東路や日つきのみつきたえすして雪ふみわくるせたのなかはし
さゝなみや志賀の浦より舟出してはこふみつきはかちも變らす
貢ものはこふふなせのかけ橋にこまのひつめのおとそたえせぬ
みつき物ひく桑まゆのいとをもてくるてもたゆく備へつるかな
あしたつやはたさす駒の聲たてゝせたのなか橋ひきわたすなり
なかとのゝひたちの御倉開きあけよけふ貢ものをさめみつへく
すめらきのたみやすらけくをさむれはひまなくはこふ貢物かな
新六二
はるはまつ貢そなふる國ふみをさしていくよもきみのみそ見む
萬二十
なにはの宮は、きこしめす、よものくにより、たてまつる、み
つきの舟は、ほりえより、

酒

萬三
さけの名を聖といひしいにしへのおほきひしりの言のよろしき　大納言俊人卿　中納言家持卿

同　よるひかる玉といへともさけのみて心をやるにあに玄かめやも
同　同　あたひなきたからといへと一つきの濁れる酒にあにまさらめや
同　同　古への人のゝませるきひのさけやもはらすへてぬきすたまはん
同　同　あち酒を三輪のはふりか祝ひすき手觸しつみか君にあひかたき
題不レ知　同　あちさけをみわの祝か山てらすあきのもみちのちらまくをしも
同　同　あち酒の御室の山に立月のみかほしきみかうまのあの音そする
十分一盃驅於人　人　あくまてにみてる酒にそ寒き夜は人の身までにあたゝまりける
光民收レ稼玄冬、節田、獻有レ年萬國娛　千　をみ衣玄ろきをするてさかつきのめくみにゑへる夜半そ樂しき
久安百首　定家卿　竹の葉にまかきの菊を折そへてはなをふくらんたまのさかつき
九月九日を　前大納言隆季卿　竹の葉にうかへる菊をかたふけて我のみ玄つむなけきとそする
家集　後二條　朝臣　朝出てきひのとよさけのみかへしいはしとすれと玄ひて悲しき
秋の御歌中　同　この下につもるおち葉をかきつめて露あたゝむる秋のさかつき
六百番歌合重陽宴　後京極攝政　春秋にとめるやとにはしら菊をかすみのいろにうかへてそ見る
正三位季經卿　きよみきの聖をたれもかたふけて玄ひをつみえぬ人はあらしな
後頼朝臣　此歌は家集にいはく人のもとにまかりてよもすがらあそびけるにさけなんどのみて玄ひの有けるをつみなんとしてあるひじりのあやしきことなんどいち〳〵にいひけるついでによめると云々

藥

思二故郷一歌　よみ人しらず
題不レ知　同
家集菊　權中納言長方卿
久安百首　花園左大臣家小大進
住吉社卅首　從二位家隆卿
千五百番歌合　寂蓮法師
由來生老死三病長相隨、除却無生忍人間無藥治　前中納言定家卿
久安三年毎日一首中　民部卿爲家
六道生死輪廻心を　花山院御製
久安百首金剛授又　花園左大臣家大進

萬五　くもにとふ藥はむよはみやこみは賤しきあか身またをちぬへし
同　我さかりいたくゝたちぬくもにとふ藥はむともまたをちめやも
長月のきくの玄た水くみつれはおいせぬくすりたれかたつねん
尋ねゆく船路にとしのおゆるまてあはぬくすりに似たる戀かな
君かためよもきか玄まもよりぬへしいくゝすりとる住吉のうら
新後撰賀　浪の上にくすりもとめし人もあらはこやの山に道しるへせよ
舟のうちにうき世のきしをはなれてや玄らぬ藥の名をは尋ねん
くさ木まて佛のたねをきさすとはたえなる法のくすりにそしる
もとの玄のさかの教への藥あらはわれ永き世にまとひはてめや
いつかたも心にかなふ藥あらはにしをそつひのすみかにはせん

家集不レ見レ文總
文永六年白河殿七百首披レ書知レ昔　俊頼朝臣
としをへてとなりの壁はくつるれと夢にも文をみぬそかひなき
六帖題御歌文　後嵯峨院御製
むかし人やいかなる花をむすひおきて今も其世の事を知るらん
柿本影供百首　中務卿みこ鎌倉
ときおけるみ法の文をあはれわかさとり開きてみるよしもかな
久安百首　後九條内大臣
朝ことに文の塵をもうちはらひいのちありけによをやたのまん
六帖題　前大納言隆季卿
あさからぬ心をふみにかきのへてなくるをりにや我をしるらん
百首歌　衣笠内大臣
いくかへり染て色こきくれなゐのふみ〳〵しあとも今はたえつゝ
千五百番歌合　寂蓮法師
陸奥つほのいしふみありときくいつれかこひのさかひなるらん
六帖題　小侍從
夢とのみおもひいて〳〵もやむへきに契しふみのなにのこるらん
同　正三位知家卿
武士のやそうちふみはかた〳〵に行わかれたるあとそみえける
同　民部卿爲家
うたてなと大和にはあらぬから文の跡を學はぬみとなりにけん
同　信實朝臣
はては又ゑみのすみかの昔ふみはらへはちりと見るそかなしき
結ひめの逢ひて返るたひもあらはみてけりとたに慰さめてまし　實隆朝臣
此度はみて返しけり手なれつゝひくすみたかふふみのうはかき　前民部卿雅有
なにとしてうちとの文を學ひけん卷くものふるも物うかる世に　權僧正公朝
いしふみやつかろのをちにありときくえそ世中を思ひはなれぬ　清輔朝臣
にしき木にかきそへてこそ言の葉も思ひそめつる色はみゆらめ　法橋顯昭

此歌右方申云にしき〳〵に心ざしを見せそむるにてこそあれふ

みをそふべきことかは左陳云能因がかきたる物に錦木には必ふみをつくる儀也と云なり

硯

家集寄レ硯總
洞院攝政家百首水　源仲正
いつはりの名をのみ立て逢見ぬは硯のうへのちりやふきけん
正治二年百首御歌　家長朝臣
池にすむ鳥のあとさへたえぬらん氷るすゝりのみつくきの末
寄多院入道二品のみこ
いさきよく蓮の法をうつしてそ鳥もすゝりのみつをそへける

筆

家集くさのほたるを　惠慶法師
水くきのあとふみならす我ならは草のほたるをよそにみましや
同日晴不レ見三小字書一ィ　能因法師
水くきのあとをかすみの立こめてめにたなひくは老のはるかな
家集　能宣朝臣
水くきのあとにのこれるたまの聲いかゝもさむき秋のころかな
この歌は貫之がかきあつめたる歌をとき文がもとへかへすとてよめると云々
貞應三年百首筆御首中　民部卿爲家
さほひめの筆かとそみるつく〳〵し雪かきわくる春のけしきは

弘安元年百首　なからへて身にそ知らるゝ筆の海かく迄かたは實にいとまなし　後九條内大臣
柿本影供百首　わかの浦はおほくの人の筆のうみおきにもへにも藻鹽かくらし　同

太刀

題不レ知　萬十　たまたちをまきぬる妹もあらはこそよの永けきも嬉しかるへき　よみ人しらず
六帖題御歌　世をはかり人もあらはと武士のつはなかしたるたちもかしこし　中務卿のみこ
同題歌たち　伊勢島やみそしの濱の松かねにとし經てたてるたちもかしこし　權僧正公朝
同　新六五　からくにのふたつのたちは昔より君のまもりにさためおきてき　衣笠内大臣
同　同　よの中をおもふ心もほそたちのさやはまろうかつまりはつへき　信實朝臣
同　同　山ふかみ松のおふてふいはかねにをさめしたちは妹そ玄るらん　光俊朝臣
同　同　あはれにそいひし契をたかへしとつかの上まてたちをかけゝる　大納言典侍
久安百首　はくたちの鞘はあるへきと思へともせめて戀しき物にそ有ける　前參議親隆卿
建保三年名所百首　たひゝとの草のまくらにおくたちのさやの中山けふやこえなん　從二位家隆卿

刀

六帖題かたな　新六五　何事を思ひけりとも玄られしなゑみのうちにもかたなやはなき　衣笠内大臣
同　同　すてはてすみはさひはてぬ古刀さすかに世をはおもひたてとも　民部卿爲家
同　同　今はわれまろはにとける小刀のよにつかはれぬ身とそなりにし　正三位知家卿
同　同　やまと歌のこしはなれたるさひ刀さもよにたゝすきえもなき物　信實朝臣
家集五十首歌中　手にとれは人をさすてふいかくりのゑみのうちなる刀おそろし　權僧正公朝

鞘

同題さや　新六五　いまは玄もさそ玄りぬらん玄りさやのさしも心におもふ氣色は　衣笠内大臣
同　つし祭けふをはれともみせさやのさき折かけてねるや誰か子そ　正三位知家卿
同　かつはまたさす鞘くちにあふひつは心ありけるかなつくりかな　信實朝臣

弓

文治六年五社百首　うらやましあたちの峯のそりま弓そりはてましを引かへすらん　皇太后宮大夫俊成卿
貞永六年十首歌合寄弓戀　狩人のひくやゆすゑのよるさへやたゆまぬ關のもるにまとはん　前中納言定家卿
家集寄弓戀　とかりするさつをの弓絃うちたえてあたらぬ戀にやもふ比かな　信俊朝臣

家集寄ゝ弓戀
久安百首　同
寛元四年日吉社歌合　前參議親經卿
題しらず　光俊朝臣
同　よみ人しらず
寶治二年百首寄ゝ弓戀　同
六帖題まゆみ　後九條内大臣
同題弓　權僧正公朝
同　衣笠内大臣
同題あひおもふ　正二位知家卿
寶治二年百首　信實朝臣
たはぶれ歌とてよみ侍りけるイ　同
題不ゝ知　四行上人
天仁元年顯季卿家歌合　よみ人しらず
　　琳賢法師

わかれにしたつかの弓の白鳥をきのかはゆすりこひぬ日そなき
なか〳〵にたつかの弓となりにせは引止めてもいはましものを
いかてかは梓のまゆみつるきれておとせぬ人をうらみさるへき
まれにみん君をみんとそひたりての弓とるかたの眉根かきつる
萬二　みこもかる信濃の眞弓我ひけはむま人さひていなといはんかも
こひとのみ信濃の眞弓ひきかねてつよきなけきはよるそ苦しき
みこもかる信濃の眞弓おしかへしおもふもくるし君によりなん
新六五　いかにせん信濃の眞弓年をへてなひかぬほとのこゝろつよさを
同　つるなれぬあらきの弓のそり高みさていたつらにひく人もなし
同　あつさ弓末まてとほすふせ竹のはなれかたくもちきるなかゝな
手にならすかひこそなけれあつさ弓ひけは中のみ遠さかりつゝ
萬廿　左のためてすゝめ弓はるをの原はひたひ烏帽子のほしけなる哉
好忠家集　まくらなるをふちのまゆみ見るときそ君か手風はいとゝ戀しき
いかにせんよしきの弓のともすれはひきはなちつゝあはぬ心を

箭

六帖題　民部卿爲家
同　正三位知家卿
同　俊實朝臣
同　光俊朝臣
同　神祇伯顯仲卿
久安四年百首草香　權僧正公朝
六帖題　同
家集矢　源仲正
家集寄ゝ水鳥ゝ戀　源師光
正治二年百首　よみ人不ゝ知

新六五　老ぬれはのやにさすてふつの鏑そうらイ〳〵しくそなりにけるかな
同　人こゝろたのまれかたき狐矢はたゝそのまゝにまたおとそせぬ
同　今日は皆ゆたちのいての外迄もすゝのいたつきこしなれにけり
同　いまのよや弓の心もあらはれてはなつやすちのちかはさるらん
同　空にきくつゝみのこゑのなかりせは身に立矢をはいかて拔まし
峰におへはむす音もせて草のかうあさき裾野にとも矢たはさめ
なるやもて鹿とりなひく夏草にうらはすふせてねらふさつをか
きの國のむかしゆみをのてにもたるなるやならすや我思ふこと
我戀はくるりはなかす河の瀨にたちぬるとりのあとはかもなし
萬七　あつさ弓とも矢たはさみ諸人のおのかひき〳〵いとむなるかな
近江のやゝはしの去のをやにかけてまことありとや戀しき物を
萬一　ますらをの友矢たはさみ立向ひいるまとかたはみるにさやけし

行滕

家集五月雨　夏野ふむせこかむかはきすそ朽てほすひまもなくさみたるゝ比
戀歌中　よとゝもにえこそあはせね行滕のかたかはもなき戀をのみして　源仲正

六帖題
題不レ知

新六二
たちならす野原の鹿のあきふけてかたむかはきの妻をこふらし　信實朝臣
萬十六
すこもしき青なにもてこうつはりにむかはきかけてやすむ此君　よみ人不レ知

沓

家集閑庭篇
山里はにはさえわたるあさ去もをくつすりけちてくる人もなし　源仲正
古抄中ィ
ふみ分て誰いそくらんこゝのへやとのへにつもる雪のふかくつ　民部卿爲家
家集
ぬく沓のかさなる上に重なるはいもりの去るしかひはあらしな　よみ人不レ知
長歌
庭の間もみえすちりしく木の葉沓はかてもたれの人か來てみん　和泉式部
萬十八
とふとりの、あすかをとこか、そらはれて、ぬひしくろくつ、さし　よみ人不レ知
はきて、にはにたゝすみ、

杖

正治二年百首
男山はとのつゑにはたつさひぬならさかのほる去るしあらせよ　土御門内大臣
六帖題御歌
たらちめの諫めし杖の年をへてよわるはさこそかなしかりけめ　中務卿のみこ鎌倉
新六四
同
あはれ我家につゑつくよはひまて身をなからへて物をやは見し　衣笠内大臣

同
述懷百首
新六二
斧の柄はさそ朽にけん身のうさの我つらつゑのたゆるよそなき　信實朝臣
寄二老人一戀
いかにしてこのよのやみをてらさまし光むさかの杖なかりせは　後頼朝臣
永久四年百首賀
山ふかみ杖にすかりている人のこゝろのそこのはつかしきかな　四行上人
同
つきもせぬ君かよはひは幾千代と限れるたけの杖にやあるらん　二條院大進
我君をいはひこめつゝたけの杖ちとせかきるそうれしかりける　二條院皇太后宮肥後
家集
つきもせぬ祝の杖はかめやまのをのへに行てきるにそありける　よみ人しらず
題不レ知
八千代へん君のためにと神やまの去らたまつはき卯杖にそきる　鳴長明
百首御歌
鳩のゐる つゑにたつさふ身を持てこえまほしきはあふさかの關　後昌
七日卯杖にあたりたる日わかなにそへて後頼のもとへ　慈鎮和尚
散木雜
いかにしてはとてふ杖にかゝるまて君につかへて此よくらさん
返事
老らくのこしふたへなる身なれとも卯杖をつきて若菜をそつむ　藤原經業
鳩のゐる杖にすかりてつみくれはその去るしさへ頼もしきかな　後頼朝臣

鞠

百首御歌
花のえにかけて數ふるまりの音のなつまぬほとに雨そゝくなり　慈鎮和尚
同
秋の稲のをさまれるよの嬉しきは春のあそひのまりこゆみまて　同

久安四年毎日一首中　民部卿爲家
同十一年毎日一首中　同

でりもせす風のとかなる夕暮にこゑ〳〵さるきまりのかすかな
鞠の庭にさくら柳をうつしおきて春はにしきにたちやましらん

蓑

雪中旅行を　明玉
六帖題澤　旅なれぬ人にをしへよ雪ふらはみのうちかへせふゝきもそする
同みの　ますらをの蓑にさゝむと澤に生るさゝめかるにも袖はぬれけり
同　あま衣みのきていへにいることは神やらひよりいむといふなり
同題不〻知（山すげみの）　旅人のみのふきかへすあさあらしにむら雨むかひ行なつみぬる
六帖題ふかみの　我妹子か袖をたのめてあしひきの山すけみのをとらてきにけり
同かくれみの　かち人の野分にあへるふる蓑の毛をふく世こそくるしかりけれ
同　きまほしきよのうき時のかくれ蓑なにかは山のおくもゆかしき
家集五月雨（さゝめのみの）　隱れみのうき名をかくすかたもなし心におにをつくる身なれは
中院入道左大臣家元永元年歌合五月雨　たひ人のさゝめのみのをきてしより一日ぬかせぬ五月雨のそら
朽にけるすけのをみのにおのつからふる五月雨の程をしるかな

植中納言師時卿
衣笠内大臣
植僧正公朝
前中納言爲兼卿
よみ人しらす
民部卿爲家
信實朝臣
衣笠内大臣
植中納言定家卿
八條入道太政大臣

堀河院御時百首
久安百首みかさ　みさふらひみかさなめしそあさひ山木の下露もいまはひぬらん
六帖題　ますけよき笠のかりてのわさ蓑をうちきてのみやすき渡るへき
同つほみかさ　大みやのみかさのかけの廣けれはあめのしたには誰かたのまん
同袖かさ　ふりやまぬ雪まのむめのつほみかさおもふ心のいつかひらけん
同しからきかさ　なにせんに我れかさすらし袖かさの下にそなみた雨とふりぬる
同すけのあみかさ　雨すくる外山の道のこかくれにそからきかさそみえかくれする
同やふれかさ　ますらをのすけのあみ笠うち垂てめをもあはせす人のなりゆく
同　さりとてもさせる事なき破れかさほねを折りてそ君につかへし
延喜十一年京極御見所歌合　まの丶浦の小菅の笠をとりもあへす袖くれて渡る淀のつきはし
同　こゝなへて君か見にくるかすか野はまつかさ繁し雨にぬらすな
題不知なにはすがかさ　ぬれつ丶も雨にはゆかんまつかさは千年の春をちらさ丶らなん
みしますがかさ　おし照や難波すか笠おきふるしのちはたかきんかさならなくに
六百番歌合　みしま菅いまたなへなり時またはきすやなりなん三島すかゝさ
六帖題おほひかさ　たれかゆく夏の野草の薬末よりほのかにみゆるみしますかゝさ
世を捨ぬ人のさまかはおほひ笠かけぬはかりはかことなれとも

植大納言公實卿
季通朝臣
正三位知家卿
衣笠内大臣
光俊朝臣
民部卿爲家
衣笠内大臣
信實朝臣
中務卿親王鎌倉
よみ人しらす
同
同
正三位季經卿
植僧正公朝

琴

仲實朝臣ことなあたらしく作てみせければかきならして　　俊頼朝臣

ひきならす聲そさやかに聞ゆなるくちにし舟のみことならねと

此歌は日本紀第十應神天皇五年冬十月伊豆國におほせてながさ十丈の舟をつくらしむ試に海にうかぶ則かろくうかびてとく行事はしるがごとし故其名を枯野といふ輕野とはのちの人誤也同三十一年秋八月宮船枯野朽て用にたゝず其舟の名をたたずして後葉(世)につたへんとて有司に今其船材を薪として鹽をやかしむ五百荷をえたり則諸國に賜て船をつくらしむ初枯野船を鹽のたきゝにせし日餘燼ありすなはち其もへざるをあやしみて天皇に獻ず琴につくらしむ其音鏘鏘として遠聆云々

ゆふき琴ひきあかしてかへりけるあしたにつかはしける　　如覺法師

琴のねに水のさらへやかよひけんさもほしかたきけさの袖かな

家集云此水のさらへといふ事をいかゝと思ひてねたる夜父の伯夢にいはく水調といふ事あればひがことにあらずとなんあらしと云々

天慶三年宰相中將家屏風月に琴ひくをよめる　　貫之

ひく琴のねのうちつけに月影をあきのゆきかとおとろかれつゝ

月かけを雪かとみつゝひく琴をきゝてめつとは知すやあるらん　　同

六帖題こと　　衣笠内大臣

永久四年百首歌　　俊頼朝臣

同　　仲實朝臣

同　　源兼昌

文應元年每日一首中　　民部卿爲家

六百番歌合寄琴戀　　前中納言定家卿

新六五

夏くれはあつまのことのあしつをによりあけてける藤なみの花

琴の音のことちにむせふ夕暮は毛もいよたちぬすゝのさむさに

空の色によそへる琴のことちをはつらなるかりと思ひけるかな

さよ更てものゝね高くなりぬらしさらふる琴はことちあくらし

みとりなる玉の緒ことのことちかもみれは音する秋のかりかね

むかしきく君かたなれの琴なくは夢にさられてねをもたてまし

此歌判者云左の歌殊なる事なし萬葉に梧桐日本琴夢に娘子に化して云「いかにあらん日の時にかもこゑさらん人のひさのへわれまくらせん」といへる歌の心にこそ侍めれゆゑなきにはあらざるべしと云々

色葉四十七首　　同

六帖題こと　　信實朝臣

百首中　　寂蓮法師

建保三年名所百首　　從二位家隆卿

笛

律のうたに琴の音あへるゆふまくれかたいとなひくにはの青柳

新六五

我齢たつかことちの緒あはせのたゝせめにのみせめもゆくかな

あふさかの關のいほりと思ふにもあつまの琴そ身にはさみける

あふさかのせきのいほりの琴のねはふかき木すゑの松風そふく

永久四年百首笛　俊頼朝臣
あをたけを雲のうへ人ふきたてゝ春のうくひすさへつらすなり

同　仲實朝臣
吹たつるふえの調のこゑきけはのとけきちりもあらしとそ思ふ

同　源兼昌
なみの音にたくへてそきく墨の江の汀にてきくこまふゑのこゑ

櫨中納言家屏風家集歌人の家の琴ひき笛ふきてあそびたる所　和泉式部
きく人のみゝさへさむき秋風にふきあはせたるふえのこゑかな

同　同
笛のねは紅葉をふくにあらねともひゝきに枝もうこくへきかな

文永二年七月白河殿七百首　後嵯峨院御製
末の世と思ふもわひしよりたけはきりてそ笛のねをもたてける

毎日一首ゝ中　民部卿爲家
吹まよふもみちの風のふえのねにたちまふ人のそてかへるみゆ

六百番歌合寄ゝ笛戀　正三位季經卿
うらやましわかりこちくの笛の音をたのむる中の人はきくらん

六百番歌合寄ゝ笛戀　法橋顯昭
獨寢をいまはなにゝかなくさまんとなりのふえも吹やみぬなり

此歌判者云向子期か隣人のふえはことばの中に隣人ふえを吹ものあり甚聲寥喨といへども吹やむゆゑもなきを吹やめることのあるやうにきこゆいかゞと云々

同　隆信朝臣
わかこひはまた吹なれぬ横竹の音にたつれともあふかたもなし

同　正三位經家卿
よりたけの君によりけんことそうき一よの節にねのみなかれて

同　中宮權大夫家房卿
はる〳〵と浪路わけくる笛たけを我こひつまとおもはましかは

此歌判云右歌なみちおほくわけくるふえたけをといへるおほくなみこそわけこしかなどいへる野典のこゝろにやゑんなる鄙曲に似たるべしと云々

柿本影供百首　後九條内大臣
跡ふりて竹にそかゝる秋のくもそらにのこれるふえのねもなし

六帖題　衣笠内大臣
新六五玉ほこのみちのちまたにふくふえの心はかりはゆかぬものかは

同　民部卿爲家
同世の中はうき一節にふくふえのあなむつかしやねこそたえせね

同　正三位知家卿
同ふきたつるとなりの笛の聲たかみ我去きたへもちりはらふらん

同　信實朝臣
新六みまきの〻草かり笛のわらは聲あなかまとのみよそへてそきく

同　光俊朝臣
同牛にのりまきのうなゐか吹笛はふかきさとりの去るへとそきく

家集高麗笛　源仲正
ふりことるみきのかくやの高麗笛に打合するはからつゝみかも

洞院攝政家百首逃懷　家長朝臣
ふえのねをふきつる人もよるの鶴子を思ふ聲をあはれともきけ

鼓

正治二年百首　土御門内大臣
君か代はいさめのつゝみとりなれて風さへ枝をならさゝりけり

百首歌　寂蓮法師
さよ深き貴船のおくの松かせにきねかつゝみのかたおろしなる

顯季卿すゝめける百首ゝ　祐子内親王家紀伊
うちならす人のなけれは君か代はかけしつゝみもこけ生にけり

堀河院御時百首ゝ　民部卿爲家
文永九年毎日首一中　時うつる法のつゝみに打添へてたえせぬかねもあるへきをまて

弘長四年毎日一首中　民部卿爲家
題不レ知　よみ人しらず
長歌　人丸

ときもりの雲井のこゑをへたてきてかはるつゝみになるゝ山里
（萬十一 時守）
ゆみとりもちし、みいくさを、あともひたまひ、とゝのふる、つ
（萬二）
つみのおとは、いかつちの、こゑときくまで、ふきならす、をつ
のゝこゑも、
老てこそうつへかりけれよゝへてもとしのつゝみの契ありやと
此歌は女御どのゝ御いみはてゝ七月十五夜彦山の座主の此と
のゝみかどに常不輕つきにきたりけるをのちにきゝてよめる
（石 悼イヘイ）
と云々

櫃中納言定賴卿

鐘

花にあかぬ名殘を思ふはるの日のこゝろも去らぬかねのおと哉　後京極攝政
吹よわるたえま〳〵にきこゆなり入あひのかねをうつむ山かせ　後鳥羽院御製
秋ふかみ去もまつみねの鐘の音にこゑうちそへてを鹿なくなり　中納言雅兼卿
此歌判者大僧正行尊云右歌本文をよまれたるに侍めりあさまし
（左イ）
く遠耳聞ける人かな鹿や鳴らんなどおしはかられたらばこそ
あらめ唐朝のかねのおとに日本の去かの聲うちそへて鳴なり
と侍ればよと云々

百首歌　殿宮門院大輔
洞院攝政家百首述懷　後九條内大臣
佛本影供百首　同
文應元年七社百首　民部卿爲家
百首歌曉　從二位家隆卿
家集　四行上人
弘長三年毎日一首中　民部卿爲家
六帖題　同
正治二年百首歌（切イ）　後鳥羽院御製
同　前中納言定家卿
建保三年内裏秋十五首歌合　同
千五百番歌合　皇太后宮大夫俊成卿
題不レ知（イ）百首御歌　慈鎮和尚
題不レ知　笠耶女
六百番歌合　法橋顯昭

きゝつもる去ものよはひの鐘のこゑとしはふれともすむ心かな
露霜をおくりむかふるかねの音にその事となくすむこゝろかな
ちかひおくことはにたかふ夕くれはくもりかねたる鐘の音かな
去もにおくあかつきおきのかねのねを老の枕にたゝへてそきく
きく人のねさめの袖は露けくてをのへのかねにしもやおくらん
まきれつる窓のあらしにこゑとめてふくるをつくる鐘の音かな
思ひきや大津のかねの浦つたひわかたつそまにならんものとは（なイ）
昨日けふわくなる鐘のおとにたに猶おとろかぬなかきよもうし
（新六二）
ひらまつはまた雲深くたちにけりあけゆく鐘はなにはわたりに
わくらはにたのむる暮の入合はかはらぬかねのおとそひさしき
ふるさとは遠山とりのをのへより霜おくかねのなかきよのそら
夜をかさねさひしきとこに草枕いくたひかねのこゑをまつらん（寺イ）
萩に鹿かやになくむしこゝろせよ野守のかねのあきのゆふくれ
（萬四）
みな人をねよとの鐘はうつなれと君をし思へはいねかてぬかも
入あひの音につけてもまたれしをねよとのかねに思ひよわりぬ

六百番歌合

あはれをはいかにせよとて入合に聲うちそふる玄かのねならん　正三位經家卿

此歌左難云かねとなくて入あひとばかり如何判云右歌入あひはかならずしもかねとすゑずともかねにこそはときこゆらん

と云々

題不レ知

萬代

いたつらにけふもくれぬと入あひにまためくりあふわか涙かな　慶政上人

建保三年名所百首

あかつきのかねのひゝきにつくはやま人はかけせぬとこの枕に　僧正行慶

同年和歌所歌合

あらし山こゑさへつらきねさめかな時たにむせふあかつきの鐘　同

百首歌古寺松

ゆふくれのかねのひゝきを吹そへてあらしのやまをおつる松風　從三位家隆卿

家集冬歌中

雪ふりてことしもけふにはつせ山あらしのかねの夕くれのそら　同

述懷歌

ちかつくときゝけん鐘もみなせ山おもひやりてや秋はかなしき　同

最勝四天王院名所御障子文永二年七月白河殿七百首

みなせ山木葉まはらになるまゝにをのへのかねの聲そちかつく　後鳥羽院御製

前大僧正源惠泉障子給關寺秋を書たるところ　七月

ちよふへき龜の尾山のむかひなる鐘のひゝきはいつもつきせし　山階入道左大臣

文永二年白河殿七百首

あふさかや杉のしたみちたちこめて霧にくれぬる入あひのこゑ　前中納言爲世卿

貞應三年同題百首　關字歌中

くれぬとて入あひのかねに宿とへは關路のつきにさそふあき風　前民部卿雅有

長河隔外失二行客一遙聞風中送二遠鐘一

あふさかや關の戸こゆる秋かせに霧もへたてぬいりあひのこゑ　參議爲相卿

源惠僧正泉障子給歌

はつせ山入あひのかねのこゑはかりくもりのこせる五月雨の空　民部卿爲家

文永二年白河殿七百首

さためなきあらしにかはる山かけのくもりはてたる入あひの鐘　前中納言定家卿

家集歌ていひける中に

雪ふれはたかくなりけるすゝか山いかなる玄もに鐘ひゝくらん　前中納言匡房卿

六帖題

千首中

承久二年卒爾百首無常

百首無常

卒都婆

新六四

たておきしつかのそとはも朽はてゝ殘る形見のあとはかもなし　衣笠内大臣

定めなきよの習ひこそ哀れなれひをへてまさる野へのそとはに　民部卿爲家

知るしらすこのよ盡ぬるはてをみよ野へのそとはの數に任せて　同

あさち原古きそとはに契りおかんとなりとならは哀れともみよ　寂蓮法師

金

萬十八

同

すめらきの御代榮えんとあつまなるみちのく山にこかね花さく　中納言家持卿

わかおほきみの、もろ人を、いさなひたまへ、よきことを、はしめたまひて、こかねかも、たのしくあらんと、おほゝしく、玄たなやますに、とりかなく、あつまのくにの、みちのくの、をたにある山に、こかねありと、まうしたまへれ、みこゝろを、さきそめしこかねの花はすへらきのひかりを開くはしめ也けり　殷富門院大輔

みちのくよりはじめて金たまゐらせたりける時長歌

昔みちのくより金はじめてまゐりけるを

寄レ金戀

建長三年毎日一首中夢　鎌倉右大臣

こかねほるみちのく山にたつたみの命も去らぬこひもするかな

五行御歌金　民部卿爲家

ふところにうけしこかねの末ひろみ榮え行へきひかりをそまつ

家集寄レ金戀　後京極攝政

こんよまてなかきたからとなるものは佛につくるこかね也けり

はんれいがちやうなんの心を　源仲正

我こひの鐘のみたけのかねならはみろくの代にもあはまし物を

六帖題ことは　四行上人

捨やらていのちをこふる人はみな千々の黄金をもてかへるなり

題不レ知　權僧正公朝

心せよいつはり人のことのはゝこかねをけすときくもおそろし

戀歌中　よみ人しらず

落十四　ま金ふくにふのまそほの色に出ていはなくのみそあか戀らくは

明玉　柴後法師

まかねふくにふのまそほの色にたにいくはや人の哀れともみん

寶

三種寶物の心を　神代よりみくさの寶つたはりてとよあしはらの去るしとそなる　從一位敎良

玉

久安百首　清輔朝臣

文永二年中務卿親王家三首歌合述懷　なゝわたの玉にもをらはぬく物を思ふこゝろをいかてとほさん　法印尊定

題不レ知續詞花　思ふことといのらはとほせ君にわれあふなくわたの玉津去まひめ　法印尊定

同　けふかさす神の忌垣のたまひかけむかしのことを尋ねてそくる　よみ人しらず

玉戀三　わかたまを君かこゝろに入かへて思ふとたにもいはせてしかな　忠峯

御集月を　新古雜中　水くきのあとにのこれる玉の聲いかゝもさむきあきのかせかな　龍宣朝臣

永久四年八月露居寺歌合　黄金をもいひけつくちの玉みかく月をはえこそゝ去らさりけれ　法性寺入道

露　いなつまのひかりにまかふ夕露をひかる玉ともおもひけるかな　源兼昌

家集戀歌中　たまをもちとりうつ山のいしよりもあひみることの難き君かな　源仲正

家集　石なこのたまのおちくる程なさにすくる月日はかはりやはする　四行上人

家集題不レ知　夜るひかる玉をつゝむとおもひしにあやなく袖の朽にけるかな　前中納言道房卿

長承三年顯輔卿歌合　こひわひて落るなみたのたまならは手箱の數もつきや去なまし　藤原雅親

六帖題　新六五　誰もけに手にもつ玉のみえねはやよをてらしてはある人もなし　民部卿爲家

同　同　たかやまのみねに旅桙われたてゝみかける玉は世のひとのため　光俊朝臣

同　いにしへのさつけし玉はわたつうみの去ほひ去ほみち心也けり　衣笠内大臣

百首御歌　みさこゐる荒磯なみによる玉のありとはみれと手にもかゝらす　同順德院御製

久安百首　水の面にうかへる玉のほともなく消るはよ所のものとやはみる　前參議教長卿

寶治二年百首寄レ玉戀　人心またあらいそのなみのたま緒にもぬかねはとりやはつさん　信實朝臣

六帖題玉を　新六五　和歌の浦に蜑のたもてる玉の緒の永くはすてぬ世にもあはなん　民部卿爲家

千五百番歌合　月みれはやかてたもとのぬるゝかなこゝろの玉や水をとるらん　正三位季能卿

家集　萬二こもりくの四　やまとにもまかりの玉と草なきのつるきは國のたからなりけり　中原師光朝臣

題不レ知　かくらくのはつせ少女か手に掛る玉は亂れていはすかもあらん　よみ人しらず

弘長元年百首不レ遂懇　民部卿爲家
誰ゆゑに思ふとは云るはつせめのてにまく玉のおのれみたれて

若臣御歌合　前中納言爲家
世にこゆる君かことはの玉はあれとひかりの底を云る人やなき

建長八年百首歌合　從二位行家卿
衣てにけふぬきかへる玉の緒のなかくもかなやおもふ子のため

當座百首中　藤原爲顯
たからとはたまをもいはす世のために君を治むるうつは物なり

家集中　實方朝臣
島の子か心ゆるさぬたまのはこあくれとあけぬ物にそありける

後法性寺入道關白家百首御歌　伊勢大輔
新拾懇三　人云れぬ思ひの玉のをたえなはなにしてあかぬかすをとらまし

行幸な　後京極攝政
此のりはうけてたもてる玉なれは永き世てらすたからなりけり

歴不レ知　藤原八束朝臣
萬八　松かけのきよきなきさにたましかは君來まさんか清きはまへに

同　よみ人しらず
萬七　わたの原云つく云ら玉風ふきてうみはあるともとらすはやまし

同　同
底清み云つくてふ玉を見まほしみちへにそつけしかつきする蜑

同　同
秋風はつきてなふきそわたのそこおきなる玉をてにまくまてに

同　人丸
萬六　あちむらのとほよるうみに舟うけて云ら玉とらん人に云らすな

同　よみ人しらず
萬七　蜑をとめ玉もとむらしおきつ浪かしこきうみにふなてせる見ゆ

同　同
萬七　伊勢のうみの蜑の云まつのあくや玉とりて後もか戀の云けらん

同　同
萬十三　いくしたてみわするゑまつる神主のうすの玉かけみれはともしも

同　坂上郎女
萬四　玉ぬしにたまはさつけてかつ〳〵に枕とわれはいさふたりねん

同　よみ人しらず
萬七　おほうみのみなそこてらすあわひ玉たつねてとらん風な吹こそ

同　足玉も手玉もゆらにおるはたを君かみきぬにぬいてきせんかも　同

同　萬代　わきもこかゆらはのたますちうちなひき戀しきかたによる心かな　好忠

家集月　ひかりをやさしかはすらんもろこしの玉つむ舟をてらす月かけ　清輔朝臣

釋教　埋れてくまなき玉はあるものをちりをはらはてねかふはかなき　同

家集寄レ玉戀懇　もろこしにありといふなる夜光るたま〳〵人をきゝわたりつゝ　權僧正公朝

六帖題　あらはるゝ時こそありけれみよまては石とてすきしその唐玉も　同

嘉應元年五月觀智法眼御房歌合　なみよする汀にすたくほたるこそうらにかへりし玉とみえける　寂昭法師

日吉社五首歌合　此歌判者清輔朝臣云みぎはのほたるをうらにかへるたまになし
たるこそゆゑありてきこゆれと云々

よゝをへて玉ゆゑなきし人たにも終にはかくと知られやはせぬ　源光行

此歌判者後成卿云左歌たまゆゑなきしとは韓子曰楚卞和得二
玉璞於荆山一獻レ之則武王玉人和曰石也、則其右足仞後、文王即
位又獻レ之玉人相曰石也、則左足仞後、成王即位和抱二其玉璞一
哭二楚山之下一、三日三夜淚盡繼レ之以レ血玉人治レ之得レ寶名曰二
和氏璧一云此心に申をかしく侍と云々

鏡

六帖題鏡　衣笠内大臣
新六五　いくたひも心をみかけますかゝみうらには影のうつるものかは
同　御かりせぬ野守のかゝみ時にあはてうつし心もなく〳〵そふる　民部卿爲家
同　みかきなす鏡のおもてあきらけみよものすかたの移らぬもなし　前中納言爲兼卿
同　新六五　いかはかりみかきいてけん秋のぶちの水ともすめる増かゝみ哉　正三位知家卿
同　同はて新六　捨やらぬかけはつかしきふるかゝみさもそ面はつれなかりける　信實朝臣
同　くもりなき水の鏡のとにかくに見まくかひある世とこそはきけ　光俊朝臣
題不レ知歌林良材　ひかり草かゝやく影やまかひけん白銅のかゝみくもらぬものを　よみ人しらず
千五百番歌合　さ根こしのさかきにかけし鏡にて君かときはのかけはみえけん　前中納言定家卿
嘉元元年竹園千首御歌山榊　かこ山のみねの榊葉くちせすはかゝみをかけしえたもかはらし　參議爲相卿
家集　くもりなき鏡の上にゐるちりを目にたてゝみる世とおもはゝや　四行上人
久安百首　いさなきのますみの鏡手にとりてうみ玄も玄るくてらす月よみ　實清朝臣
同　いかにしてよその思ひを玄らせまし野守のかゝみ君は見すとも　前參議親隆卿
伊豫國にて樂府歌百練鏡　五月雨にとつるまかねをみかきつゝてる日にみゆるます鏡かな　能因法師
仁安二年八月經成卿家歌合　てる月を波の上にてみるときそますみのかゝみ鑄るこゝちする　親部成仲
題不レ知歌林良材　此歌判者清輔朝臣云右百練鏡の心にや波のうへの月まことに一例秋潭水にことならす侍けんかしと云々
新古鑑五　あつまちの野守のかゝみ得てしかな思ひ思はすよそなからみん　よみ人しらず

永久元年十一月定通卿家歌合水　みかりするかりはの清水氷けりこれやのもりのかゝみなるらん　同
六百番歌合野行幸　古への野守のかゝみけふみれはみゆきをうつすこほりなりけり　寂蓮法師
家集寄レ鏡戀　戀せしといのる御宝のますかゝみうつりし影をいかてわすれん　民部卿爲家
題不レ知　萬十二　はふりこは祝ふみ室のますかゝみかけて玄のひつあふ人ことに　よみ人しらず
御集　ます鏡たゝめに君をみれはこそいのちにむかふわかこひやまめ　同
家集　ひとりねのねやにかけたる増鏡わか身のかけをともにたにみん　後九條内大臣
家集　六五　うちわひて獨ねたれはますかゝみとるとゆめみつ妹にあふかも　人丸
集流帶月如澄鏡ィ　こほりわけなかれにすめる月かけはたまくしけなる鏡とそみる　前中納言匡房卿
家集戀歌中　見えぬには影やはうつるます鏡うらなるつるのねをのみそなく　俊頼朝臣
御集十首御歌合中ィ　むかへおくならの社のますかゝみなく〳〵たのむ影はみゆらん　後鳥羽院御製
三百六十ィ首御歌中　山鳥のをたえのはしにかゝみかけきよきよわたるあきの月かけ　中務卿みこ
家集寄レ鏡戀　照すなる玻璃のかゝみにつみふかく忍ふる戀やかくれなからん　源中仲正
元日戀　千代までも影をならへてあひみんといはふ鏡のもちひさらめや　同
永久四年百首玉昭君　見えはやな見えはさりとも思ひ出つる鏡に身をもかへてける哉　俊頼朝臣

枕

題不レ知

千五百番歌合

六帖題

同

為枕古会誰與爲

千五百番歌合

老若五十首歌合、うきまくら

五月雨歌十五首歌中、たきまくら

六帖題、こもまくら

題不レ知、つけまくら

家集、こまくら

六百番歌合、草枕

文治六年五社百首

千五百番歌合、つけの枕

寛治二年百首、つけまくら

承久二年四季百首、たまの枕

萬十一 敗妙のまくらせし人こと〳〵へやそのまくらにはこけおひにけり

萬四 去き妙の枕を去けるなみたにそうきねを去けるこひの去けさに

吹かせを夢のうちにもいとふかな花にまくらをむすふよな〳〵

新六五 ますらをも枕を高みやすきよにひとりなけきはぬるよともなし

新六五 とちおける枕さうしのうへにこそむかしかたりの夢はみえけれ

とこのうへにふるき枕もくちはて〳〵かはらぬ夢そ遠さかりゆく

露去けきよもきかねやのひまとちてふるきまくらに秋風そふく

なみのみかとまやの下のうき枕もりきてつきもそてぬらしけり

五月雨に山田のあせのたきまくらかすをかさねて落るなりけり

新六二 いまもまたよとのにむすふごも枕たかにへ人の去わさなるらん

萬十一 夕されはゆかのへさらぬつけ枕いつしかなれるぬしまちかたし

ゆひし紐とかむ日とほみしきたへのわか小枕にこけおひにけり

はるかなりいく草枕むすひてかその去たひものとけんとすらん

かきすつるあまのもしほの草枕こゝろそとまるわかのうらかせ

いくとせになれにしとこのなりぬらんつけの枕もこけ生にけり

見しまゝにとこもはなれぬつけ枕されとも人はゆくへやはしる

あまのかるたまもの枕去もとちてわれからさゆるかたしきの袖

人丸

よみ人しらず

宜秋門院丹後

民部卿爲家

信實朝臣

前中納言定家卿

寂蓮法師

嘉陽門院越前

西行上人

正三位知家卿

人丸

同

慈鎮和尚

皇太后宮大夫俊成卿

同

正三位知家卿

従二位家隆卿

水無瀬殿御會海邊見レ螢、（もしほの枕）

六百番歌合、あらしの枕

洞院摂政家百首旅

風のたまくら

六帖題御歌

六百番歌合、はつほのまくら

千首歌、こけ枕

建保四年百首、あれ枕

家集冬歌中

貞永元年八月十五夜三首歌合、あしまくら

千五百番歌合、いそ枕

寛治二年百首、かちまくら

五十首歌ハイ 寛治二年百首袖まくら

千五百番歌合

五十首御歌花下送レ日、（袖のたまくら）

洞院摂政家百首遇不レ合恋、袖のまくら

雜御歌中

題不レ知、手枕

すまのうらやも去ほの枕とふほたるかりねの夢ちわふと告こせ

新後撰旅

ふるさとを出しにまさるなみたかなあらしの枕ゆめにわかれて

こけのうへのあらしのまくら山冴てわかるゝ月に露そこほるゝ

やとからにせみの羽衣あきやたつかせの手まくら月のさむしろ

花すゝきはつほの枕そのまゝにうらかるゝまてとはぬきみかな

よひ〳〵にかたしくいはのこけまくらいく秋風の袖になるらん

すかはらやふしみの里のあれまくらゆふかひもなき草の霜かれ

よをへてはうきねの床のあれまくらをしそなくなるいけの氷に

波かくる難波のさとのあしまくら月みんとてやむすひおきけん

月いらはわれもさてやはいそ枕たひねもちかし去かのうらなみ

あらいそのもくつのとこのかち枕袖よりほかのなみになれぬる

せきあへすなみたにぬるゝ袖枕かはかすなからいくよへぬらん

草の葉に去をれはてぬる袖まくら夢やはむすふよはのしらつゆ

花かけのたひねのあらしよころへて月そなれゆく袖のたまくら

朽にけりかはるちきりのすゑの松まつになみこす袖のたまくら

萬十四 あかつきのねさめのたひにねをそなく後の世おもふそての枕に

大君のみ言かしこみかなし妹かたまくらはなれよたちきぬるも

前中納言定家卿

同

後九條内大臣

前中納言定家

中務卿のみこ雅康

民部卿爲家

従二位家隆卿

同

藻壁門院少將

具親朝臣

前大納言忠良卿

衣笠内大臣

參議雅經卿

後鳥羽院御製

後成卿女

光明峰寺入道摂政

よみ人しらず

家集
百首御歌、かや枕
六帖題枕
家集旅歌、(かや枕)
石清水三首歌合旅宿風
久安百首、こすけの枕
嘉禎四年百首、いな枕
九十九首菊歌中、(あさての枕)
ほうの木まくら
いしの枕
家集つま枕
ゆふ枕(誤)

よもすがら物おもふ時の手枕はかひたるさこそ知られさりけれ　伊勢
手枕にいれしかたみとおもはすはなみたにくたす袖はおしまし　喜多院入道二品のみこ
新六五　おのつからいくよをふとも手枕のあかぬ契りにひちやくたさん　後寶朝臣
秋風にこゝろみたるゝ旅ねかなゆひとめられぬかやまくらして　源仲正
かや枕かりそめふしのさひしきによはのあらしそ友となりける　法印道清
はつ雁のこすけの枕つくりおけるかひこそなけれ妹しまさねは　清輔朝臣
夢とのみふしみのさとのいな枕むすひしのちのなさけたになし　民部卿爲家
あつまやの庭の白きく去き去のひあさてのまくら秋かせそふく　爲寶朝臣
六五　みちのくのくりこまやまのほうのきの枕はあれと君か手まくら　よみ人しらす
同　ひとりねの床にたされるなみたにはいしの枕もうきぬへらなり　同
百十　河水にかはつなくなり夕されはころもてさむみつまゝくらせん　人丸
かみつせにかはつなくなり夕されは河風さむしゆふまくらせん　中納言家持(誤)

毬

家集金葉
かへし金葉

いしたゝみありける物を君にまた去くものなしに思ひけるかな　皇太后宮大貳
名にしおはゝ身もひえぬへし石たゝみ片しく袖にころも重ねよ　後頼朝臣

たかひてあはぬ燃
六帖題
長承三年六月家歌合、たまのむしろ
家集寄レ蓮燃
千首歌、かやのこむしろ
千五百番歌合
寛元四年日吉社歌合、さむしろ
燃御歌中、あや蓮
家集水上月、(みなむしろ)
こけむしろ

此歌は皇后宮こうきでんにおはしましける比にしおもてのほそどのにてたちながら物申ける夜のふけ行まゝにくるしかりけれはつちにゐたりけるをみて物を去かせまゐらせばやと女いひければいしだゝみも侍つと申をきゝてよめると云々

蓮

たまゆかのおましのはしにはたふれて心はなきぬ君なけれとも　後頼朝臣
新六二　消のへにそのゐかりはす蓮うちおのれかつ〳〵去くかとそみる　信實朝臣
つゆのしくたまのむしろのとこなつにやとりやすらん有明の月　爲忠朝臣
あつまのゝ露のかりねやかや蓮みゆらんきえて去き去のふとは　前中納言定家卿
ひとよねぬあさてかりほす東屋のかやのこむしろ敗去のひつゝ　民部卿爲家
うちはらふをりもありけり床の浦のなみにあれたるよはのさ蓮　大納言通具卿
とへかしな身もいたつらにさしむしろひとへに戀る心なかさを　正三位知家卿
あや蓮をになるまてに戀わひぬ去たくちぬらしとふのすかこも　鎌倉右大臣
こかくれて浪のをり去く谷かはのみなむしろにも月そすみける　後頼
み吉野のあをねかみねのこけ蓮たれかおるらん(おりけん)たてぬきなしに　人丸

嘉應二年十月住吉社歌合　旅宿時雨（いなむしろ）

いなむしろ玄きつのうらの松風はもりくるをりそ時雨ともゑる　清輔朝臣

此歌判者俊成卿云左歌松の風に時雨をまがへてもりくるをりぞ時雨ともゑるといへる心はよろしくみゆるを此いな莚しきつの浦といはんためおけるなるべしとみゆるを此いなむしろのほんたいをおもふに玄きつのうらにことよかるへしとこそおぼえ侍らね河ならばをかしかるべしすみよしの松のしたにはいな莚しくべしともおぼえ侍らぬ也又いな莚ばかりにてたびの心あるべしともおぼえぬ如何と云々作者云いな莚とはたびといふ事にはあらぬにや近人の歌にもたびにかへすはいな莚とやといへり又ふるき式にみな玄るせるを見られざるにや河にこそあるべけれと侍るはみなむしろをおもひたがへ給へるにやと云々

簾

すきたりと許されすとも玉たれの一間にかけてみるよしもかな　よみ人しらず

萬十一　玉たれのこすの簾をゆきかてにいは寐られねときみはかよはす　同

胆不ノ知

こすげのすだれ

六帖題、しのすたれ

同いよすたれ

百首歌中

こもすたれ

六帖題、玉簾

同あしすたれ

同

新六二　へたつれとまはらにあめる玄の簾玄のふ人めのえこそかくれね　正三位知家卿

同　年をへて世に煤けたるいよすたれかけさけられて身をは捨てき　光俊朝臣

詞花題下　あふ事のまとほにあめるいよ簾いよ〳〵われをわひさするかな　惠慶法師

新六二　かやりひのけふりになるゝともすたれ物むつかしきわか心かな　俊頼朝臣

新六二　たえはてゝふりぬるみやの玉簾とにたにみえすなりにけるかな　衣笠内大臣

同　すくもたく難波少女かあしすたれよにすゝけたる我身なりけり　民部卿爲家

同　世中のはてはすゝけのあしすたれあしくかけけるわかの海かな　信實朝臣

櫛

御集櫛を古來歌合

懸御歌中、ゆつのまつぐし

六帖題御歌、つけのつまくし

同さしくし

同

とりくしも猶みたひこそおかれぬれ誰を待ともなき身なれとも　後一條入道關白

明玉　我妹子かゆつのつまくしさしもやはつれなき人を思ひわたらん　後鳥羽院御製

新六二　をとめこかつけのつまくしさしもなとうき世の中に心ひくらん　中務卿みこ

同　明暮てさし櫛もなくなりにけりたけふのせうのとるとせしまに　衣笠内大臣

同　君におきてみせんと思ひしさし櫛をあした夕へに誰かとりけん　民部卿爲家

家集物へゆく人にさしくしの箱にかきてつかはしける

さま〳〵に神をそいのるさしくしのさしはなるゝか心ほそさに　和泉式部

六帖題、つけのをくし　新六五　逢ことをとふやゆふけの占まさにつけの小櫛も去るしみせなん　信實朝臣
建長八年百首歌合、つけのさしくし　あふことをつけのさしくしさしもやはあたなるゆめに心引へき　後九條内大臣
とうの治部卿にくしをつかはすとて人にかはりて、玉のをくし
こゝろをはなにゝおきてか白露の玉のをくしをさして見すらん　少將内侍
新後拾遺傷行へなき玉のをくしをかたみにてなほそのかみを忘れわひぬる　前大納言忠良卿
なき人の櫛をみて
君にやるかたみの櫛はわかれちの神にまかせていのれとそ思ふ　能宣朝臣
かたみのくし
萬四　少女子か玉くしけなる玉櫛のめつらしけなく妹に逢はすあれは　大伴郎女
題不ゝ知、たまくし
萬三　志賀の蜑のめかり鹽やきいとまなみくしけの小櫛取もみなくに　石川少郎
をくし

髮

六帖題　新六五　末永くたのみしかとも玉かつらいかなるすちにかけはなれけん　民部卿爲家
同　新六五　年ふともよもたえはてしたまかつらむすふくみめのなかき契は　正三位知家卿
不ゝ逢戀の心を　花かつらあかものすそにくりためて花ふく妹をふれすはやまし　後頼朝臣
一字百首　あけにけりかさして出る山かつら人もみるへきひかりはかりに　前中納言定家卿
百首中歌　いかにして去らせ初さし小山田のはつほのかつら露かゝりとも　民部卿爲家
弘長三年毎日一首中　ふる雨のかさのかりてのわさほもてなせるかつらにかくる白玉　同

家集　萬八　我妹子かわさと作れる秋の田の早稻穂のかつら見れと厭かぬ鴨　中納言家持卿
六帖題　新六二　今はゝやあきちかゝらし小山田のわさほのかつら末なひくまて　衣笠内大臣

笄簪

新六五　磯菜つむ蜑少女等かはなかたみうらはのなみもかけやそふらん　衣笠内大臣
六帖題　新六五　おのつからかたみにもらぬ水はありて命の止るよやなかるらん　光俊朝臣
同　去つの女かかたみの底はむなしくておいぬわかなに日數をそ摘　源師光
正治二年百首

火取

六帖題　六五　たき物のこの去たけふりふすふともわれ獨をはさらすへしやは　よみ人しらず
同　同　この下にひとりやわひしたき物のなれも思ひにたえすとかきく　同
六帖題　新六五　たきものゝくゆる煙の下むせひわれひとりとや身をこかすらん　民部卿爲家
同　新六五　たきものゝ獨のおきのいきなから灰まきれてもよをすくすらん　正三位知家卿
同　新六四　諸人のとるやひとりのさきたては登るをとめのかこそ去るけれ　光俊朝臣

家集祝歌中
六帖題
同
同

挿頭

敷島やみわのひはらもよろつ代の君かかさしとをりやそめけん　從二位家隆卿
新六四
左り藤みきさくらとてとりなれしかさしの花もむかしなりけり　衣笠内大臣
同
うきことにゆき隱れてもみてしかな山の去けりにかさし〳〵て　正三位知家卿
同
ことに出て時の花をもかさしこしきさらき八月いつかわすれん　光俊朝臣

同題ぬさ
同
同
洞院攝政家百首旅
爲家卿家百首
文治六年五社百首
ぬさ

祓麻

新六四
いまひとめいもをみむろの神にこそぬさとりむけて祈わたらめ　衣笠内大臣
新六五
いまは我すてられなからあさぬさの君かてなれし時そこひしき　民部卿爲家
新六四
なみたつるぬさの追風はやけれはまかち去けぬきわたるふな人　光俊朝臣
このもりの紅葉の錦たてなからみちのたよりにぬさたてまつる　家長朝臣
けふの日はぬさよくまつれ船人のかとりのおきに風むかふなり　從二位家隆卿
あふさかの關もる神にたむけせしぬさの去るしは今宵なりけり　皇太后宮大夫俊成卿
萬十三
すへかみにぬさとりむけて我こえんゆき逢さかの山とわかるな　人丸

同
同
同
題不ㇾ知
從二筑紫一上ㇾ京時

喜多院入道二品親王家五十首旅
同五十首述懷
正治二年百首
旅歌中
六帖題ニあり
後鳥羽院御時御撰十首歌合
喜多院入道家五十首歌旅
百首歌旅懷

志折

六四　土佐日記　新千
わたつうみの千尋のそこに手向するぬさの追風やますふかなん　よみ人しらず
同
そめたちて祈れるぬさの思ひとはたむけのみちの神や去るらん　同
同　貫之集
たつぬさの我思ひをはたまほこのみちの奥ことに神もつけなん　同
萬十一
あはなくにゆふけをとふとぬさにきりわか衣手は又そつくへき　同
萬四
ちはやふる神の社にわかかけしぬさはたはらむ妹にあはなくに　土師宿禰水通

たひころもあかつき露に袖ぬれていく去をりしつ去らぬ山路に　野宮左大臣
花ゆ去になれし心やよしのやまそむかんみちの去をりなるへき　正三位季經卿
柴の戸のあとみゆはかり去をりせよ忘れぬ人のかりにもそとふ　前中納言定家卿
みわの山杉の去をりを去るしにてたつきも知ぬかけちをそゆく　俊頼朝臣
新六六
いく去をり去はのさ枝は分過てはてはおよはぬおくのみやまき　信實朝臣
去をりしてならひにけりな里人のかへる山路にいつるつきかけ　如願法師
夕くれはくもに去をりのみちたえて名をたにきかぬとりの一聲　寂蓮法師
かりにゆふ栞もゆきにうつもれてたつねそわふるもすの草くき　前中納言定家卿

標

百首歌　建保二年内大臣家百首　寄二名所一戀　従二位家隆卿
永き世のためしにひかん鈴鹿河こえていつまのわたらひの岩め
光業院入道五十首歌　寄レ墻述レ懷　同
樹拾遺一　かつらきや高間の山にさす岩めのよそにのみやは戀んと思ひし
さゝなみや山に岩めゆふ人はなしつりする蜑やゆきにいつらん
家集　従三位行能卿
今はけに神のいかきもこえぬへく思ひつゝくるやへの岩めなは
題不レ知　大納言雅忠卿
あさち原をのに岩めゆひ契るともいつはり人をいかゝたのまん
同　従二位家隆卿
萬七　淺茅原をのに岩めゆふ空ことにいかなりといひて君をまつらん
同　よみ人しらず
同　山たかみ夕日かくれぬあさち原のちみんために岩めゆはましを
萬十二　春日野にあさて岩めゆひたゝめやと我思ふ人はいやとほなかに
同　君に似る草と見しよりわか岩めし野やまのあさち人なかりそも
六五　萬十九
同　思ひあまりいともすへなみ玉たすき雲ゐる山にわれは岩めゆふ
萬七
志め　紀の國の室のはやわせひてすとも標をははへよもると知るかね
六五　萬三
同　足引のいはねを清みすかのねのひけはかたしと岩めのみそゆふ
同　萬三
題不レ知　山ぬしはけたしありとも我妹子か岩めむすはむを人とかめやも
萬二
遲れゐて戀つゝあらすはおひ岩かん道のくまわに岩めゆへ吾弃　中納言家持卿
大伴駿河丸
但馬皇女

夫木和歌抄卷第三十二

夫木和歌抄卷第三十三

雜部十五

題

衣　裳　袴　紐　帶
綾　錦　綿　絲　機
櫃　斤　車　筬　船付梶楫
綱　繩　緒　布　筏
櫃　綱　魚梁

衣

六帖題　新六五　山かけの櫻あさもておるころもはなのたもとの名をやたつらん　民部卿爲家

同　つかふとて著しや衣のさかさまに年はゆかなんいまになるやと　同

文永二年七月白河殿七百首　さかさまに夜半の衣をいそきつゝ君につかふる身をはやすめす　前大納言爲氏卿

六帖題　さかさまに著るや衣のとしもへぬつかふるみちに急くならひは　前中納言爲家卿

建長七年顯朝卿家千首中　擣衣聲悲　光俊朝臣

六帖題　柿本彼供百首　服なる女のもとへ月あかき夜のつき日　同

家集　衣をよめる歌に　同

久安百首　同百首名歌（すゝりはこ）　前中納言高定卿

或抄物中いろ〳〵衣　建保四年院號（はつかり衣）庚申久經、隆信朝臣四品して今日悅につかはしたる言葉、にひ衣　道信朝臣

題不知、（にひくわまゆのきぬ）　長歌、にしきの衣　祐舉

六帖題とき衣　民部卿爲家

すつる身の衣をなに〳〵たとへまし山路のこけのなき世なりせは　光俊朝臣

古來歌　ふく風にころうらむなりまくすもておれる衣をたれかうつらん　同

新六一　雪ふりてたけのよことのさむけきにゆるす衣のみへやきてまし　同

古來歌　あさかほにそめし衣をぬきしよりつねなき世とは思ひ去りにき　前中納言高定卿

新古哀傷　ほしあへぬ衣のやみにくらされて月ともいはすまとひぬるかな　道信朝臣

うすはたにおれる衣は夏きてもはるのかけつゝおしまれしかな　祐舉

龜鏡　釉中十五　かしは木のゆはた染むてふむらさきのあはむあはしは灰の心も　よみ人しらず

逢事はわかけよそひのきぬなれや年はゆけともさせる日もなし　藤原季通朝臣

人去れすすりはこのますみちゝ奥の忍ふのもちもなに〳〵かはせん　前參議親隆卿

古來歌　去つのめかつま木とりにとあさをきていろ〳〵衣袖まくりしつ　よみ人しらず

萬代　かくてしも世をやつくさん山とりのはつかり衣くちはてぬとも　後久我太政大臣

萬十四　むらさきのはつ去ほそめのにひ衣ほとなく色のあかれとそ思ふ　清輔朝臣

萬十六　つくはねのにひ桑さゆの絹はあれと君かみけ去の綾にきほしも　よみ人しらず

新六五　さにつらふ、色になつける、むらさきの、錦の衣、すみのえの、とほさとをの〳〵、まはきまて、にほらしききぬに　同

あさましや去つかいもとのとき衣ふみあらはれは人もこそしれ　民部卿爲家

家集
六帖題われ衣　　人丸
同をみころも　　信實朝臣
長久二年四月土　　同
堀河院御時百首　　よみ人しらず
家集　　仲實朝臣
同寄衣戀　　伊勢
同かり衣　　後頼朝臣
六帖題　　同
天仁二年四月師時卿家歌合寄衣戀　　正三位知家卿
同かたみの衣　　衣笠内大臣
題不知　　源顕國朝臣
詠仙人形（かは衣）　　寂念法師
六帖題　　よみ人しらず
同　　同
民部卿爲家
光俊朝臣
衣笠内大臣

萬十一　とき衣の思ひみたれてこふれともなと汝かゆゑととふ人もなし
新六五　世中にうきぬれ衣の機はりはのへも去たしめもせられやはせむ
同　梅かえの一しほすりのをみころも色こきよりも目にそたちける
年をへて日かけにみれとをみ衣するめことにもめつらしきかな
をとこ山かさしの花も春なれはをみのころもゝはゆるなりけり
八少女のをみのころものゆかしきはなれぬほとをは誰か忍はん
から衣ふちのまろ屋はあやにくに重ねもあへすぬきすてゝこし
かり衣ほやのあやすりうちはへてあけのゆひゝも結ひしてけり
新六五　かりころもわくる野原の去はすりにうつろふ露の色そみたるゝ
いろ〳〵の柳さくらのかりころもたちましろひし昔をそおもふ
我戀は去つのかりきぬをのか身にあはぬことをもなけきぬる哉
萬四　去たにきるかたみの衣あはぬ間にそてやくちなん涙ほしあへす
萬九　わかせこか形見の衣つまとひにわか身はなたしことゝはすとも
とこしへになつ冬ゆけやかはころもあふきはなたす山にすむ人
新六五　山ふかくおこなふみちのかは衣よものかせきもきてなれにけり
同　谷ふかくかはのころもに身をかへてうき世へたつる雪の山ひと
同　わさつのをかたみかけたるかは衣けふのみあれを待わたりけり

同題歌かは衣　　權僧正公朝
寶治二年百首寄戀衣　　正三位知家卿
安元元年四九月歌合月照山雪（かひのけ衣）　　太宰大貳藤家卿
久安百首　　前大納言隆季卿
天元元年正月十日中院入道右大臣家歌合戀（たまの衣）　　神祇伯顕仲卿
六帖題御歌たま衣　　中務卿のみこ
弘長元年百首袖つき衣　　前大納言爲氏卿
建保三年名所百首月の衣　　從三位行家卿
題不知（つるはみの衣）　　よみ人しらず
家集戀歌中、れすりの衣　　大納言經信卿
三百六十首中、れころも　　好忠
百首戀歌中（なれ衣）　　安嘉門院四條
建長三年七首歌合月恨戀、涙の衣、（うすそめ衣）　　民部卿爲家
題不知　　人丸
三百六十首中うすら衣　　好忠
摂衣歌（うつらの衣）　　從三位廣範卿

なにかいとふ霜夜きつねのかは衣けむつかしとてぬきも捨ぬに
なれ〳〵しとこはふるきのかは衣君きまさねはあたらさむけし
月かけにかひのけ衣さらすかとみれは去らねの雪にそありける
ふり積る白根の雪はいなをさのかひのけころもほすとみえけり
こひわふる涙の袖をあちきなくたまのころもとひとや見るらん
袖をたにひきもとゝめす玉ころもたま〳〵きてはいそく君かな
秋はきはうつりにけりなみや人の袖つきころもいろかはるまて
去ろたへの月の衣手かたしきてねぬ夜あまたのうちのはしひめ
つるはみの衣ときあらひまつち山むかしの人になほしかすなり
みかりするかきのねすりの衣手にみたれもとろに去めるわか戀
わきもこかさ夜のね衣かさねきてはたへを近みむつれてそぬる
てもたゆく去ほるなみたになれ衣なれぬ人ゆゑそてやくちなん
うき人になみたのころもひきかへしやとすとかたれ袖の月かけ
萬十二　くれなゐのうすそめ衣あさはかにあひみる人にこふるころかな
せみの羽のうすら衣になりゆくにとうちとけぬ山ほとゝきす
いまもなほ野となる里に誰すみて秋はうつらのころもうつらん

信成卿北野會にて旅浦風、(うらわけ衣)

夕あらしうらわけ衣ふきはらへもしほのけふりそてにたなひく

従二位家隆卿

六帖題のりの衣

ときおきし法の衣をわかものとあらそひてひくゆめもまさしや

權僧正公朝

三十首歌旅宿(雪の衣)

かへすとも雲のころもはうらもあらし一夜夢かせ峯のこからし

従二位家隆卿

百首歌殘雪、(やなきの衣)

松のうへに降しら雪も春たてはやなきのころもほすかとそみる

六條院宣旨

題不レ知(やしほの衣)

唐あゐのやしほの衣あさな〳〵なれはすれともましめつらしも

よみ人しらず

同

雲葉　檀古戀四

かくはかりありける物をくれなゐのやしほの衣なにゝそめけん

亭子院御製

家集ふる衣

萬十一

ふるころもうちすつるひとは秋風のたちくる時に物思ふものを

人丸

天仁三年四月師時卿家歌合寄レ衣戀、ふち衣

あひきするたてしのあまのふち衣なにのためにか袖はひつらん

仲實朝臣

貞應二年當座百首初戀

とはゝやなをほくむあまの藤衣おもひたつよりそてはぬるやと

民部卿爲家

寛元四年日吉社歌合、ふかそめ衣

けさはまたつゆをかこちて月くさのふかそめ衣かへるつらしな

正三位知家卿

六帖題御歌雜戀、〈またら衣〉

うき戀はまたら衣のとにかくにひといろにやはそてもぬれける

中務のみこ鎌倉

題不レ知

萬七　六五

今つくるまたら衣のおもかけにわれにおもほゆあまたきねとも

よみ人しらず

こけ衣

こけ衣ちふ串もよみふ串持てこのをかに菜つむす子かいへさけ

雄略天皇御製

千首歌

えそゝめぬ身をおく山のこけ衣おもへはやすき世とはいとも

民部卿爲家

中務卿親王家五十首歌合

山ふかき谷のかきほのこけころも露けきほともたれかきてみん

左兵衛督教定卿

法眼定忍にあひて侍し時大峯の物語せしを聞てよめる、(こけおり衣)

すゝかけの苔おりきぬのふる衣をてもこのもにきつゝなれけん

鎌倉右大臣

元永元年六月八條太政大臣家歌合夏月判者修理大夫氷の衣

夏のよのそらさへわたる月かけにこほりのころもきぬ人そなき

源仲正

題不レ知(あまころも)

ことしゆくにひをまもりかあさ衣かたのまよひは誰かとりみん

よみ人しらず

六帖題御歌あさ衣

逢ことはにひをまもりか肩にきる麻のころものまとほなれとや

中務卿のみこ

六帖題

賤の女かあつまからけのあさ衣ふたまたかしはさそわたるらん

信實朝臣

建長三秋十首歌合秋露　仁藏

ゆきあはぬかたのまよひに霜そおくにひをまもりかあさのさ衣

大納言通具卿

長歌

萬九

かつしかの、まゝのてこなか、あさきぬに、あをふすまきて、

蟲丸

六百番歌合寄レ雨戀

ひたさをゝ、もにはおりきて、

法橋顯昭

六帖題あわせ衣

をたとほる涙に袖もくちはてゝきるかひもなきあまころもかな

衣笠内大臣

題不レ知或抄中

新六五　少女子かあはせ衣のかくれつまうすきちきりにうらみわひつゝ

よみ人しらず

家集戀歌中

六三　須磨の浦に玉もかりほすあまころも袖みつをほのひる時やなき

從二位家隆卿

家集きころも

浪かつくあまのさ衣そてをなみうらみありともなにををほらん

好忠

久安百首きそのあさきぬ

秋きりのたちぬるすから心あてにいろなき風のきころもにしむ

前參議親隆卿

堀河院御時百首祝ゆはたの衣

さらしなやきその麻きぬ袖せはみ著たるかひなし胸しあはねは

修理大夫(顯季卿)

二所へまうでたりし下向に春雨のいたくふりけるに(みちゆき衣)

君かためゆはたのきぬをとりしてゝかみにそまつる萬代までに

鎌倉右大臣

春さめはいたくなふりそ旅人のみちゆきころもぬれもこそすれ

題不レ知（ふろあさ衣）　六五 拾雜上 萬七十　とにかくに人はいふともおりわかんわかはたものゝふろあさ衣
ふろたへころも　君にあはすひさしきときはおりきたるふろたへ衣あかつく迄に
百首歌　なれもきぬふろたへ衣かけほすは夏のかきねのあるしなりけり
正治二年百首御歌（ふほすり衣）　新千旅 いはねふむやまのたつきの夕されはふほすり衣うちふをれつゝ
建保五年歌合冬夕戀（ふのゝ衣）　くさまくらふの丶衣の夕ふくれいかなるいろをわきてそむらん
建保四年内裏百首歌合秋歌（ふもの衣）　ふろたへの霜のころもをうちわたすをちかた人や袖にふるらん
同五年歌合冬夜戀　消わふる霜のころもをかさねても見る夜まれなる夢のかよひち
光明峯寺入道攝政歌合行路見戀（ふのぶの衣）　ふられしなふのふの衣ゆきすりの人めはかりにみたれわふとは
家集戀歌中　うつりふし心の色にみたれつゝひとりふのふのころもへにけり
弘長元年百首（ふほなれころも）　すゝか川誰か名をたてゝいせの蜑のふほなれ衣ふすりてゝけり
六帖題　あまのすむまかきの嶋のなみの間にふほやき衣かけてほしつゝ
題不レ知（ふほやききぬ）　萬三十一 須磨の蜑のふほやききぬの藤衣ま遠にしあれはいまた著馴れす
毎日一首中　から衣世にさてや慰む方やあらんふほやき衣の間とほなりせは
寛喜元年女御入内御屏風（ひとしほ衣）　山あゐのひとしほころもいろそへてかさしに匂ふ花さくらかな
ひと花衣　つき草にそてすりません秋萩のひとはなころもいろふかくとも
永仁三年内裏御會（もしほの衣）　くみぬらすもしほのころもふきほさて風のみせたるうらの月影

人丸　同　殷富門院大輔　第三のみこ　權大納言忠信卿　光明峯寺入道攝政　後久我太政大臣　従二位家隆卿　同　民部卿爲家　正三位知家　よみ人しらず　民部卿爲家　常磐井入道太政大臣　後九條内大臣　爲實朝臣

すゝかけ衣　三百六十首中（すゝみやき衣）　衣笠内大臣
建仁元年十五首奇（すり衣）　衣戀　好忠
三百六十首中（すゝみ衣）　前中納言定家卿
みよしの丶苔路をつたふ山ふしのすゝかけころも露にぬれつゝ　好忠
多やまのすみやきころもなれぬとて人をは人のたのむものかは
みしかけよさてや山あゐのすり衣みそきかひなきみたらしの波
さくら波たちておりつる水のあやは夏の河原のすゝみころもそ

六帖題　衣笠内大臣
同　民部卿爲家
同　正三位知家卿
同　信實朝臣
久安百首　都芳門院安藝
家集人の裳き侍に　元輔
宰相もとすけの朝臣の女のもき侍りしに　同

裳

新六五 我妹子か紿裳のひきこし長き夜をかけてそ契るあかぬあまりに
同 引かけて思ひなよりそあから裳のあからさまにも人ふりぬへし
同 たをやめはうは裳そ結ふうす色のうすきを夏のふるしとや見ん
同 たかためもなかきちきりを我妹子か上裳のこしのためしにそ引
衣手そさえわたりけるあられちは我か裳のこしにきれはなり飛
後拾遺賀 住吉のうらのたまもを結かけてなきさのまつのかけをこそ見め
むすひあくる君か玉裳のひかり見はさやけき月のかけそ添らん

題不レ知
三百六十首中
六帖題おほたかゝり

まふくたか修行に出しかた袴われこそぬいしかそのかたはかま　行基菩薩
あやめふく賤のさはかまぬれ〳〵も時にあふとそ思ふへらなる　好忠
降雪におちくさとむる犬かひのかはのはかまはみるもおそろし　權僧正公朝

袋

家集

袖みれはうれしきものをつゝみたる袋かへしつかけてのみ見ん　和泉式部
此歌或所にきちやうのかたびらいれてまゐらせたればふく
ろかへさせ給へるに

紐

同

題不レ知（かたひも）
寄見物紐（あかひも）
題不レ知（ゆはたのひも）
後忠かもとにて紐十首歌

貫之集六五
あけたては松さす紐のいとよわみたえてあはすは猶やみたれん　貫之
萬十一六二同五
かきりなく人はいへともこは錦我かゝたびもゝ結ひあへなくに　よみ人しらず
忘れすやかさしの花の夕はへもあかひもかけしをみのすかたは　大納言經信卿
萬代撰後拾遺二
逢ことは片結ひするわきもこかゆはたのひもよいつかとくへき　基俊
心みよゆはたの紐をときそめてふかく玄みなんいろはかはらし　殷富門院大輔

堀河院御時百首（錦のひも）
同
寛元四年十禪師歌合（はなのひも）
六帖題
百首歌合

やとせまてにしきの紐をむすはせてけふそはしめて心とけぬる　權大納言公實卿
わくらはに錦のひものとけぬれはうらなき物はよはのさころも　前中納言匡房卿
色みゆる人のこゝろの花のひもはやもとくるや玄た裳なるらん　信實朝臣
新六五
あひかたき八卷の法の花のひもむすふちきりはむなしからしを　衣笠内大臣
いつか又とけてもあはむ我せこか紐さすはかり夜はなりにけり　光俊朝臣

帶

家集寄下帶（たおひ）
常陸守つれかれか下けるにつかはしける（かしまのおひ）

下おひのゆひ迷はせるゆきもこそみしかゝりける我すくせかな　後鞍朝臣
なそもかく分れそめけん常陸なるかしまの帶のうらめしのよや　同
常陸帶のみちのおくなる遠妻にゆきめくりてもあはんとそ思ふ　基俊
我こひは神にいのれるひたち帶のむすふかことを頼むはかりそ　第三のみこ
ひたち帶のとけよといのる宮めくりまつゆきあひの契かもせん　信實朝臣
年ひさにゆはたの帶をとりしてゝ神にそまつるいもにあはんと　修理大夫顯季卿
紫のこそめのおひのかたむすひとけてぬる夜のかきり玄らせみ　洞院攝政
冬くれはほそたにかはにこほりしてたまのおひするきひの中山　權大納言實家卿

御集　後法性寺入道關白家初逢戀（ゐでのまたおひ）
光明峯寺入道攝政家歌合
六首歌中行路見戀
六帖題
同題御歌帶
同
弘長百首初雁（くもの下おひ）
六帖題（かけおひ）
同（石のおひ）
題不ㇾ知（まつはたおひ）
家集寄ㇾ帶戀（菊の花おひ）

谷川のこほりのおひやむすふらんおとこそきかねきひのなか山　西園寺入道太政大臣
玉葉二
ときかへしゐての下おひゆきめくりあふせうれしき玉河のみつ　皇太后宮大夫俊成卿
露そおくゐての下おひさはかりもむすはぬのへの草のゆかりに　前中納言定家卿
新六五
いまさらにむすふ契もたのまれすひとに解けるゐてのしたおひ　民部卿爲家
するにたにめくりあはなん山城のゐての下おひちきりたえすは　中務卿のみこ
山しろのゐての下帶いくよへてむすふちきりのあはれ去るらん　よみ人しらず
山もとのくもの下おひなかき世にいくむすひして雁もきぬらん　後九條内大臣
新六五
をり去もあれえやは心をかけ帶の思ひはむねのへたてなるへし　信實朝臣
思ひきや我身去つめる石のおひのうはてに人をかけてみんとは　光俊朝臣
萬十一
いにしへの去つはた帶をむすひたれ誰といふとも君にはまさし　中納言家持卿
君やさはひら緒の下にほの見えてのこりゆかしきくの花おひ　源仲正

綾

奈良歌合
家集
六帖題（綾）

くれはとり二むら山をきてみれは目もあやにこそ月はすみけれ　後鳥羽朝臣
うらもなく今はひとへに我妹子かあひみそめけんくもとりの綾　修理大夫顯季卿
新六五
吹はらふ風にたゝよふくもとりのあやしやうきて世を過る身は　民部卿爲家

同
同
家集木のまの月おもしろきなみて
六帖題御歌（あや）

人の國に織てふはとりつたへても怪しやいかにこゝにしもきる　前中納言爲兼卿
つちにひく春のころもの一かさね千ゝのこかねの數にまされり　權僧正公朝
庭のおもそ夜るのあやとはなりにける木の下蔭の月のまに〳〵　龍因法師
江のみなみ春ゆくみつのいろふかくそめし衣手あやに著まほし　中務卿のみこ

題不ㇾ知
兵部卿元（良親）親王家歌合曉別
六帖題（にしき）
同
貞應三年一字百首歌
久安百首
家集ぬれにしき
こまにしき
旋頭歌題不ㇾ知

錦

をくるまのにしきのひもをとけん時君もわすれよ我もたのまし　よみ人しらず
春の夜のあかぬわかれのあかつきは千重に錦をたつにまされり　同
新六五
ふる里に又もかへらは後の世にちへのにしきを著てもなにせん　正三位知家卿
同
夢にみし夜のにしきのたゝまくにはかなや人のなとまとひけん　光俊朝臣
らむせいのにしきの色もいかならんかさへにほへる山さくら哉　民部卿爲家
花にしきをらては人の山さくらひとむらぬすめよものやまかせ　待賢門院安藝
紅葉する秋のやま人のぬれにしきほせとや雨のおしはれぬらん　源仲正
六五　萬十一
限なく人はいへともこまにしきわかゝたひもゝむすひあへなく　よみ人しらず
萬十一　六五
こま錦ひもときあけて夕とも去らぬいのちをこひつゝやあらん　同
同
高麗錦紐の片えそ床に落にける明日の夜來むと言せは取置て增　人丸

家集題寥落（とこにしき）　承安元年八月全玄法印歌合月

あさ霧のおきゐる庭のとこにしきたかしき玄まの山となてしこ　俊頼朝臣
から國のにしきにおれることの葉も見えぬはかりにすめる月影　玄有法師

此歌判者清輔朝臣云何事にか侍らん文にくらき者己子細にまど
へり若朗詠集に侍織錦機中己辨相思之字と云文の心にや凡は
本文を詠レ歌事は古人誡レ之昔歌にはいともみえず就中に歌合
にはよしなき事なりと云々

布

六帖題
布
家集遠村卯花
六帖題御歌
寄レ布總（たくぬの）
堀河院御時百首（けふのせは布）
文治六年五社百首（けふのほそ布）

新六五
さほ川にをりはへさらす手作はなみのかけたるいろかとそみる　衣笠内大臣
六五　をち方に白き花こそいなをさのかひのてなこのさらすてつくり　よみ人しらず
拾中十五
むかつをのはたのかこひの卯花や玄つのさらせるてつくりの布　源仲正
思へたゝけふのさぬのゝあさ衣きてもあひみぬむねのくるしさ　中務卿のみこ
玄かまなるいちめかもてるかちぬのゝ色ふかくのみ人を戀つゝ　同
いかなれは戀にむさるゝたくぬのゝなほさゆみなるひとの心そ　源仲正
石文のけふのせはぬのはつ〳〵にあひみてもなほあかぬけさ哉　仲實朝臣
錦木のちつかのかすよけふみちてけふの細ぬのむねやあふへき　皇太后宮大夫俊成卿

布六帖
卯花作レ墻
六帖（あさ布）
同（をみのあさ布）
同（おく布）
同（かたひら布）

後拾總一
錦木はたてながらこそ朽にけれけふのほそぬのむねあはしとや　よみ人しらず
うの花のかきねなりけり山かつの月にもさらすけふとみつるは　俊頼朝臣
世のすゑの習ときけとあさ布のうすくなりゆくたみもいとほし　權僧正公朝
新六五
こしにあふをみの麻布とちかけし宵あかつきもそのかみのもと　民部卿爲家
同
いまは世にあるもまれなるおく布のもちゐられしは昔なりけり　光俊朝臣
同
いかにせんかたひら布の片よりは身をかへすへき物とやはみる　正三位知家卿

綿

同
駿河なるふしのくわこのにひわたはたかねの雪の色に似るらし　民部卿爲家
同
玄きしまや大和にはあらぬ唐人の植てしわたのたねはたえにき　衣笠内大臣
同
秋のくるよはの衣のひとへわたひとへになほそかせは身に玄む　正三位知家卿
同
それも又子を思ふはゝの綿なれはいつかはあしの花もうらみし　光俊朝臣
同
哀れ我か身はくわこにそ成なましわたの端山のたすけさりせは　權僧正公朝
題不レ知
萬三
玄らぬひのつくしのわたは身につけていましばきねと暖にみゆ　沙彌滿誓

題不ㇾ知　　雲葉　浪かくる玉えの糸をくりかけて玄のにほすてふころもおるらし　　貫之
六帖題（玄けいと）　新六五　我かこひは玄つの玄け糸くりかねていかなるふしに思ひ立らん　　衣笠内大臣
承安五年三月百家卿家歌合逢不ㇾ逢戀　　よふたひにくれともなとや玄け糸のよるは心にまかせさるらん　　勝命法師
六帖題　　新六五　ひとすちに心もいはゝ（または新六）玄け糸のうきふしかちに世のなりしより　　民部卿爲家
戀歌中歌苑抄　　ことわりや絶れはこそはみたるらめふし玄けかりし賤の玄け糸　　鳴長明
日吉社歌合（あさのうみ糸）　　玄つはたの麻のうみ糸よるとてもたえにしのちはあはん物かは　　民部卿爲家
同　　新六五　玄つのめかすかくるいとに露そひて思ふにたかふ戀もするかな　　西行上人
六帖題（わくてのいと）　　われかくてわくての糸の幾めくりいのちなかくて年をへぬらん（も新六五）　　正三位知家卿
家集戀歌（てそめのいと）　　かうちめの手染の糸のみたれあひてよりあふへくもみえぬ君哉　　修理大夫顯季卿
洞院攝政家百首怨戀　　なか〳〵に絶もはてなて河内女の手染のいとのむすほゝれゆく　　從二位頼氏卿
同百首不ㇾ會戀（かた糸）　　よりかけてまたてにかけぬ玉の緒の片糸なからたえやはてなん　　前中納言定家卿

機

六帖題御歌　　かけておる賤か麻はたあさましやまとほにたにも君かきまさぬ　　中務卿みこ
同　　新六五　あさはたにおるてふ布のぬきを荒み夜はの嵐とえやはふせかん　　衣笠内大臣
同　　同　山道やみのゝひろきぬおるはたのおよひくるしき戀もするかな　　民部卿爲家

同　　同　玄くれつゝ秋のみけしをそめはたのおるてにあかすたつ嵐かな　　正三位知家卿
同　　同　山かつのあさてにかけておる機のおさ〳〵しきは我身なりけり　　光俊朝臣
戀歌中　　玄つかおる貢のあさのすちよわみくるしき戀の玄けきふしかな　　權中納言長方卿

斤（はかり）

六帖題　　新六五　たれもみな心にかけて思へかしかうのはかりのおもさかろさを　　衣笠内大臣
同　　民の戶に秋をさめするいなはかり年ある御代をかけて玄るらし　　正三位知家卿
同　　あしひきの山にかけたる水はかりかたさかりにもおつる瀧かな　　信實朝臣
同斤　　かけ稻のはかりの石はおもくともこゝしは民のうれへあらしな　　權僧正公朝
寛平御時后宮歌合　　新撰萬六五　かけつれは千々の黃金も數玄りぬなとわか戀のあふはかりなき　　よみ人玄らず

櫃

家集秋歌中　　錦をはいくのへこゆるからひつにをさめて秋は行にやあるらん　　四行上人
雜歌中　　をりひつに花のくた物つみてけりよしの丶人のみやたてにして　　同
此歌はみやたてと申けるはしたものとしたかくなりてさまか

へなどしてゆかりにつきてよしのにすみ侍ける思ひがけぬや
うなれどもくやうをのべんれうにくだ物をかうやの山へつか
はしたりけるに花と申くだ物侍けるをみてつかはしけると云
云

車

人こゝろうしともいはし昔よりくるまをくたくみちにたとへて　後鳥羽院御製
かぞふれは車をかくるよはひにて猶この世にそめくりきにける　俊頼朝臣
現存六
はま人のとまやのとこはあれぬらんのせてかへりし小車のあと　源有長朝臣
をしほ山めくりくるまの玉すたれゆくすゑかけて神やゑるらん　民部卿爲家
物見にといつるくるまに心かけてすけるすたれのおふひ忘るな　藤原爲顕
霜ふかくおくるわかれの小車にあやなくつらきうしのこゑかな　前中納言定家卿
玉葉
行なやむうしのあゆみにたつちりの風さへあつき夏のをくるま　同
山かつのあふさかこゆるをくるまに心やりたるあかつきのこゑ　寂蓮法師
新六二
老か世にまたゑちたてぬ小車のつたふちからのなきそかなしき　信實朝臣
新六二
小車の道のをのまつはやともせわたりもみえす日はくれにけり　同

家集恋歌中
堀河院御時百首
家集乍臥無實戀
三十六人歌合初逢戀
千首歌(淀車)
六帖題(すき車)
同(ちから車)
冬歌中(すみの車)、
正治二年百首(炭つみ車)
六帖題あふひ(かさり車)
法輪百首寄水述懷(すみ車)
家集寄車戀(ちから車)
深夜寄雲戀(ほのひ車)
承安三年七月右大臣家歌合水月(みつくるま)
御集
題居百首
柴車

前中納言匡房卿
仲實朝臣
俊頼朝臣
正三位經家卿
民部卿爲家
同
正三位知家卿
權僧正公朝
源師光
權僧正公朝
源仲正
同
同
同
中務卿のみこ
民部卿爲家
同

宵〳〵に錦のひもはとくれともなと小くるまのおとたにもせぬ
又いかにむすひかくらんをくるまのにしきの紐はとけにし物を　仲實朝臣
小車のわつかにとこはみつれともにしきの紐はとりてかへしつ　俊頼朝臣
小車のにしきのひもはとけにけり袁ちのはしかき百夜つもりて　正三位經家卿
ふかき夜の竹田河原のよとくるまあかつきかけて音きこゆなり　民部卿爲家
新六二
袁れなとかものみあれのすき車かさりてわたる世となりにけん　同
同
行なやみちから車もひゝくなりむそちあまりのなけきつむとて　正三位知家卿
雪をこそつみあまりつれ市の南かとのほかなるすみのくるまに　權僧正公朝
袁つのをかおのかわたらひいとなみて炭つみ車ゆきゝ袁るなり　源師光
年ことにみるもめつらしみあれいのあふひかけたるかさり車は　權僧正公朝
いさひきてこほりをきしるすみ車おもきうれへは我そまされる　源仲正
我を君あはぬ戀とやからくるまやまとことゐのかけすまひする　同
さよふかす忍ひ車のうはしろに袁もふるまてもとにたてれとや　同
はやきせにやとれる影をくみあけて月の輪かくる水くるまかな　同
なかめやるうちの河せの水くるまとことはにこそ君はかけゝれ　中務卿のみこ
せたえする袁らすにたてる水車よにめくるへきこゝちこそせね　民部卿爲家
柴車おとすみやまの谷ふかみくたりさかなる身にこそありけれ　同

正喜二年暮春歌　　権僧正公朝
久安百首　　花園左大臣家小大進
・家集柴（つみ車）　　前齋宮肥後
戀歌中　　前中納言匡房卿
　　同

かたそはの小さゝくたりの玄は車とゝめかねたる春のくれかな
あやふまてみねかりくたす柴車のりにこゝろやそみかくたなる
妻木こるをのゝ山へは霧こめて玄はつみくるまみちやまよへる
河こしの柴つみくるまいかゝするこほりのくさひ冬はたへまし
みきは行柴つみくるま氷うすみくたくはかりに物をこそおもへ

樋

百首御歌（かけひ）　　順德院御製
千首歌（竹のわれひ）　　民部卿爲家
家集（またひ）　　従二位家隆卿
題不知　　よみ人しらず
永久四年百首落葉　　源兼昌
家集（うちひ）　　四行上人
六帖題田かはのうちひ　　民部卿爲家
同いしひ　　衣笠内大臣
同かはらひ　　光俊朝臣

里とほくはやまの道やなりぬらんかけひのみつの音そまれなる
かけわたす竹のわれひにもる水のたえ〳〵にたにとふ人そなき
玄めはへて山田の玄たひくちぬらんさなへも玄つむ五月雨の比
六五　六三　萬十一
水鳥のかものすむ池の玄たひなくいふかしきみをけふ見つる哉
あふ坂のかけひのみつになかるゝはおとはの山の紅葉なりけり
傳へくるうちひをたえすまかすれは山田は水もおよはさりけり
新六三
水わくる田河のうちひうゑし田にかはくまなくてくつる袖かな
同
まかせつるいしひの水の下にのみすますこゝろは玄る人もなし
同
踏こゆる道にふせたるかはらひの朽とも知らしうつもるゝ身は

同いはておもふ　　信實朝臣
嘉祿百首（竹のかけひ）　　民部卿爲家
久安百首（かけひ）　　清輔朝臣
懸樋水曉になれは音まさるを聞て　　前大僧正行尊

同五
忍ふわけてうつほ柱にかくるひはもるてふ水のくちやなからん
山もとの竹のかけひをもる水のわりなき世をもすみわたるかな
はしり井のかけひの水のすゝしさにこえもやられすあふ坂の關
ねぬほとに夜や明方になりぬらんかけひのみつの音まさるなり

筏

字治網代あはする所に筏おろす　　祐舉
久安百首　　待賢門院安藝
御集　　後九條内大臣
柿本影供百首　　同
東宮女御賀御屏風歌よしの河くたす　　元眞
家集大井道邊に　　後鳥羽朝臣
雜歌中　　同
　　同

あしろ木にいさよふ浪のよるをみて暮ぬ日をさへ急くいかたし
となせ河こすいかたしのつなてなは心ほそきはとしのくれかな
蘆分のみなとのいかたさはりおほみ我思ふ道やこほりはつらん
我なけきやむ時もなくつみおけといつかいつみの柚のいかたし
吉野かはおろす筏のをりことにおもひもやますなみのこゝろを
萬代雜三
風ふかはとなせにおとすいかた士のあさのころもに錦おりかく
新拾雜中
いかたしにあふ柚川のみをつくしおしのけられてすくる比かな
大井かはみなわさかまくいはふちもたゝむ筏のすきかたのよや
えち河にいはこすさをのとりもあへす下す筏のいちはやのよや
夜とゝもにいかたをくたす河なれはかもめも人におも馴にけり
大井河行幸あそふかもめ人になれたり　　花山院御製

一條大相國家障風の給に名所歌　千五百番歌合

六帖題御歌

建長八年毎日一首中述懷

寶治二年百首柚山を

百首歌水鳥飼ノ筏

家集水筏を閉つといふことを

長歌

大井河うける紅葉のいかたしのさをの志つくを志くれとや思ふ　能宣朝臣

いかたしのやみをもわかぬみなれさをさすかに夏は月を待かな　後鳥羽院御製

新拾雜中

かめ山のみねたちこえてみわたせは清たき川をおとすいかたし　後嵯峨院御製

柚木ひく弓削のかはらの筏なはくたるをいそく世こそつらけれ　民部卿爲家

萬代

をちこちの志けき宮木をひきよせてそま山川にいかたくむなり　源俊平朝臣

程もなくたちぬるあとにかへるなみいかたにちかふあちの村鳥　寂蓮法師

氷わるいかたのさをのたゆけれはもちやこさましほつの山こえ　西行上人

萬十三

をのとりて、にふのそま山、きとりきて、いかたにつくり、に　よみ人しらす

かちぬき、いそきにきつゝ

萬一

いつみかはに、もてこゆる、まきのつまてを、もえたゝす、いか　同

たにつくり、のほすらん、

はつせ河に、いかたうけて、わかゆくかはの、かはくまの、や　同

そくまおちす、よろつたひ、

忠峯集延喜七年亭子御門西河に行幸せさせ給へる時和歌序云

序者忠峯

のりの御門ひしりの君秋の雪歌をきこしめさむと御舟共をならべること雲をあめるいかだのごとしさすべきさをの志げれる

題不ノ知

障風歌はまべに男女みわたりけり

延喜十三年三月三日亭子院歌合

同五年二月定久家歌合會後戀

家集舟を

永久四年百首内

家集海路戀

堀河院御時百首

旅宿水鳥一字抄

久安百首御歌

家集五十首曉望

百首歌旅五月雨

仁安二年二月歌林苑歌合

事なみをかくめるかきに志たりと云々

船

萬十

あをなみに袖さへぬれてこく舟のかちふる程にさ夜ふけなんか　中納言家持卿

萬代雜三

荒浪のかけくるきしのとほけれはかさまにけふそ船わたしする　兼盛

玉戀二　新拾戀二

あしの葉の散にし日より難波えにつなてなかくも戀わたるかな　よみ人不ノ知

撰古戀四

あふ事はいまはかたほになる舟の風まつほとはよるかたもなし　忠峯

六三　伊勢集

おひ風にかせはなほりて吹ぬともあまのいかりに止まりやせん　躬恒

なこかれよみすりも須磨に燒つみて赤穗もろての灘とほる日そ　後頼朝臣

戀しさをさし荷につめる舟なれはかちもみとろくこゝろせよ浪　同

月影によもの志まへをみわたせは志ほもみなひくふなてせよ君　基俊

日も暮ぬすたく螢をかゝりにてあかしのうらにふなとゝめせん　大藏卿行宗

新千別

おきつなみたちわたるとも音に聞なか井の浦にふなとゝめすな　崇德院御製

めもはるにおきかけさかり行船はかこのこゑこそまつは消けれ　喜多院入道二品のみこ

五月雨にはやをのつなは朽はてゝ志ほにひかるゝ舟そあやふき　小侍從

難波江にくたすたかせのこすさほにいくたひたちぬかもの村鳥　登蓮法師

弘長元年百首御歌
百二十八首題歌
最勝四天王院名所御障子
家集泊舟といふことを
千五百番歌合
千首歌
延喜二年毎日一首中
一字三十首
家集戀歌中
建長八年百首歌合

夕日さすやまもとほぐゆく舟のかたほいてたる秋のかはきり
こしかたも行さきもみぬ浪のうへに風をたのみにとはすふね哉
あはれとやかすむにつけて玄ほかまの浦こく舟のとほさかる聲
岸ちかくよせつなはへてさす舟にこゝそとまりと人むかふなり
高砂やこきのくふねもうちむれて風やすけなるなみのうへかな
いくてまてほなはつくらん風はやみほのうらはにすくる舟人
よせかへり浪うつ舟のとまやかたうきねは夢もえやはみえける
うきてのみ末の世渡る舟のうちのそのたのしみは盡る日もなし
たけをひくふねさしよする河むかひきりのみ秋の明ほのゝいろ
ゆめかさはなみのたゝちに行舟のたよりにつけしよはのひと聲
風そよくあしのうらまのよはの月かゝみをかけし舟かとそみる

此歌判者知家卿云かゝみをかけし舟の中と侍これは日本紀に侍事とかや本說たしかにて是非に不及侍うへに歌のすがた詞うつしく侍と云々

後九條内大臣
前中納言定家卿
後久我太政大臣
光俊朝臣
具親朝臣
民部卿爲家
同
同
前中納言定家卿
從二位家隆卿
光俊朝臣

千百五十四

厩不知まつら船
同
家集つくしにて歌よみけるにつくゝしに

萬七
さよ更てほりえこくなる松浦船かちおとたかしみをはやみかも
萬十二
松浦船みたれほりえのみをはやみかちとる間なく思ほゆるかも
雲かゝる浦にこきつくし舟いつくかけふのとまりなるらん

人丸
よみ人不知
元眞

光明峯寺入道攝政家歌百首三舟
鞆旅歌あけのそほふれ
厩不知もゝ舟
相模國歌あしがらをぶね
洞院攝政家百首御歌不知題
建長八年百首歌合
かもといふ舟
家集あまのはしふね
堀河院御時百首
同なだのを舟
同たかさごふね
寛元四年日吉社歌合からふね
いづてふね
弘安二年三嶋社百首沖津舟
文永十一年毎日一首中一葉のふね
後法性寺入道關白家百首遇不逢戀なにはふね

からさきやおほみや人のみふねまつみきはもとほく氷しにけり
萬三
たひにしてものこひしきに山本のあけのそほふね沖にこくみゆ
萬六
ますかゝみみぬめの浦はもゝ舟のすきて行へきはまならなくに
萬十四
百つ島あしからを舟あるき多みなこそかるらめこゝろはもえと
ゆくへなくわかなも湊たつ浪にあしからをふねよるへ玄らせよ
あさひらきひとりまちえて百つ島あしからを舟とまりいつなり
浦わよりはるかにみれは沖つとりかもといふ舟も浪にたゆたふ
秋風にまかせてせとをわたるかなすまのうらはのあまのはし舟
むやひするかまのほなはのたえはこそ蜑のはし船ゆらも忘れめ
續後撰雜上　堀百
つなて引なたの小船や入ぬらんなにはのたつのうらわたりする
夜もすからおなしこあらしおろすなり高砂船はいまそいつへき
わか戀ははかたをいつる唐船のゆたのたゆたにおひかせをまつ
いつて船おひかせはやくなりぬらしみほのうらわによする白浪
いつ方にこきはなるらんおきつ舟ほのかにとほく浪ちへたてゝ
ちりやすき一葉のふねのうらなかくさすか月日を又わたりつゝ
あし分のほとこそあらめ難波舟おきにいてゝもこきあはしとや

從二位家隆卿
高市黑人
田邊福丸
よみ人不知
光明峯寺入道攝政
前大納言顯朝卿
同
躬恒
俊頼朝臣
中納言國信卿
信實朝臣
隆源法師
順德院御製
安嘉門院四條
民部卿爲家
皇太后宮大夫俊成卿

たまもかりふね
あしの葉も霜かれにけり難波かたたまもかりふね行かよふまて　寂念法師

三十首御歌江上暮春たまものをふね
にこり江のたまものを舟こきかへりうらみてくるゝ春の名かな　後鳥羽院御製

かすみのをふね
新後拾春下
ほりえこくかすみのをふね行なみや（やみイ）おなし春をもしたふ比かな　〃前中納言定家卿

六帖山とまりふね
新六三
みなとえにかちふりたつるとまり舟流るゝまてに潮はみちきぬ　衣笠内大臣

ともふね
新六三
友船はつくしもいせもこき合のおなしとまりにうきねをそする　信実朝臣

建保三年名所百首御歌あけのそほふね
秋ふかき八十宇治川のはやき瀬に紅葉そくたすあけのそほふね　順徳院御製

障子絵に海つらに人なかめてゐたりまへより舟行所
かつしかのまゝの浦わの沖津すにあけのそほ船からろおすなり　俊頼朝臣

家集しはふね
柴をふねまほにかけなせゆふしてゝにしの宮人かさまつりしつ　同

おいをなげきてわれふね
われ船の世を海わたるしるしにはおもての浪におほゝれにけり　同

家集海のほとりにてあからふね
たれ人のつとまちかてらこき出てあから（かイ）をふねの月にたゆたふ　殷富門院大輔

永久四年百首舟
おそろしやともろはしりそ浪間行あからを船のあからめなせそ　神祇伯顕仲卿

同こし舟
雲津よりすゝめくりするこし舟の沖かけさかるほの〳〵にみゆ　仲実朝臣

家集皆ゝ舟戀えぞふね
わか戀はあしかをねらふえそ舟のよりみよらすみなみ間をそ待　源仲正

片戀河舟
萬代
せにかけてさしおとされぬ河舟のかた思ひこそくるしかりけれ　同

戀歌中
あふ事をひさしくよとの川舟にとりこすつなのかゝらすもかな　殷富門院大輔

三百六十首中のぼり舟
のほり舟こち吹風をすくすとてよをうしまとにとまりてそふる　好忠

亭子院御時長恨歌御屏風に、くものふね
しるへするくもの船たになかりせは世をうみ中を誰かとはまし　伊勢

家集あまのをふね
たなゝしの蜑の小船のあらいそにあなたと〳〵し我ひとりゆく　同

五百首御歌
六三
とじふともしらしな心あま小船かまのほなはのたえすこふかも　後鳥羽院御製

題不ㇾ知あまふね
玉戀三
蜑船のへにくりつめるあみのめはつらき心のかすにそありける　よみ人しらず

家集思ふ事侍ける比
こち風になひきもはてぬあま舟の身を恨みつゝこかれてそふる　女御徽子女王

四國受領歌合あまのつり舟
たなゝしの蜑のつりふね浪間よりと渡るほとそはるけかりける　よみ人しらず

しらでくやしむ戀
わか戀はみしまかおきにこき出てなころわつらふあまのつり舟　西行上人

家集雑歌中くれ舟
くれ舟よあさつまわたりけさなせそいふきの嶽に雪しまくめり　同

あさづまふね
おほつかないふき颪のかさゝきにあさつま舟のあひやしぬらん　同

日吉社にたてまつりける五十首初春歌
にほの海やあさつま舟も出にけりつなくこほりを風やとくらん　宗長朝臣

十題三十首旅
となかよりはやこきかへせ山田舟ひらのたかねに雲かゝりたり　権僧正公朝

歌林苑にて海邊の霧をともの すゝ舟
かこのおす音にしるしも霧の間にゆらのとわたるとものすゝ舟　盛方朝臣

正治二年百首御歌あはぢ舟
淡路ふねきりかくれこくさほ歌の聲はかりこそせとわたりけれ　喜多院入道二品のみこ

堀河院御時鳥羽にて花見の行幸に池上花、花のみふね
浪たてるさくらのみかは池にさへ花のみふねをうかへてそみる　俊頼朝臣

同院御時高陽院に行幸時御舟に參て
けにけさは花のみふねをよそひても君か千年をつめるなりけり　同

家集しばふね
風ふけはゆらのと渡るしは舟のしはしこかれてよをすくさはや　同

太宰帥にて下たるにふなゐひおきてもたひといふとまりにて、ころ舟
ころ船にゐふ人ありと聞つるはもたひにとまるけにやあるらん　太宰大貳高遠卿

家集せたの橋の本にて歌よみけるまへにいをとる舟ありいさりをぶれ
浪のよるいさり小船のみえつるはいをねられねはみゆる也けり　同

寶治二年百首いさり舟
久安百首あしはやをぶれ　うなはらやなきたる蜑のいさり舟沖のすさきにこきまはるみゆ　衣笠内大臣

釋教歌中のりのはしふれ　かきくもり雨はふりきぬみつをさかあしはや小船苫やふくらん　前大納言隆季卿

弘長元年百首釋教法のはや舟　目玉釋教　ひたる龜の浮木に會なれやたま〳〵えたるのりのはしふね　高辨上人

ちかひのふれ　新續古釋教　西の海みちひく玄ほにまかせつゝわれとはさゝぬのりのはや舟　後九條内大臣

久安百首たかせぶれ　わたしもりいかひのふねは心せよのりかたふくる人もこそあれ　信實朝臣

同　たかせ舟かちふりたてよ大井川きしのもみちをいかゝすくへき　季通朝臣

寛喜元女御入内御屏風紅葉のみふれ　新千秋下　大井川もみちのみふねさしはへてふるきためしにかへる秋かな　崇德院御製

永承二年歌合紅葉のふれ　心せよもみちのふねのふなさしてあらしの山のわたりわたらは　從二位家隆卿

新羅社歌合紅葉　さゝなみに紅葉の舟をよするかな玄かのうらわは秋のとまりか　大納言經信卿

同　みつもせに紅葉の舟をむやひつゝにしきほにかけて風そこき行　泰覺法師

此歌判者清輔朝臣云右歌もみちの舟と云て又にしきをほにあぐ　權律師敬香

と侍如何たゝ舟に紅葉をちりかゝらせてにしきをほにあぐと

ぞいふべき物ひとつをふたつになしたる心えずや抑木のはを
舟にたとふる事はふるくもみなよめり山緒あるべし木の葉の
水にうきたるをみて智發して舟をばつくりいでたる事と申め
り又仙人の以二木葉一爲レ船といふ事本文侍めりされば古今集
に興風歌にや「白浪に秋の木の葉のうかへるをあまのなかせ
る舟かとそみる」とよめりかやうにはよめれどおさへて紅葉
の舟といはん事證歌なくてはいかゝとぞおぼゆる花のゆきに
にする事はむかしよりあることなれど近頃の歌合仲實朝臣の
花の玄ら雲とよめるをば花の玄ら雲といふものがさだまりあ
るやうなり歌合には猶いかゝとぞ難て侍めるこれおなじ事な
りと云々

光榮院入道二品親王家五十首河霧をちかた舟
夕されはをちかた舟やまよふらんきりになりゆくさほの河なみ　從三位範宗卿
石清水歌合河上霧わたりふれ　わたり舟それとも見えすあさほらけみつのをかけてかすむ河浪　從二位家隆卿
寛元三年結縁經百首　紀伊の海のゆらのとあるく渡り舟我身さきよりいてかひもなし　民部卿爲家
寛元二年百首渡月わたしなふれ　猶玄はしよとの河せの月をみんわたしをふねはこきなつけそも　信實朝臣
光明峯寺入道攝政家御會江舟月あしのなぶれ　うら風のさそふも玄らす難波江のあしのをふねに月をみるかな　從二位家隆卿

題不レ知あしわけをぶね　　よみ人しらず
同かたかけをぶね　　同
六帖題ちぼ船　　衣笠内大臣
同くちふね　　民部卿爲家
寛應二年十月法性寺殿歌合水鳥を　　三條右大臣實
家集夏歌中まこもかりふね　　四行上人

萬十二
みなと入のあしわけをふねさはりおほみ我思ふ君にあはぬ頃哉
六三
潮瀬こくかたかけを舟流るともいたくなわひそ梶とりにゆかん
新六三
あはち嶋かさまにわたる塩ふぬのからろの音そおきにきこゆる
同
ともすれはとまりに去つむくち舟のこきてし方そさすか戀しき
をふねこくともろにも猶たかしとやつなてをくゝるかもの村鳥
五月雨もをやむ晴間のなからめやみつのかさほせまこもかり舟

題不レ知　　民部卿爲家
文應元年七社百首海路　　皇太后宮大夫俊成卿
述懷百首　　光俊朝臣
六帖題　　後鳥羽院御製
承久後百首御歌　　後九條内大臣
御集　　信實朝臣
寶治二年百首歌泊　　民部卿爲家
山階入道左大臣家百首絶總

梶楫

萬十二
やかちかけ島かくれゆく我妹子かとまりとふらん袖見えすとも
あは去まやと渡る舟のからかちのからき浮世をしをれてそふる
磯かくれまかち去けぬきこく舟のはやくうき世をはなれにし哉
新六四
なみたてるぬさの追風はやけれはまかち去けぬきわたる舟ひと
風はやみおきこく舟のかち間にもわするゝ間なき世々の故郷
いそかてやかちひきをりて舟人もあすになるとの潮やまつらん
うきねして枕とたのむ船はたにおきならへたるかちもありけり
契こそゆくへも去らねゆらの戸やわたるかち緒の又もむすはて

碇

六帖題御歌　　中務卿みこ
同いかり　　衣笠内大臣
同　　民部卿爲家
同　　信實朝臣
同　　光俊朝臣

今日の日はいかりそへよと舟人のつしまのわたり風もこそたて
新六三
おひ風にはしるをふねのいかりなはくりかへしても昔をそ思ふ
同
戀にのみこかるゝ舟のいかりなは思ひしつめはくるしかりけり
同
沖つ舟おろすいかりのつなつよみあやふからぬも猶そあやふき
こき出るとまりの舟のいかりなはへにくりかくる聲きこゆなり

堀河院御時百首　　俊頼朝臣
題不レ知　　人丸
上野國歌よせつな　　よみ人不レ知
ちびきのつな　　隆祐朝臣
百首御歌述懷うき世のつな　　慈鎮和尚
賀茂社百首御歌こゝろのつな　　同

綱

萬十一
難波かたつなてになひくあしのほのうらやましくも立なほる哉
萬十四
ひとことは去はし我妹子つなて引うみよりましてふかくしそ思
たこの嶺によせ綱延てよすれ共あにくやしつのそのかほよきに
みやき引ちひきのつなもよわるらしそま川とほき山のいはねに
朝夕に袖にかくしてむすふてのうき世のつなをとかさらめやは
おもひ去る心のつなをよもに引て老のねさめのみたれゆくかな

家集述懷百首中おもひのつな
建保四年百首まさきのつな
洞院摂政家百首恋
百首御歌
六帖題あさのふろづな
れりそのつな

たちかたき思ひの綱もつなかれてひきかへさるゝ事そかなしき　清輔朝臣
人心なにゝつなかんいろかはるまさきのつなのよるもたまらす　従二位家隆卿
新壊古恋一
恋衣いろにはいてし去もといふまさきのつなのよるの去くれに　光明峯寺入道摂政
夕くれのまさきのつなてはるかけて月のみふねや外山いつらん　後九條内大臣
新六三
住吉のあまのふるつなひく人もいまはなきさにくちぬへきかな　民部卿爲家
みやき引ねりその綱のもゝからみよわるけしきもみえぬ君かな　道因法師

縄

述懷中に
百首御歌ひたのかけなは
正治二年百首あまのかくなは
寛治二年百首杣山うつすみなは
寄ゝ垣述懷、やへのちめなは
千五百番歌合
六帖題後嵯峨法師の許にて人に十首よみける頃に

木をきさみなはを結ひし古へも世をうきものとひとやいひけん　權僧正公朝
秋田もるひたのかけなはうちはへてたゆます人をこふる比かな　衣笠内大臣
伊勢の海のなみのよる〳〵人まつとくるしき物を蜑のかくなは　宜秋門院丹後
新拾俳諧
つらきかな山のそま木のわれなからうつすみなはにひかぬ心は　民部卿爲家
今はけに神のいかきもこえぬへく思ひつゝくるやへの去めなは　大納言雅忠卿
宮ゐせし千尋たくなは君かためなかきちきりをむすひそめけん　野宮左大臣
ちはやふるちひろたく縄もゝむすひうちとけてみよなかき心を　殿宮門院大輔

六帖題
建長八年百首歌合ちひろのなは
六帖題たくなは

うなはらやそこの心も去らるやとちひろたく縄うちかへてみん　正三位知家卿
新六三
えそ去らぬ千尋のなはを去つめてもおよはぬうみのそこの心を　後九條内大臣
新六三
蜑のすむ里にほすてふたくなはの永きうらみはけふそくるしき　民部卿爲家

緒

百首歌述懷うれへのを
こゝろのを
浄覚上人につかはしける
六帖題つりのたなを
三百首御歌
家集

四そちまてうれへのをにはつなかれぬさて我ゆるせ住よしの神　慈鎮和尚
よそならぬ心のをこそみしかけれなつの夜とのみ思ひけるかな　同
萬代
むすほるゝ心のをこそかなしけれ思ひしとけはとけやすき身を　同
新六二
岸高みつりのたなをのうちはへてなかき日あかすくるゝ空かな　正三位知家卿
壊古雑中
かちをたえこと浦風にゆく舟のうき世のなみにこかれてそふる　順徳院御製
すまの蜑の浦こく舟の梶をたえよるへなき身そかなしかりけり　小町

網

建保三年名所百首
貞永元年 恋十首歌寄ゝ網
新後拾恋一
あつさ弓いそまのうらに引あみの目にかけなからあはぬ君かな　前中納言定家卿
人心あたなる名のみたつ去きのあみのゆくてになとかゝるらん　同

爲家卿家百首　　從二位家隆卿

六帖題　　衣笠内大臣

蜑のたくなはの浦わにうちはへてひくてふあみによらぬ戀かな　新六三

いせしまや蜑のたはれにすくあみのめならふ人も猶そこひしき　現存六

同　　民部卿爲家

すまの蜑のあみの引網くりかへしうちはへなとて戀しかるらん

住吉社百首　　慈鎮和尚

とにかくにむかしをすくふ大あみに哀れをかけよすみよしの神

障子の給に住吉社にまうづる人ありあみひく所

すみよしの神の久しきためしにて引あみの目のかず哀らぬまに　萬十一

住吉の津守あひきのうけのをのうかひか行んこひつゝあらすは　六三　新勅撰一

いとへとも猶すみのえの濱にほすあみのめ哀けき戀もするかな　萬六

題不レ知　　祭主輔親

同　　よみ人しらず

ちぬわより雨そ降くる哀はつの蜑網の繩ほせりぬれはたむかも

同　　同

同　　同

あひきする哀きつのうらの蜑人はかすみをわけて聲かはすなり

御集霞隔レ浦　　後德大寺左大臣

あみはゆるあしやの沖のあさ霞よをこめてこそたなひきにけれ

春御歌中霞　　同

引哀まのあみのうけ舟波間よりかうてふさすとゆふしてゝみゆ　萬三

永久四年百首泉郎　　後鳥羽朝臣

大宮のうちまてきこゆあひきすとあことゝのふるあまのよひ聲

題不レ知　　よみ人しらず

みほの浦の引網のつなたくれともなかきは春のひとひなりけり

三百六十首中　　好忠

近江國にをかさきにてあみひくをみて　　

みほの海に網引たみのてまもなく立ゐにつけてみやここひしも

寛弘元年女御入内御屏風　　紫式部

海邊引網　　

おくあみのかすみをむすふ春風になみのかさしの花そさきそふ

人にさはる戀　　前中納言定家卿

逢ことはまれかのうらにあさりする網もさのみや人めもるへき

久安百首　　僧正行意

同　　洞院攝政

鳴海潟潮干におけるあみなれやめにはかゝりてあはぬこひする

よさのうみにひくてふあみのつなてなはくるをは人の心とも哉

六帖題御砂　　正三位知宗卿

浦人のあみのひきつなうちはへてうけくにものゝ悲しきはなそ　新六三

同題　　中務卿のみこ

いまは又日もゆふかけておく網のとほくないてそ蜑のうけふね　同

同　　信實朝臣

春はなほなかき日くらしひくあみの心ゆるへぬなこのうらひと

仁安三年無動寺歌合　　隆實

人哀れぬ身のみおもへはうしまとに引ほすあみのいはて過ぬる

魚梁

建保三年名所百首　　大炊御門右大臣

いたつらにあはぬうき身の名とり河やなせの波を袖にかけつゝ　現存六

やな　　前參議親隆卿

はや河にやなうちわたすあた人のこゝろのせにそ思ひわひぬる　新六二

六帖題　　中務卿のみこ

せきかくる田上河ののほりやなさかまくみつのおちそわつらふ　同

みなせ河ゆくせの水のくたりやな春のひよりにはやさしてけり　正三位知宗卿

家集八洲河秋　　民部卿爲家

朝ほらけやなせの浪の音はしてわたりやいつこやすのかはきり　同

六帖題御歌やな　　中務卿みこ

いとふそよ世にふる河の下り梁かゝるみくつはせきなとゝめそ

同　　前中納言爲家卿

雨はるゝなこりの河のくたりやなにこれる水にうをそおちそふ　新六三

同　　信實朝臣

はや川のせあさにかゝる片岸にやなうつけたのたよりにそかる

六帖題御歌やな　たむくへき神のにへそと事よせておまへの河原やなうちてけり　光俊朝臣
建長八年百首歌(合)　五月雨にやすのはやせののほりやな河なみたかし落や玄ぬらん　従二位行家卿
三百六十首中　安河のはやせにさせるのほり梁けふの日よりにいくらつもれり　好忠

夫木和歌抄卷第三十三終

夫木和歌抄卷第三十四

雜部十六

題　神祇付社付宮　釋教付寺

神祇

久安百首神祇歌中　あらかみのあらはれいてしむかしより神をは君とあふき初てき　左京大夫顕輔卿
同　飛くたるなゝしの雉をいさりせは發のはゝやもなけさらましを　同
同　いにしへも祭れるをりはけころもにあけの衣をきるといひけり　前大納言隆季卿
社頭秋風　ふりにけるあけのたまかき神さひてやふれるみすに秋風そふく　鎌倉右大臣
御集神祇　八百萬よもの神たちあつまれりたかまのはらにきゝたかくして　同
神祇歌　石間君か代ににこりもあらしたかくらや蔭にすめるをしほ井のみつ　度會仲房
長歌祭神　萬三あまのはらより、むまれたる、神のみことを、おく山の、さか　坂上郎女
　きの枝に、さらかつけ、ゆふはりつけて、

家集神祇歌

和らくる光ときくもあとたるゝところをいふはわかやまとくに　民部卿爲家

同

新拾神祇　みちのへの杉の下葉に引そめはみわすゑまつる玄るしなるらし　同

文永十一年毎日一首歌

神垣のいはほの上のかりふしにまろねのあしをあらふみやつこ　同

久安百首神祇歌

契たにたかへさりせはわたつうみのそこにも人やゆき通はまし　實清朝臣

家集

たよせとは思はさらなんわたつ海のいにのいのる心はかみそ玄るらん　惠慶法師

玄ら雲に色みえまかふみてくらをたよせにうけよかみのこの神　同

此歌は隙子の繪に須磨の浦のかたかきたるに神のやしろにふねよりゆく浪のたかければたよせにみてぐらたてまつるところをよめると云々

十題百首

たのもしなあかつきちきる月影のかねてすむらんみよしのゝ嶽　前中納言定家卿

三社歌に

君か代はよさみのもりのとことはに松と杉とやちたひさかえん　同

永久四年百首榊

さかき葉を神の御室とあかむれはゆふつけ鳥のねくらなりけり　俊頼朝臣

御集寄草戀

かけてこふる神のみむろの玉かつらたえぬ契りをなほや恨みん　後鳥羽院御製

千五百番歌合

榊葉やいつもみとりの玄めのうちにはとふく秋は風そ身に玄むかめて　土御門内大臣

三百六十首御歌中

神こそは野をも山をもつくりおけ人にまことのみちをふめとて　後九條内大臣

家集

神まつるやとにけふさす榊葉のときはにかへるやへのゆふして　祝部成茂

建長七年顯朝卿家千首

われはかりけたぬ物がはふしのねの神たにもゆる思ひとそきく　從二位行家卿

久安百首

我戀をなとかは神のにくみしていのるこゝろのぬさもかひなき　光俊朝臣

春神祇祈年祭

神さひていはへるほこのみゆるかなこはよも山の人のまもりか　前大納言隆季卿

正嘉五年三嶋社十首歌社頭説

あらたまのとしをいのると引駒のあともひさしきさらきの空　前中納言定家

永仁元年愛宕百首

よろつ代もひさしくうけよ神かきや年にかはらぬ君かいもゐを　參議爲相

君か代をまもるとならはよろつ神わきて久しきためしはしめよ　同

玉神祇

かしこまる玄てになみたのかゝるかな又いつかはと思ふ哀れに　四行上人

この歌はそのかみよりなれけるならひに世をのがれて後も賀茂の社に參りけるにとしたかくなりて四國の方へ修行しけるに又まゐらぬ事もやとて仁安三年十月十日の夜まゐりて幣まゐらすとてたなをの社の許にて玄づかに法施奉りける程に木の間の月のほの〳〵にて常よりも神さび哀に覺侍ければと云云

三嶋社に奉りける神樂和歌篠

とも岡のさゝの葉玄たり雪ふれは腰にさしたるかたなひきなる　權僧正公朝

湯田

みなと田のかりたの面に雪ふれは八にかきらてゐるくらゐかな　同

螺蛳

み園生の木の根堀はむきり〳〵す霜のふりはのねたさうれたき　同

弘安元年百首(いさなき)

あまつたふ月日こたへていさなきの命のさためよはあきらけし　後九條内大臣

久安百首(いさなみ)

いさなみのますみの鏡てにとりてうみしも玄るくてらす月よみ　實清朝臣

建仁元年十首歌合

家集神祇歌

久治六年五社百首（伊勢）

百首御歌

太神宮にて

家集神祇歌

同

光明峯寺入道摂政家百首

二夜百首御歌神祇

千五百番歌合

同

承久二年四季百首春神祇

例幣

正治二年百首

述懐八首百首歌合（いはし水）

八幡宮にたてまつりける

永久四年百首石清水臨時祭

同

神風ややへのさかき葉がさねてもみもすそ河のすゑそはるけき　後鳥羽院御製

なかれ出てみあとたれます水かきは宮河よりやわたらひのしめ　四条行宗上人

人ゑれすも〳〵枝の松をたのむかなふちの末葉もあはれかけなん　皇太后宮大夫俊成卿

神ち山もゝえのまつのときはかけときはに君をまもりけるかな　慈鎮和尚

神ち山たまかきこしにみわたせは杉間にたかきちきのかたそき　僧正行意

いすゝ河そのみなかみをたつぬれは神ちの山にかゝる志らくも　嘉陽門院越前

すゝか山神ちの宮ゐふりはへてよをたてそめしあまのみはしら　従三位行能卿

古来歌

よろつ代に君もすめとやいすゝ河志たついはねの志きなみの聲　従二位家隆

みもすそのひろき流にてらす日のあまねきかけはよもの海まて　後京極摂政

神風やみもすそかはのいはしみつ君かためとやすみはしめけん　従二位家隆

すゝか河やそせのなみをへたてゝもわか神風にきみをいのらん　嘉陽門院越前

みてくらのたつやいすゝの河浪に山のもみちもぬさやたむくる　前中納言定家

君か代は山田の原にたつちきのちたひかはらむほとはかきらし　土御門内大臣

いはし水すみはしめけん月影のみつのころもにかけそうつりし　衣笠内大臣

石清水まつ風高ぐかけみえてたゆへくもあらすよろつ代までに　貫之

たつ程のかさねかはらけなかりせはおほえて淀の渡りせましや　後鳥羽院御製

をとこ山かさしの花も春なれはをみのころもはゆるなりけり　仲實朝臣

同

石清水三首歌合社頭松

同

同

同

同

同

同

同

同

同社歌合

いなりによみて奉りける

中の社（いなり山）

御集名所述懐

社霜を

あとのみや

保延元年家成卿家歌合祝（いはやとの神）

春日社歌合（いはひぬし）

男山みねのさゝらにもろひとのかさしのはなをたゝへてそみる　源兼昌

はこさきや松吹風にのこしけりなみのほかまてなひくひゝきを　左右大臣

新撰古神祇

やはた山あとたれそめし志めのうちになほよろつ世と松風そ吹　後鳥羽院御製

千世へても君そみとりのいはし水みゆきを松のかけやとしけり　前大納言忠良卿

神かきやゆきめくりても君そみんおひそふ松のよろつよのかけ　嘉陽門院越前

君か代を祈る志るしはみつかきやおひそふ松のいく千代かへん　皇太后宮大夫俊成卿

をとこ山みねの松風かみさひてこすゑにかよふあさくらのこゑ　後鳥羽院中納言

男山たねやまきけん我きみの千世におひあひのみねのわかまつ　大蔵卿有家

神やまにおひそふ松の千世ことに君かためとやいのりおきけん　俊成卿（女イ）

新後拾神祇

八幡山神やきりけんはとのつえおいてさかゆくみちのためとて　家長朝臣

いなり山みつすきなかにますか神わかことたてゝ頼むかひあれ　同

明玉

とちはてし我みちひらけ春日山かみのみともるありあけのつき　慈慶法師

かすかなるゆきあひとのに置霜のふりていくとせ神さひぬらん　後九條内大臣

みそらより跡たれたりしあとの宮その代もしらす神さひにけり　正三位知家卿

君か代のつきせぬかすはいはやとの神はかりこそ空に志るらめ　光俊朝臣

きみかよを祈る心にまかせたるいはひぬしとはかみの御名なり　神祇伯顕仲卿

卜部兼直

題歌中（いなつの神）

建長八年百首歌合（にふの神）

この月は神の事するしとおもふ（はしもりの神）

久安百首神祇歌中（とよたまひめ）

日吉社懐五首歌合（わづらひの神）

賀茂神を（らけいかつちの神）

家集神祇歌（かすが）

逢ことをたのみたのまずいせくなるいなつの神の聞もはなてや　明賢

河かみのにふのいほりのまきのいたとりてそいはふ萬代までに　光俊朝臣

ことつけん人もなければはみやまなる葉もりの神を思ひこそやれ　成尋法師母

いまさらにゆくへも去らぬ我こひはとよたまひめの心こそすれ　左京大夫顕輔卿

いさなきのぬきしころもゝなき物をなと逢ことにわづらひの神　法橋顕昭

此歌判者云日本紀に伊弉諾尊衣をぬきておき給ふかば煩神となれる事にや此ちかきことにあらずと云々

纏拾神祇

あまくたるわけいかつちの神しあれは治りにける天の去たかな　後京極摂政

新拾神祇

三笠山ふもとをめくるさほかはのさして祈りし身をたのむかな　藤原長能

このうたは鹿島の社に跡宮と申社は大明神のはじめて天くだらせ給し所也と云々

かしま（常陸）

神さふる鹿島をみれはたまたれのこ總はかりそまたのこりける　同

此歌は鹿島といふ島は社頭より十町ばかりのきて今は陸地よりつゝきたる島になん侍りその所につぼと云物のまことにおほきなるが半すぎてうづもれてみえしを先達の僧にたづねしかばこれは神代よりとゝまれるつぼにて今にのこれるよし申侍りしこそ身のけはよだちておぼえ侍りしかこがめぞ事たが

鹿島社

建久二年百首神祇百首歌、賀茂）

家集曉神樂

光明峯寺入道摂政家百首（賀茂）

十題百首

神祇歌中

六帖題ふも月

春日社法樂御歌

賀茂神主重保におくりたる十首歌中

ひてよめりけると云々

鹿島のやわしのはかひに乗てこしむかしの跡はたえせさりけり　後京極摂政

かしまのやひはらすき原ときはなる君かさかえは神のまに〳〵　前中納言定家卿

かも山のたかねにかゝる白雲やわけしなこりのそらのかよひ路　参議雅經卿

神山のむつきのなかは月さえてとりのはつねに御戸ひらくなり　従二位家隆

かみ山のみねのまさかき萬世にかをかくはしみたちそさかえん　大蔵卿爲家

秋の田をかものかはせにこきよせてたれも千年を松のかはふね　寂蓮法師

神山にあまのいはふねこきよせてつなきそめしもわか君のため　賀茂氏久

新六

霜さゆるかものかはらに駒なめてみちゆきふりの山あゐのそて　正三位知家卿

神かきやてかひの去かのなつけより去りぬひしりのあまのは衣　慈鎮和尚

去めのうちにくもかとみゆる櫻花あまくたりけんむかし思ほゆ　殿富門院大輔

家集

みそきして眺めわひぬるゆきもよに神のひほろきとくる嬉しさ　二條太皇太后宮大貳

此歌は賀茂にこもりたるにゆきのいみじうふるに心ぼそくてうちながむる程に神の御おろしとてくほてをいれたるによめると云々

神山のまさきのかつらくる人そまつやひらでのかすはかくゝ　和泉式部

此歌は神祭日人々きてかしはのあるをとりて歌かきてとせめ

家集（かゝみの神、肥前）　紫式部
題不知（かみ河合の神、山城）　爲綱卿
建長七年頭朝臣家千首歌　源仲遠
神祇（よしの、神、大和）　正三位季能卿
千五百番歌合（玉津島、紀伊）　殷富門院大輔
百首歌　よみ人しらず
社（たむけのかみ）　荒木田延季
神祭歌龍除寺（たきのはら、磯原、伊勢）　俊頼朝臣
家集（たるみの神、和泉又摂津）　祝部成賢
社頭會花を（なゝますかみ、近江）　參議爲相卿
閑居百首中　藤原伊行
仁安二年八月經盛卿家歌合　法印定爲
正安三年日吉社歌合　前中納言定家卿
百首歌（大原、山城）　同
十題百首神祇（くまの）　參議雅經卿
建保四年百首　正三位季能卿
千五百番歌合（くゝのちの神）

ければよめると云々

新千載

あひみんと思ふ心はまつらなるかゝみのかみやそらに玄るらん

そのかみをおもひそいつるかはあひの神にもなれし冬の夜の月

たらちねの親のつくれるみ吉野のよしのゝ神は見るもたふとし

なかめけんくものふるまひ空はれて月かけきよき玉つしまひめ

玉津島あかぬ宮井のみつかきにいくとしなみをよせてすくらん

六四

君を思ふ我こゝろしそみえぬへきたむけの神もいかゝおもはん

玄らいとのたえすおちくるたきの原あとたれ初て幾代へぬらん

おりのほる人たのめとやこゝにしも跡をたるみのあけの玉かき

よろつ代のはるにもあかし八重櫻なゝますかみの玉のみつかき

めくりあはん契りの末は長道磐の神の玄るへをたのむはかりそ

とけやらぬひとの心はつらかからでむすふの神をうらみつるかな

大ひえやいのる玄るしを三輪の山かけをしわたる杉のこすゑに

思ひのみおほ原野邊にとしへぬるまつことかなへ神の玄るしに

雲かゝるなちの山風いかならんみそれはけしきなかきよのやみ

み熊野のはしめのとしをかそふれは我身に殘るうらのはまゆふ

くゝのちの神もうらめしいかなれはあたに櫻のはなとなりけん

（くにつかみ、近江）
百首御歌
（やなあひの神、伊勢）

家集（松尾、山城）
久安百首神祇歌中（藤しろの神）
家集神祇歌中（こやれのかみ）
（ことのまゝのかみ）
題不知（あすはのかみ、足羽、越前或上野）
久應元年社百首伊勢（あらがれの神）
家集（あらがみ）
丹波國あまてるの社にて（あまてる神）
あさ日山のふもとに神祭する所（あさ日山の神）
家集（ささたまの神、未國）
雪朝右近馬場にて（ささたの、山城）

小侍從
光明峯寺入道攝政
四行上人

や玄まもるくにつみかみにいのりおきてちとせは君か心也けり

さゝ浪やくにつみ神のますかゝみかけていてたる月のさやけさ

世中をあめのみかけのうちになせあら玄ほあみてやをあひの神

此歌は公卿勅使に土御門内府宰相にてたちけるをいすゝ河の

ほとりにてみてよめると云々

玉かきはあけもみとりもうつもれて雪おも玄ろきまつの尾の山

ちはやふる君か千とせを松の尾にかゝりてさけるふち玄ろの神

あまてるや月日とあふく人のよをいかにこやねの神やすてつる

郁芳門院安藝

神かけてたのみしかとも東路のことのまゝにはあらすそ有ける

萬六

庭中のあすはの神にこしはさしあれはいはゝむかへりくまてに

民部卿爲家

あらかねの神の初めにあとたれしみやゐの山はときはかきはに

相模

浪につきて磯わにいます荒神は潮くむきねをまつにやあるらん

よみ人しらず

おほえ山むかしのあとのたえせぬはあまてる神も哀れとやみん

民部卿爲家

四行上人

あさ日山ふもとをかけてゆふだすきあけくれ神をいのるへき哉

丹波忠茂朝臣

和らくる光をはなにかさゝれて名をあらはせるさきたまのみや

實方朝臣

古來歌

神かきのとしふるまつにことよせてひとよにつもる野への白雪

四行上人

參議長成卿

社頭月

小野にまうでゝ　　鎌倉右大臣

月のすむきたのゝみやのこ松はらいくよをへてか神さひにけん

久壓元年七社百首北野　　太宰大貳高遠

いのりこふことの玄るしと北野なるうへの垣根の松そみえける

島中有神の頌方（ささかたの神・一方、出羽又筑前）　　民部卿爲家

神はよもうけしなたけの言の葉もかさなるよゝのあとを守らば

文永八年毎日百首中（祇園、山城）　　能因法師

寶治二年百首（さぶれのみや、山城）　　民部卿爲家

屏風に四月家神祭所（わかやとの神）　　衣笠内大臣

寶治二年百首寄〻社祝（みむろの神、大和）　　能宣朝臣

たむけ　　正三位知家卿

千五百番歌合（みたらしの神）　　同

家集女のもとに（みこもりの神）　　野宮左大臣

六百番歌合祈戀　　藤原長能

相模國みたけ山奉納歌　　正三位經家

家集（さほがま、陸奥）　　前大僧正隆辨

十題百首神祇（さら山、加賀）　　爲仲朝臣

日吉社十五番歌合（ひよし、近江）　　前中納言定家

あめにますとよをか姫にことゝはん幾代になりぬきさかたの神（古代神祇）

かさにさすやま鳥の尾のなかき日に神のそのとそ今日祭るらん

つのさふるきふねの宮の榊葉のちよとさしてもあかぬ御代かな

み室山みねのさかき葉よろつよにをりてまつらんわかやとの神

よゝかけて祝ふ三室の神やつこいやとこしへにいのりまつらん（現存六代）

みむろ山とほつ宮井の神さひてかせのみはなのたむけをそする

戀すともつひにあふせを祈るかなこれをはうけよみたらしの神

ちはやふる天のいはくらおしひらき我にをかたれみこもりの神

もろこしに今はなりなんみ籠りの神の玄るしはありとこそきけ

古へのよしのをうつすみたけ山こかねのはなもさこそさくらめ

ちはやふる神もねのひと思へはやけふりたなひく玄ほかまの松

おもかけにおもふそさひしうつもれぬほかたに冬の雪の玄ら山（新古神祇拾玉集一）

もろ人のねかひをみつのはま風にこゝろすゝしき玄ての音かな

信成卿日吉社會社頭冬　　從二位家隆

同社頭歌合社頭松風　　前中納言定家卿

久永五年毎日一首中神祇歌　　民部卿爲家

同　　同

同　　同

弘安日吉一品經歌　　正三位能清朝臣

同　　通基卿

同　　左近大將家教卿

嘉元三年慈忍百首日吉七社歌　　從三位爲實卿

同　　同

客人宮　　祝部國長宿禰

あはれとはとをの聖もかそへしれことしも冬のなかはすきぬと

たのみこし春しもみつのかはよとにいまさへ松の風そひさしき

幾千代の玄るしなるらん今日まつる神のみゆきのからさきの松

からさきのはまのさゝ浪立かへり今日こそ神のみゆきなるらし

とにかくにねとくそあふくひよしのやいのる心を神にまかせて

きたのみねふかきみのりをあふく哉神は日吉のかけをならへて

天くたる日吉の神の玄るしとやをひえのすきのこたかゝるらん

さしてなほ日吉のかけのくもらぬやみふねをよせし梢なるらん

からさきの松の木すゑにふねのほせ玄るしをみせしみわの神杉

からさきの松にみふねをとゝめおきて心をよせしさゝなみの跡

みな月の空よりふりし雪にこそあとたれけりと世にも玄らるれ

みつかきにうゑて玄めゆふ花なれはにほはん春そ久しかるへき（現葉）

この歌は日吉の本社に千本の樹をうゑて千首の歌を人々にすめて侍けるとき寄〻樹春といふことをよめると云々

建保四年日吉歌合社頭松風　　後九條内大臣

神さふるみとのゆふしてうちなひきかはらぬちよの松風そふく

三社歌中（ひろた）　　前中納言定家

あはれひを廣田のはまに祈りてもいまはかひなき身の思ひかな

ひらの　　同

玄ら玉のみかとの親のおほちこそひらの〻神のひゝこなりけれ

これは平野の神の御歌となん

六帖題ちかふ（ひたちの神）

ころもてのひたちの神のちかひにて人のつまをも結ふなりけり　權僧正公朝

仁安二年二月清輔朝臣家歌合祈神戀（ひとことぬし、二首、山城）

あふことをはるとや人も契るとて一ことぬしにねきそかけつる　法橋顯昭

この歌は判者衆議云よるとや人もちぎるとかづらきの神をいのられけんもゆゑありてともにおもしろければ持とぞ申あはれたりしと云々

祈神戀

御集（ひろせの神、廣瀬、山城）

つれなさを一言ぬしにいのりみんとけぬつらさは思ひ知るらん　登蓮法師

永仁大賛會（もろかみ）

たむけする廣瀬の神の知るしあらはこひの涙のふちもあせなん　衣笠内大臣

家集（すさのを、出雲）

あまてらす日陰のたすきかけまくもかしこく守れ八十のもろ神　前中納言俊光卿

すさのをの命を祈るともなしにこえてそみましなみのやへかき　和泉式部

やはらくる光やそらにみちぬらん雲にわけいる千きのかたそき　寂蓮法師

この歌は出雲の大社に詣でみ侍ければあまぐもたなびく山の中までかたそぎの見えけるなんこのよのことゝもおぼえざりけるによめると云々

家集月歌中（すくなみの神、鞆前）

月みれはすくなみ神そうらめしきにしには山をつくらさりせは　俊頼朝臣

住吉社にたてまつりける百首（すみよしの神、摂津）

同　拾玉二

のりのはなちり去む去ろにのそみてやひかりをましゝ住吉の神　慈鎮和尚

同　いしかはのつかのむかしをたつねしをあはれとやみし住吉の神　同

同　君か代にひさしくにほへ住吉のまつにちきりしもゝくさのはな　同

三社歌

つれなくも猶すみのえにたむけ草ひきすてられし道のくち葉を　前中納言定家卿

建保三年内大臣家百首神祇

すみよしの神代の松のあきの去もふりてもひさしみつの玉かき　大藏卿有家

住吉社にて祈月

かたそきのゆきあはぬまよりもる月の冴てみそきの霜に置らん　四行上人

同社百首御歌

みたれゆくよにこそたのめもろこしをわかくにゝなす住吉の神　慈鎮和尚

同社三十首

とそちつゝよつの社のくはへますたまの緒なかく君そさかえん　從二位家隆

承安二年廣田社歌合述懷

すみのえにむこのうら風立そひてふたゝひ神のめくみをそみる　道因法師

判者俊成卿

新拾遺神祇

行家卿よませたる住吉歌合社頭祝

君かためたまてのきしにやはらくる光のすゑはちよもくもらし　津守國平

社付宮

資治元年十首歌合社頭祝

いすゝの宮

ちはやふるいすゝのみやのますゝ鏡くもらぬ御代を照すとそきく　大納言雅忠卿

建保三年名所百首（いせなのみや）

月影もたえすやすまんすゝかゝはいせをの宮の世々のふるみち　兵衛内侍

資治元年十首歌合社頭祝（いせのみや、伊勢）

神かせやいすゝのかはのいそのみやとこよの浪の聲そのとけき　花山院内大臣

千五百番歌合（とようけのみや、伊勢）

そのかみや祈りし事はとようけの去るしそ君かめくみなりける　土御門内大臣

久安百首（たやしろ）　上西門院兵衛
うなゐこかかきねにいはふを社も思ふことたにならはたのまん

久治二年百首神祇（かものやしろ）　前中納言定家
きくことにたのむ心のすみまさるかものやしろのみたらしの聲

脚不知（かるの社、壇大和、かぜのみや、伊勢）　よみ人しらず
天飛やかるのやしろのいはひつき幾代迄やらんかくれつまそも

家集（かぜの宮、伊勢）　四行上人
この春ははなををしまてよそならんこゝろを風の宮にまかせて

同かつまの宮（周防）　元輔
ちはやふるかつまの宮のひめこ松おいを手向てつかへまつらん

建保三年内大臣家百首賀茂（たゞすの宮、山城）
名にし負はうき世の人のいつはりをたゝすの宮に任せてそ見る　慈鎮和尚

家集（たきのみや、伊勢）
なみとみる花の玄つえのいは枕たきのみやにやおとよとむらん　四行上人

六帖脚（つしやしろ）
新六二　道のへの木の玄たかけのつし社たれなほさりのぬさたむくらん　信實朝臣

中務卿親王家歌合社（つまやしろ）
草ふかき野なかのもりのつま社こやはなすゝきほにいつるかみ　權僧正公朝

建保元年十首歌合（なゝの社、近江）
君か代を萬代とこそかそふらめなゝのやしろのみつのひしりは　慈鎮和尚

百首御歌　同

六帖脚社
二なき八とせのゝりをまもるとてなゝます神はあとをたれける　衣笠内大臣

承元三年長尾社歌合社頭梶花（ながをの社）
やをとめのふるてふすゝのころ〳〵になゝの社は宮井せりとそ　前中納言定家

家集（なゝのをやしろ（大和））
たむけして非やゆくらしちはやふるなかをの宮の花のゆふして　二郎百首

文永六年毎日一首中神祇歌神寶（ならひのみや、伊勢）
祈ることなゝのを社ころ〳〵とことなはせよくくちはしるなり　俊頼朝臣

たきのはらならひの宮のかみたからなほするゐつゝきおきつ白浪　民部卿爲家

弘安百首歌（むすぶの宮、未國）　撿校法親王

御集（うちとの宮、内外宮、伊勢）　鎌倉右大臣

六帖脚御歌ことの葉　中務卿のみこ

正八幡宮を（うさのみや、宇佐、豐前）　後京極攝政

家集（龍除祭、うみのみや、伊勢）　四行上人

神祇を　正三位季經

建長八年百首歌合（ゐでの社、未國）　前大納言顯季

後鳥羽院御詣の時本宮山三首歌（くまのゝみや、紀伊）

寛治二年百首歌社祝（くにつ社）　前中納言定家

神祇歌（けひのみや、越前）　民部卿爲家

百首御歌（ふるの宮、大和）　行遍

三百六十首中　順德院御製

ちはやふる熊野の宮のなきのはをかはらぬちよのためしにそ引（はゝ）　好忠

あきつしまくにつ社のあきらけくまもりはくゝむ御代の久しき　明玉

山をきるつるきをみねに殘しおきて神さひにけりけひのふる宮

いくとせのかけとか神もちきるらんふるのやしろのすきの下風

ひはらもるふるの社の神やつこはるきにけりと玄るらめやそも

なきの葉にみかける露のはや玉をむすふの宮やひかりそふらん

はたすゝきおはなかりふき神風やうちとの宮はよろつ代までに

をかたにゝかたちうつりし神代より傳へて久しやまとことのは

わたのはら浪ちへたつるうさの宮深きちかひはよゝにかはらし

朝日さすかしまのすきに夕かけてくもらすてらせよをうみの宮

諸人をはくゝむちかひありてこそうみの宮とはあとをたれけめ

あつまちやはりのゝ玄水えてしよりゐての社はなつけそめてき

此歌判者光俊朝臣云ゐでの社は昔景行天皇の御時針野に（獵字脱歟玄）

給ける時寒水をえて卽社を被立たりけりかの夏后氏以松殷

人以柏やしろをいはひけんもゝこしまでもおもひよそへら

れていみじく侍ける和漢雖隔尊意是同と云々